
出会いと別れは嵐の予感

密林系紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会いと別れは嵐の予感

【Nコード】

N0951S

【作者名】

密林系紳士

【あらすじ】

歴史的には、何の価値も意味も無い事実。
それまでの自分を失った彼は、どのような人生を歩むのか。
そして、何を望むのか。

第一話 死と生と死と（前書き）

一ヶ月ほど休んでいた間に一話だけ書けていたので、投稿することになりました。

一応、ゼロ魔の方をメインにやってますので、更新はかなり遅くなると思います。すいません。

区切りのいいところまでは書こうと思っていますので、お付き合いいただけたらと。

第一話 死と生と死と

究極の選択、という言葉がある。

他に一切の選択肢が無く、それを正解しなければ命に関わる、というアレである。

当然、そんなものを失敗すれば、手痛いしっぺ返しを受けることになるわけだが、他に選択肢が無い場合はどうすればいいのだろうか？私はそう考えてもう一度、目の前に置かれた物体を見た。

大きさは小ぶりのメロンくらいで球形。

基本色は濃い紫。

全体に空色で構成された渦巻き模様がある。

シルエットだけならどう見ても果物なのだが、色が識別出来てしまふと全くそうは見えない。

見たことが無い植物の果実なわけだが、端的に言っても食用に適しているとは思えない。はっきり言えば毒がありそうだ。

さすがに植物に詳しくない私でも、この紫と空色が「喰ったら死ぬぞ！」という警戒色であることくらいは推測できる。

けれどもなぜかそれが私の目の前に存在している。

それは何故か。

私が現在、死ぬ寸前だからである。

話は数日前に戻る。

私はゴーザ村という小村で漁師をしていた。

といっても個人でやっているだけなので、網なんか使えないから素潜りくらいだが。

家族はおらず、同じ村の人間からも疎まれていたので私と一緒に漁をしようと考えた奇特な人間もいない。私はまだ十代の半ばであるが、そんな境遇も5年以上甘受していれば嫌でも慣れてくる。

その日も私はボートで海に出ると、銚をもって海に潜っていた。

3時間ほどで大物が4、小物が5。悪くは無い数だ。

そろそろ帰るか、と思い、ボートに戻ろうとしていると、突然波が荒れ始めた。

それは、今考えても異常な光景だった。

それまで凪いでいた海が、急に物語の場面が変わったように大時化になったのだ。

私はなんとかボートまで戻ろうとしたが、見る間に我が愛船は荒れた波に流されていき、私は力尽きて海に沈んでいった。

そして気付いたら知らない島の浜辺に打ち上げられている。

最初は命が助かったことに喜んでいたが、それもすぐに絶望に変わっていった。

私が打ち上げられ、今もいるこの島は猛獣の宝庫だったのだ。

割と広い島なのだが、数分も歩くと明らかにこちらを食欲の意味で興味深そうに見てくる獣に出くわす。

必死に逃げるが、逃げている途中でまた他の獣に出くわし・・・と嫌なループで島の中を歩くことも出来ない。出歩くことが出来ない以上、木を切って船を作り、この島から脱出することも出来ない。

当然、そんな獣に銚も持たない漁師が勝てるはずも無く、なんとか見つけた洞穴の中に引きこもったわけなのだが、それでも匂いではたらしい。

洞穴の中にあつた岩で入り口を塞いでいるが、その岩がさつきからひっきりなしにガリガリと引つ掛かっている。多分、アレは三日前に見た全長3メートルはありそうな熊だろう。

この洞穴に入ってくるのも時間の問題か。

そんなモノに狭くて逃げ場の無い空間で襲い掛かれたら・・・

・まあ喰われるだろう。

先に殺されるか、生きたままかの違いはあるだろうけど。

そしてここで冒頭の問題に戻る。この洞穴を見つけた日、念のために奥まで調べると、宝箱を1つ発見していたのだ。なんとか生き残る目を探そうと必死に錆び付いていた鍵穴を手に持った石で殴るところと数十回。

生への希望を求めていた私の目の前に現れたのはいざと言うときの自殺用、と言わんばかりの珍妙な果物、らしき何かである。

喰ったら死。

喰わなくても死。

逃げ場はなし。

完全に詰んだ状況で私が何を出来るというのか。

だから、そう。

私がコレを食べることは仕方が無いんだと思う。

誰だってそうだが、私も自分が喰われながら死んでいくのは嫌だ。

私が獲っていた魚に同じことを強制していたとしても、自分が死ぬのならせめて楽に死にたい。

死ぬことよりも、その過程を恐怖するのは少し矛盾しているような気がしなくもないが。

それはともかく。

さようなら、特に楽しくもなかった日常達。

そう考え、私は果物を持つと、齧り付いた。舌が味を理解する前に飲み込み、全て胃の中に収めてしまう。

「うげ〜〜！？不味〜〜！！」

とりあえず後味は最低だった。

最期にいつも食べていた海鮮汁が食べたかったなあ、と思いながら目を閉じる。

ガリガリ。

ガリガリガリガリ。

ガリガリガリガリガリガリ。

ガリガリガリガリガリガリガリガリ。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリ。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ。

いつまでたつても音が鳴り止まない。私はもう死んでいるはずなのに。

観念して目を開けるが、そこは目を閉じる前と何も変わらない洞穴の中だった。

いや、少し変わった部分もある。洞穴と蓋になっている岩の間から光が入ったり消えたりしている。

アレは蓋がグラついているせいだろう。ということはもう少しで熊が入ってくるわけか。

しかし、私が食べた果物は毒ではなかったのだろうか？

もしかしたら遅効性の毒なのかもしれないが、だとしたら最悪だ。

喰われながら毒の苦しみも味わうわけだから――

ガバツ。

とうとう岩が洞穴から外れ、大きな音を立てながら転がっていく。

一メートルもしない位置には岩ほどではないが、巨大な影がある。

逆光になっているせいでよくは見えないが、全長3メートルの熊であることは間違いないだろう。

この島の過酷な弱肉強食カーストを生き抜いているためか、左目が傷で潰されていた。

グオオオオオオオ！！とか人間には発声不可能そうな雄叫びを上げている。

その影が、腕を振り上げた瞬間。

「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

私は反射的に目をつぶったまま、手を前に突き出した。

手の平が生暖かい鼻先に触れるが、そんなもので止まってくれは
ずも無いのに。

そして、今度こそ自分が終わる瞬間を待つ。

今度は煮魚が思い浮かんだが、それはともかく……………?

おかしい。

いつまでたつても痛くも痒くも無い。

恐る恐る目を開けると、間近にあった影は腕を振り上げた不自然な
格好のまま固まっていた。

何故に?

人差し指で突っついてみるが、何の反応も無し。

いきなり死んでしまったのだろうか?

でも、こんな格好で?

「元々死にかけていたのか……………」

そんな言葉が口から出てくるが、自分でも信じられない。さっきま
で殺す気満々で私に襲いかかろうとしていたし、まずそれは無いだ
ろう。

意味不明な熊の死骸?に恐怖を覚え、とりあえず洞穴を出ると、海
岸の方に向けて歩き始める。

数日ぶりに太陽の光を浴びて、今更ながらなんでこんな目にあって
いるんだろう?と考え、かなり落ち込んだ。

次にこれからどうしようか、という切実な問題が頭の中を占める。

もう4日も何も食べていない。水は洞穴の近くに沢があったからそ
こで飲んでいたが、固形物を口に入れていない。

魚を獲ろうと木と石で作った銚を手に海に入ろうと考えたこともあ
ったが、わざとらしくらいにこの島の周りの海には大型の鮫が多
数生息しているようだ。

八方塞がり。やはり、餓死は避けられないのか。

そう考えて暗澹していると、何かの音がした。

ジャリ、ジャリ、と私以外の足が砂浜を踏みしめて歩く音。

最近磨かれている警戒能力をもって後ろにいるのが肉食獣であることを確信する。

自由への疾走！

しかし回り込まれた！

そして再会！

なんとそこにいたのはさつき洞穴の入り口で死んだはずの熊だったのだ。

見間違いかと思ったが左目が傷跡で塞がれているから間違いはない。死んでなかったのか？

そんな疑問を思い浮かべた瞬間、熊は勢いをつけて私に飛び掛る！「うわわわわあああ！？」

私は再び自分に押し掛かってくる巨大な影に、手の平を向けて差し出す。少しでも自分から相手が離れるように。

そして、見た。

放物線を描いて向かってきた熊が、空中で停止する瞬間を。

「はあ？」

驚いて手を引っ込めるが、熊は洞穴でそうだったように身動き1つしない。

しかし、さつきとは決定的に違うことが1つ。熊は空中で浮かん
だまま、停止しているのだ。

まるで理解の及ばない環境。

まるで範疇の越えた状況。

中心にいるはずなのに置いてけぼりにされた私はただ呆然とへたり込んでいることしか出来ない。

自分を取り巻くわけの判らなさを、私が正確に理解できるようになるのはもう少し後のことになる。

それが超人系悪魔の実、ピタピタの実の能力であることを。
そして、誰にも望まれていない、私自身すら望んでいない私の物語
がその瞬間、始まっていたことを。

第一話 死と生と死と（後書き）

なんか悪魔の実の案って掲示板なんかで既出のものが結構あるんですね！。

この主人公の食べた実と同じ名前のも某掲示板にのってましたし。

第二話 決意と現実（前書き）

ゼ口魔の方が中々進まないのどこつちを書いています。
あれ？でも気晴らしになってないよ？

第二話 決意と現実

力が無いから、出来なかった。

力が無かったから、諦めるしかなかった。

弱者の常套句。

卑怯者の言い訳。

口にした私自身、理解はしている。

それは真実の一面ではあるが、しかしあくまで一面でしかないということを。

結局のところ、私は逃げただけなのだ。

認めがたい現実と、自分自身と向き合うことから。
けれども。

偶然力を手にしただけの弱者は、どうすればいいのだろう。

力という足かせを嵌められた後では、もう自分を守る言い訳も、縋るための灯りも存在しない。

私は、どうすればいいのだろうか。

答えてくれる者は、いない。

「ごあぁつつつつつつ！！！！」

数メートル先から、巨大な肉食獣が襲い掛かってくる。

大きな口を限界まで開けて、あれでは人間などひとのみにしてしまうのではないだろうか。

勿論、スピードも充分に乗っているから、避けようがない。素潜り漁はしていたが、いかんせんこういう咄嗟の行動はまだ出来ない。

相手もそれを判っている上で私を襲っているのだろうけど。

何もせず、否。

何も出来ないまま、その体当たりを受ける。

だが、私の身体は小揺るぎもしない。

地面に下ろした裸足も、加重も衝撃も、まるで何の変化も無い。

その代わりに、鈍い音を発てて私に襲いかかって来た虎が地面に落下する。

死んでいるわけではないが身動き1つしない。

よく見ると、その身体の表面に黒い靄のような何かが漂っているのが判る。

熊のときと違って多少調節してみたのだが、私自身判っていないことが多いので、実地で検証するしかないのだ。

とはいえ概ね検証していたことは成功で、虎は今地面に転がっている。

今の感覚だと、多分一時間は止まったままだろう。

それじゃ、今のうちに仕留めておこう。

その尻尾をズリズリと引きずりながら思う。

もう少し鍛えたほうがいいのかもれない。いずれ、この島を出るときのために。

遭難してから数日が過ぎていた。

結局浜辺で熊に襲われた後、私が判ったのは、生物無生物に限らず私の触れると途端に止まる、ということ。

止まる、というのも漠然としているが、そうとしか表現のしようが無い。

浜辺まで追いかけてきた熊も、今日森の中に入った途端に襲いかかって来た虎も、私の身体に触れた瞬間に止まった。

では何故そうなったのか。

その疑問の答えは程なく解決した。

私が食べた果物のような何か。あれが悪魔の実だったのではないだろうか。

悪魔の実。

海の悪魔が宿つていると言われる、奇妙な果物。

食べれば海から嫌われ一生泳げなくなる代わりに、1つだけ、人知を超えた能力を与えられるんだとか。

書物で読んだ程度の知識しか無いが、私の今の状態はまさにそれではないだろうか。

一応、触れた物が停止する以外に確証が欲しかったので、浜辺で足に波を被ってみたのだが、いきなり足がフラつき、危うく足首までしかない波にさらわれそうになった。

つい数日前まで素潜り漁が出来る程度には泳げていたのだから、これはどうやら間違いないらしい。

この力があれば、この島でも生きていくことが出来る。

食事についても能力を使用すれば、えり好みをしない限り問題ないだろう。

目的地にようやく到着し、あらかじめ予めそこに掘っておいた穴に停止したままの虎を苦勞して放り込む。虎は頭を穴の底に向けて落ち、数メートル下で鈍い音を發てた。

それから、近くに生えていた木から大きな葉を千切りとり、能力で停止。

そのまま金属のように硬くなった葉を簡易スコップにして掘り返しておいた土を穴に戻す。

この島の生き物は総じて普通よりは生命力が高いようだが、それでも停止から解除された後数時間も生き埋めにされていたらさすがに生きてはいないだろう。

肉はその後で掘り返して切り分ければいい。

自力で仕留めるだけの能力があればこんな手間をかけなくてもいいのだが、しかし今の私には全長7メートルの虎と停止させずに戦って勝つだけの能力が無い。

相手が私に触れれば、その瞬間に停止する。そうすると私も相手に攻撃できない。

私が攻撃したときのみダメージがあるわけだから自然と一方的な消耗戦になるのだが、しかし地力が違う。

相手は争いごとを生まれてからずっと繰り返して生き残ってきた野生動物。

対して私はずっと漁師をしていたとはいえ、荒事などほとんどしたこともない。

だからこそこういう手段をとっているわけだ。

だまし討ちみたいなので多少引つ掛かるところがあるが、それでも自分の命には優先しない。

戻した土をポンポンと叩き、目印の木の棒を刺す。

暫らくしたら、掘り返してご飯にしよう。

それまでにもう少し検証することにした。

新しい埤はくにしている木の上の家まで戻ると、蔓で作った縄梯子を仕舞ってから床に座り込む。

この家の大きさは人が三人も入れれば一杯、というところだが今のところ増える予定も無いので問題無い。

むしろ、広すぎて寂しくなってくるから多少小さくしようか？と思っている。

構造はいたって簡単で、木の枝と竹、木の葉を私の能力で固定しているだけだ。通気性や雨除けも完備している。

なので定期的に家の各部を触って固定しなおす必要があるのだが、一人で簡単に作れるテントと考えれば快適なことこの上無い。

・・・と、家談義はともかく。

拾ってきた木の葉をポケットから出し、右手に持ってからそれを空中で離す。

木の葉は重力に逆らい、手を離れた位置で停止していた。試しにそれを小突いてみるが、ビクともしない。私の力が弱いだけなのか、それともこの能力が強いだけか。

ともかく、木の葉はそのまま数秒停滞した後、唐突にヒラヒラと空中を舞い始め、床に落ちた。

それを拾い上げ、また同じ動作をする。しかし、今度は木の葉はすぐに床に落ちた。

それも、さっきのように空中を揺れ動くのではなく、空気抵抗など無いかのように垂直に。落ちた瞬間には木の葉にあるまじきカッ、

という音までしている。

再び拾い上げたそれは、やはり黒い靄のような何かに覆われ、持っている手に力をこめても変形しない。

どうやら、私の停止には二通りあるようだ。

1つ目は、接触したものを重力を無視して完全にその場に固定する停止。

これは、実を食べてすぐに熊に使用している。

2つ目は、接触したものの自体は停止しているが、座標を移動させることは可能な停止。

さっきの虎やスコップ代わりにした木の葉に対して使ったのが、これだ。

両者とも、一旦停止すると設定した時間が切れるまで私自身にも解除できない。

もしかしたら、2が本来の能力で1はあくまで周囲の空間まで巻き込んでいただけなのかもしれないが、私自身がイメージしやすいように2通りに考えておいたほうがいいだろう。

今のところ、判っているのはこんなところだろうか。

教本など無いので、手探りで自分の能力を確認していかなければならないのは手間がかかるな。その分、しっかりと自分の身体に覚えこませられる、という利点はあるのだが。

少なくとも死ぬ心配がなくなってきたお陰で今は多少考え事をする余裕もある。

私はいずれ、この島を出る。

それがどのような手段かは判らない。

ある日偶然船が通りかかって救出してくれる、などという甘すぎることはないだろうけど。

ああ、でもあの実を宝箱に隠していた人間が来る可能性はあるか。

一応、自分の能力で出来ることを考えているが、それにしただって今後の伸びしろ次第だ。

とはいえ、首尾よくこの島から故郷に帰ることが出来たところで元

の暮らしに戻ることは出来ないだろう。

なにせ、私は既に海での漁が出来なくなっているのだから。漁師は廃業するしかない。

勿論、素潜り以外の方法を考えれば出来ないことも無いかもしれないし、悪魔の実の能力を使用すればそれまでよりもっと良い暮らしが出来るだろう。

しかしそれとは別の問題も存在する。

私は、力を持ってしまっているのだ。

私は私でしかない。それは力を持ったところで変わらない。

私は私以上にも私以外にもなれはしない。

だからこそ、自分からは逃げられはしないのだ。

私の根底にある、目的からは。

とはいえ深刻に考えてみても、私が斬った張ったの方面では素人であることは変えようが無い。

身体にしたって無駄な肉はついていないが、逆に言えば、筋力が足りない。

確かに私の能力は本で読んだ知識と比較しても少し変わっているようだ、能力だけでどうにかなるなら世界政府が今もなおのさばっていられるわけもない。

最近では革命軍、などという名前の輩もいるらしいがそれにしただて散発的なもので結局は何も変わらないのではないだろうか。

いや、勿論私の目的は世界政府の転覆、などといった曖昧かつ大それたものではないのだけど。

私自身と同じく、いたって普通かつありふれたもので、高尚さとは無縁なの فقط。

それでも、私のなさなければならぬことなのだ。

とりあえずは、筋トレや野獣相手の訓練から始めていこう。

遺憾なことではあるが、素質自体は申し分ないだろうから。

第二話 決意と現実（後書き）

なんか主人公が一切喋ってませんね。投稿寸前に気付きました。

第三話 郷愁と足枷

激動と呼ぶことが出来る人生の転換期に入った今、特に思うことがある。

自分がただの漁師であつたころと今の生活の違いだ。

勿論、どちらも飢えない程度に食事は取れている。身体が鍛えられているし人生の明確な目標と向き合っている以上は今のほうが健全と言えるかもしれない。私の意思はともかくとして。

変わらない日常は良くも悪くも素晴らしいものだが、その本当の価値に気付くのは総じて失くした後の話である。

多分にもれず私も自分が失ったものを思うと、未だに後悔が尽きない部分がある。

別段あの場所が好きだつたわけでもないが、それでも今の私のように無人島でひたすら自分を鍛えることになるくらいなら、平々凡々と暮らしているほうがいい。

非日常というのは、人の心を沸き立たせる力を持っていても、それを持続させる効力までは持ち合わせてはいないのだ。

私がとことんまで状況が変わらなければ博打が出来ない性格であることも無関係ではないだろう。

だからこそ、今まであんな場所で生活することもできた。

周囲に埋没していれば、自分が誰なのかも気にしなくてすむのだから。

希望を捜さなければ、そも、自分が絶望に塗れていることを知らなくてすむのだから。

だが、私はすでにその生活から決別している。
過去を懐かしんでも、ただ虚^{むな}しくなるだけだ。

遭難してからしばらく経った。

具体的な日数は三桁に突入したあたりで馬鹿馬鹿しくなり、数えるのをやめているが、おそらくは数年が過ぎていることだろう。

この島は年中気候に変化が無いのであまり実感が無いが。

その間何か変わったことがあったかというところ、特別何もない。

毎日、日が昇ったら修行をして獲物を獲って肉や果物を食べて日が沈むまでまた修行して・・・の繰り返しである。当初は筋トレなどをしていたが、途中それが明らかに足りないことを自覚してからは多少無茶なあれこれをしている。

具体的には疲労で気絶するまでウェイトと呼ぶのも馬鹿馬鹿しい大岩を乗せて筋トレを黙々としたり、某所に数日閉じ込めて空腹にした猛獣から狭い空間でひたすら逃げ続けたり。もしくは能力を使用しないでの無力化とか。あとは能力を使用せずに正拳だけで森の木を倒したり、やっぱり大岩を背負って10キロ以上はある島の外周を10周するマラソンを日課にするとか。

今考えてみると、能力者とはいえ、よく生きていたものだと思う。実際、この島にきてからは大小様々な傷をつくっているし、死を覚悟するようなことも数度あった。

運が良かった部分もそれなりにあるのだろう。

というか、なんか人間の限界をいつの間にか超えてしまっている気がするのはいらないだろうか。

・・・・・・気にしないでおう。悲しくなってくるから。

とはいえその成果は確実に出ていこうで、筋肉は以前よりもかなりついているし、筋力も比べ物にならないほどに上がっている。敏捷性もかなり高くなっているはずだ。

基礎能力自体はかなり高くなっているの、とりあえずこの島で出来ることは終了していると言っていいだろう。

しかし、環境的に当然ではあるのだが対人戦は全くの未経験なので、多少不安は残る。いくらスペックが高くて技術が全く伴わなければ意味が無い。当然、猛獣と戦うのと人間と戦うのでは勝手が違うはずだ。

そして、悪魔の実の能力者も世界で私一人というわけではない。

特に、私の目的のある場所には能力者や魚人といった既知のもの以外にも未知の脅威が多数あると考えておくことが必要だろう。

備えというのはいくらあっても困らないのだから。

そういえば、能力者で思い出したが、そちらの修行もそれなりに上手くいっている。

やはり、最初に考えたイメージの分割が功を奏したのか停止させる持続力、範囲ともに最初とは段違いに向上しているようだ。

よりイメージを強固にするためにとりあえずはその場に固定する停止は「空間」、対象物だけの停止は「時間」と分類している。それが正しい認識かどうかは知らないが、単にそうしておくで私個人の使い勝手の問題が良い。

今もそれを使って調理をしているところだ。

獲った獣の肉を石で造ったナイフで切り分けているのだが、ナイフは素人が作ったものなので強度に不安がある。そういうときは時間固定の出番だ。地面を固定することでそらの地べたで切り分けても泥が肉についたりせず、しかも脆い素材のナイフも固定することで問題なく使用できる。

なんて便利！

いや、私の意図している用途とは方向性が違うのだが、それでも応用方法は訓練できている。

切り分けた肉に海水から造った塩をすりこみ、干し肉にする準備は完了。

自分が食べるために十分な肉はとったため、残りの臓物や肉は放置して家に戻る。

知識が無いため、臓物のどの部位が食べることができる判らないしこうしておけば、数時間と経たずに島の生き物たちが帰って帰って食べてくれるから、自分で始末する必要もない。

家に帰ると、伽藍とした空間が私を出迎えた。

木と石で作ったナイフや鋸、獣の毛皮といったここでの生活で手に

入れた調度品も増えているのだが、しかし生き物の気配が一切無いため、暖かさは感じない。

動物を捕獲して飼ってみようかと思ったこともあったが、そもそもこの島の環境で成長した獣が人に慣れるはずもなく、また小動物と呼べるような生き物もない。子供を捕まえて育ててみるか、と思案もしたが人間の戯れで子供を奪われてはその親子にあまりにも酷だろう。

問題なく育てられる保障もないのだし。

結果、私は今も寂しく一人暮らしをしているわけだが、ため息をつき松明で照らされ充分な光量のある室内で、床に座り込む。

すでに時間は遅いため、引き続き能力の修行を続ける。

とはいえ今は何も無い空間を器物の形に固定する方法を模索中だが、これが中々上手く行かない。

コレさえあれば、いざというときに能力で足場をつくることが出来るからそもそも海に落ちて溺れる心配もしなくてすむのだが、どうしたものか。

修行の成果で一応、条件付きで離れた場所のものを固定することも出来るし、地面なんかなら意図した形に固定して取り出すことも出来るのだが……。

島から出るためにはやはり船を作るしかないのか？
うん。

ここに来る原因になった異常気象に遭うと怖いから、いざというときのために習得しておきたいんだが……。

あるいは、やり方が根本的に間違っている可能性もある。

正しい正しくないや出来る出来ないは別として、私個人としては悪魔の実の能力は経験とイメージ次第だと思っている。

より経験を積み、同じ能力を行使しても無駄が無くなり、威力も高くなる。より具体的に強固なイメージを持てば、それを可能とすることも出来る。

そういう意味で、今私がしようとしている「空間を固定する」というイメージは曖昧であるのかもしれない。私自身、その概念じたいがよく判っていない部分も否定できないし。

……そういえば、空気というのは色々な気体の集まりだという説を何かの本で読んだ覚えがあるな。

その真偽は判らないが、能力者のイメージという観点からは悪くないかもしれない。

上手く行かないなら、発想を転換してみよう。

空間なんて漠然とした捉え方ではなく、そこにあるモノを固定するイメージ。

集中力を上げるために目を閉じる。

空間。空気。気体。色々なそれが混じっているイメージ。

その全てではなく、望む形にだけ切り分ける。

手に馴染んだものに。手に馴染まないものに。武器に。防具に。それ以外に。

構造。

把握。

分割。

鑄造。

整形。

造型。

固定。

そこまで考え、全ての工程が終了した瞬間。

ずぶり、という音がした。

目を開けると剣が一振り床に突き刺さっていた。当然、目を閉じる前には室内に無かったものである。

手にとると、材質のせいか奇妙なくらいに軽い。

まさに重さが無いかのようだ。

外見は至ってシンプル。刀身と鐔と柄があるだけで、装飾や銘なんかはついていない。造型は没個性だがその全てが黒く暗い闇色で透

き通っていることが、特徴だろうか。

とはいえその切れ味は本物のようだ。この程度の重量でありながら、木で出来た床に突き立っていたのだから。

成功、か。

ほうつ、と息を吐く。

途端にバキン、という音がして剣の形が崩れる。

一瞬にして私の手の中にあった剣、の形に切り取られた空気は霧散した。

初めてだから、停止する時間の設定もしなかったしこんなものか。とはいえ最初だから作り出すのにかなりの時間を要したが今までの調子なら、すぐにでも習得できるだろう。

そして、そこまで出来るようになればここに長居する必要もなくなる。

さて。いよいよ私がこの島から離れる日も、近くなってきたか。

第三話 郷愁と足枷（後書き）

未だに主人公の名前を決定していないことに気づきました。

そしてやっぱり主人公が喋りません。別段寡黙なキャラじゃないんですけどね。

そういえばゼロ魔のほうの主人公もそうでしたけど、見切り発車で始めているせいですかね！。

一応、バックボーンとかラスボスなんかは考えているんですけどそこまでたどり着くのになどれだけかかることやら。

とはいえ次回で島を出て活躍し始める………予定です。

第四話 嵐の出会い s i d e A (前書き)

なんかこっちの方が筆の進みが異様に速いですね。

第四話 嵐の出会い side A

はつきりと言えば、私は海賊が嫌いだ。いや、好きな人間など滅多にいないだろうけどそれは他の犯罪者を憎むのと同じレベルの話だと思う。

けど、私は残念なことにそれ以外の理由がある。

私の今の人生の下敷きになっている、とある理由が。

それは未だに悪夢となって私から平穏という文字を取り上げたままにしている。

忘れられないことは忘れられないこととして受け入れてしまうことが本来健全な反応なのかもしれない。

それは、既に終わったことなのだから。

少なくとも他人事なら、私はそう言うだろう。

今の私のように数年の時を要してまでそれに挑もうとするのはけっして一般的ではない。

けど、そうだったとしても、私は今の自分を否定することは出来ない。意志は置き去りになってもコレは、私が望んだことなのだから。

太陽が燦々と輝き、葉っぱを固定した日傘に日光が注がれている。

島にいた頃、どこか生まれてこのかた日傘など使ったことは無かったが、体力を温存する意味で使用することにしてよかった。

なぜその必要があるのか、というと私は今、海の上を歩いているからだ。

一步一步、歩く度に足の下空間が数秒間だけ黒く固定される。

能力を使用しての脱出は、島の周囲が大型の鯨の住処になっていることを知ってから考えていたが、上手く出来てよかった。

既に歩き始めて3時間以上経過しているため、私がいた島はもう見

えない。

特別な感慨があるわけではないし残してきたものも無いので、あまり後ろ髪を引かれないのはありがたいが。

食べ物や飲み物といった荷物はそれなりに持ってきたが、それでも限りがある。どうにかこれが切れる前に陸地につきたいものだ。

そういえば、これからどうしようか？

最終的な目標はあるのだが、それに到達するにはまず船がいる。

最初、そこまで歩いていくことも考えたが、今の感覚ではとりあえず現実的ではなさそうだ。

一日中空中で生活することもできるが、かと言って疲労感が無いわけではない。

海の上で立ち往生するよりは、船を用意したほうがよさそうだ。

加えて船はうちにあったボートのように素人が作ったようなテキトウなものではなく、ちゃんと職人が作ったもののほうがいいだろう。妙なところで不具合が出てもよくないし。

そしてそれを買うにはお金が必要だ。対して私には先立つものがない。

故郷の家にはいくらかを貯めていたが、それでも所詮は私一人が漁師をしながら貯めたものだ。生活費や本の代金を引いた残りを考えると、期待はしないほうがいいだろう。

そこまで考え前を見ると、遠く前方に一隻の船影があった。ここしばらく目にしなかった形。

間違いない。

助かった。

あそこまで行って乗り込ませてもらえば、どこかの陸地に下ろしてもらえるだろう。

代金は一応持ってきた毛皮なんかを渡せばどうにかなるかもしれないし、もし拒否されても後ろからついていく、という選択肢もある。人がいるところに行けば、とりあえずちゃんと調理された料理を食べることも出来るかもしれない。

そう考え、自分にハツパをかけて走り始める。

???

なにかの音が聞こえてあたしは抱えた膝に押し付けていた顔をあげた。断続的になにかの音が聞こえるけど、すぐに聞こえなくなる。あたしがこの船のこの部屋に閉じ込められて今日でもう何日目だろうか。

部屋の中にはあたし以外にも数十人の女の子がいたけど、皆一様に暗い目をしている。鏡がないから判らないけど、多分あたしも同じような目をしているんだろう。

今のところ乱暴こそされていないけど、それもいつまでの話になるか判らない。

それに、あたしをこの部屋に連れてきた男が「売り物」という言葉を口にしていたから、いずれはこの緩慢な責め苦が終わっても今度は本当の地獄が始まるんだろう。

もう、恐怖からくる身体の震えも止まったし、怖くて出ていた涙も枯れ果てている。

どうしてこんなことに、と思ったこともあった。

何故自分が、と考えたこともあった。

けど、結局は何の意味も無かった。

今更考えてみたところで、何も変わらないのだから。

あたしが浚ひわれたのは、海賊船だ。

正確には人身売買をする奴隷商船なのかもしれないけど、それはどうでもいい。

あたしを含めた子たちがモノとして扱われていることには変わりないから。

あたしはただの街娘。両親が死んでから、ずっと一人ぼっちだったけどそれでも街の皆には優しくしてもらった。両親があたしに残し

てくれたものなんてほとんど使わないような知識だけだったから、それはあたしにとって宝物みたいな思い出だ。

特に町長の一家には家族同然に育ててもらったと思っていた。

優しくて厳格な町長と、笑顔が素敵な奥さん。年の離れた妹みたいだった2人の娘、ミレイ。

三人がいなかったら多分、あたしは今よりももっと暗くてどうしようもない人間になっていたと思う。

でも、その感謝の気持ちもこの数日で揺らいでいる。

ある日、突然海賊たちがあたしの街にやってきたからだ。

正直、列車の駅があること以外はなんの変哲もないあたしたちの街にはお金なんてほとんど無い。

特別えらい人の出身地というわけでもないし、特産品も無い。

なのに、あの海賊達はやってきた。

逃げる暇は無かった。

街の人たちは1つ所に集められ、若い女の子は次々と船に連行されていった。

ほとんどの子が泣いて中には抵抗したせいで乱暴された子もいた。その子が服を破られながら上げた悲鳴は多分、一生忘れることができないと思う。

そんな中、あたしとミレイ、それに村長夫妻だけは偶々町外れの役場に行っていたお陰でその難を逃れていた。

でも、幸運はそこまで。

すぐにそのことを住人から聞き出した海賊たちが、役場を包囲したのだ。

町長はすぐに電々虫で海賊の襲撃を街の外に知らせたけど、手遅れ。隠れているように言われて執務室の隣にある待合室に入ったけど、隠れるところなんか無い。

その頃には多分、海賊たちはほとんどの住人をより分けていたと思う。

そして、ついに役場の中にまで海賊がやってきた。あたしとミレイ

は争う声に部屋の隅で抱き合つてガタガタと震えていたんだけど、急に町長さんがやってきて、ミレイをあたしの手から引つ手繰つた。あたしもミレイもきよんととしてそれになすがままだったけど、町長さんはそのときも、いつもと変わらない優しい笑顔で言った。「君は強い子だから、大丈夫だ。」って。

多分、その言葉の本当の意味は理解出来ていたと思う。改めてその言葉を思い出しても、それほどショックはなかったし。

呆然としたまま、ああ、あたし、捨てられたんだと思いながら町長さんとミレイの後姿を見送ってしばらくたってから、海賊たちがやってきた。

何の抵抗も出来ないままあたしはそのまま連行されて住み慣れた街を通り、そして今いる海賊船に捕らえられている。

今いる部屋にはミレイの姿は見えないし、連れて行かれる途中でも姿を見なかった。

あたしは彼らが逃げる時間を稼ぐために置いていかれたんだろう。そして、町長さんの賭けは、上手く彼の望む目を出せたみたいだ。役場のどこかに隠れる部屋か、隠し通路なんかがあったのかもしれない。少なくとも、あたしが街まで連れてこられる間に争うような音は聞こえなかった。

そのことは素直に良かった、と思う反面、もう会うことが出来ないことを残念に思う。

多分、何かの奇蹟が起こつて助かるようなことがあったとしても、あたしはあの街にはもう戻れないだろうから。

起きるはずもない前提を考えていると、少し悲しくなってきた。目頭が熱い。

もう枯れたと思っていただけ、まだ涙が出てくる。

グシャグシャになった袖でそれを拭いながら、自分がまだ満足に絶望できていないことに気づく。

仲がよかった女の子が助かったことは嬉しい。

町長さんがあたしを切り捨てたことも、理解は出来る。納得は、出

来ないだろうけど。

でも。

でも、どうしてあたしがこんな目にあうんだろう。

どうしてこんな目にあわなければならないんだろう。

あたし以外にも同じことを考えているひとはたくさんいるんだろう。
どうして、自分が、って。

『君は強い子だから、大丈夫だ。』
どうして。

信じていた人の言葉がこだまする。

強くなんか、ありません。

大丈夫なんじゃ、ありません。

だから、助けて。

誰か、助けてよ。

あたしがそんなことを考えても誰も助けしてくれないことは判ってる。
言葉にはしていない。

でも、頭に思い浮かべた。思い浮かべると、今度は次々にあふれ出てくる。

「え」と、ここかな？あー、入ってますか？」

そんなときだったと思う。その、場違いに穏やかな声が聞こえたのは。

第四話 嵐の出会い s i d e A (後書き)

やっぱり新キャラも喋らない！

いえ、次回で喋るはずですよ。あと、名前も明らかになります。
ホントだよ！・・・・・・・・多分。

第五話 嵐の出会い s i d e B (前書き)

この作品は、別段アンチとかヘイトというわけではありません。
念のため。

第五話 嵐の出会い s i d e B

私たちが人生と呼ぶ時間は選択肢が連続で出されている問題のようなものだ。

何かを選択したからこそ、何かが起こり、何かが自分に帰ってくる。あるいはその逆に、何かをしないからこそ何かが起こる、という可能性もありうる。

あれをしておけば、もしくはしなければ。

それは、誰だつて一度は考えるだろう。

何一つ間違いのない人生など、存在しないのだから。

しかし、だとすれば選んでしまった選択肢は取り戻せないのだろうか？

失ってしまったものは、絶対に取り戻せないのだろうか。

頭では理解できていても、そこだけはそれ以外の答えが欲しいと思ってしまうのは、私の傲慢さなのだろうか。

今考えても、まだ判らない。

近くまで寄って見ると、その姿が徐々に明らかになってきた。

最初は商船かなにかだと思っていたのだが、セイルが黒く塗りつぶされ、その中央に剣で貫かれた骸骨の意匠がある。

海賊船か。

たかが犯罪者が堂々と太陽の下を闊歩出来ることにやるせなさを感じてしまうのは私だけだろうか。

海軍がどれだけ頑張ったとしても潰した端からいくらかでも湧わいてくるから、仕方が無いのかもしれないが。

真面目に、地道に働きたくない。

でも美味しい食事はしたい。

下世話な話になるが、いい女も抱きたい。

いい暮らしがしたい。

そんな欲求が自身の怠慢という影の上で形を作ったのが、彼ら犯罪者だ。

自分は努力するのが嫌だから、他人のそれを奪えばいい。どんなに言い繕ったところで、そんな薄汚い思考が根底にあることは違いない。

ロマン？

冒険？

一繋ぎの財宝？

下らない。そんな自己満足、やっている当人以外に誰が喜ぶというんだろう。

結局のところ、彼らは他者を省みない究極のエゴイストなのだろう。だから、他人のものを平気で奪うことができる。

金も、命も、絆も、人生も。

自身の中にある苦いものを飲み下すと、それでも船に近付いていくことにする。どちらにせよ、この状況では私に、あの船を見過ごす選択肢は無い。

海賊たちはすぐに私に気づき、声をかける前に銃弾で挨拶してきた。文明人として最低の礼儀に、私自身もそれをかわすことで答える。そのまま甲板まで上がると、周囲を見回す。私を囲むように海賊達が剣や銃を向けていた。

怒鳴り声がそこかしこで上がっているが、頓着せずに口を開く。

「……今から海水浴をするのと、気がついたら監獄にいるの、どっちがいいですか？海水浴をするなら、ここから3時間ほど歩いた場所に、島がありますが。」

私の言っていることが理解出来なかったのか、海賊たちは再び銃弾で返答してくる。

ため息をついて走り出すと、そのまま目の前にいた海賊の顔を鷲掴みにする。

次の瞬間、海賊は悲鳴もあげられないまま、私を睨みつけた状態で

黒い表面の彫像になった。

「こいつ、悪魔の実の能力者か！」

代わりに悲鳴をあげた残りの船員たちが銃を撃ってくるが、無駄だ。何の技量もなくただ乱射するだけでは今の私には当たらないし、そもそも当たっても止まるだけ。

それからいくらの時間もおかないうちに他の海賊たちも同じ運命をたどることになった。

それから、甲板上の彫像を持ち上げ、隅のほうへ移動させる。縛る必要もないし文句も言われないから適当に海に落ちない位置に放置しておけばいいだろう。

この船を掌握したら、海軍の支所にでも放り込んでいけばいいし。

あ、それならこの船も貰ってしまおうか？

この中に賞金首がいるかどうかは知らないが、いればそのお金も手に入って一石二鳥。

おお、とんとん拍子にことが進んでいく。しかも、良い方向に。

私の人生ではありえないことだ。

ともかく、再び銃弾が動き始めては困るので一通り甲板の掃除をしてから船室に入ろうとすると、そちらから誰かがやって来た。

まあ、この船を動かす人員があればだけとは思えないし、あと何人かは捕まえなくてはいけないうとは思っていたからいいんだけど。

「手前エ！！何処のどいつだコラアアツッ！！！」

数人の船員と一緒に出てきたのは、2メートル以上の大きさの剣を背負った、それよりも高い身長の大漢だった。

ん？

あの剣の柄の装飾、どこかで見たような……。

それも、割と最近、というか何分か前だったような……。

「一人つてことは海軍じゃあねえな！賞金稼ぎか！！」

あ！海賊旗に描かれてる轆轤に刺さってる剣と同じだ！

なるほど。ということは、自分のトレードマークを海賊旗に取り入れている以上はあの男が船長か。

名前を意識しているのだろうか。

まるで意味の無いくだわりのようにしか思えないが。

こんな、遅すぎる太刀筋でしかも狙ってくる場所が最初から判っているなんて、倒してくださいと言っているようにしか見えない。

単調な剣技しか出してないが、もう手札は出し尽くしたのだろうか。

こんなモンで懸賞金が800万ベリって税金の無駄遣いだな。

「死イイイネエエエエエエエー!!!」

相変わらず無駄に大きな怒声と共に右から薙いでくる剣を人差し指と親指で挟む。そのまま、剣は万力で挟まれたように停止した。

「な!」

能力が無くてもこれくらいは出来るが、今回はサービスだ。

タイムカプセル
「時間牢。」

私が摘んでいる部分から黒い染みのようなものが剣に移ると、それは瞬く間に剣の刀身へ、柄へ、そして腕からジレルドの全身へ広がっていく。

コンマ一秒もかからない内に黒い彫像を1つ制作すると、残る海賊たちに向き直る。

「これから海水浴をするのと、気がいたら牢の中にいるの、どっちがいいですか?」

数分後、海賊達から聞き出した財宝を確認するために、私は船室に降りていた。

結局海賊たちは私と戦うことを避け、自分から海に潜った。最初、ボートを持ち出そうとしていたが、私が笑顔で「なにをしているの?」と聞いたら何故か自分から海に潜った。

まあ、彼らにここから大型鯨の生息域を通ってあの島にたどり着くことが出来るかどうかは謎だが、仮にたどり着いたとしてもいつまで生き残れることやら。

死地に足を踏み込んだのは彼らの方だし、私はそれについては全く同情しない。

そう考えながら通路を進んでいくと、突き当たりにある部屋があった。

壁から扉から、やたらと頑丈そうに作られている。

たしか、シメた海賊たちの話ではこの部屋には前の町で手に入れた生き物が入れられているらしいが。

それが何か聞きだすまえに海にダイヴしてしまったのでよく判らないが、とりあえずこんな狭そうな部屋に閉じ込められているのは可哀想だろう。

そう考え、船長室から持ってきた鍵を錠前に差し込もうとするが、穴がどこにあるのか判らない。

「えーと、ここかな？あー、入ってますか？」

数分格闘し、どうにか錠前の穴を探し出すとどうにかそれを解除することに成功した。

というか、今考えると、能力で壊したほうが早かったんじゃないだろうか？

ま、今更気にしても仕方ないか。

そう結論して戸の向こうに居るであろうなにかに話しかけるが、返事はない。

とりあえず中を見てみるかと思い、扉を開く。

そこから見えたのは、暗い部屋。そこに、いくつもの何かがいた。最初は、布袋の小山かと思った。けど、それは私から距離をとるように部屋の奥に逃げていく。

そして、その頂上のあたりから私に向けられる、隠しよのない、怯えと恐怖の入り混じった視線。

それに気づいた瞬間、私の思考を後悔と憐憫が襲う。

ああ、やっぱり海賊なんて捕獲なんか考えずに、殺せばよかった。残念だ。本当に残念だ。今からじゃ、間に合わない。

彼女たちに、これ以上酷い光景を見せるわけにはいかない。

私は努めて笑顔を浮かべると、口を開く。

「心配はいりません。私は海賊ではありませんから。皆さんを助け

にきたんです。」

噛んで含めるようにゆっくりと言う。絶望のふちにいる彼女たちが、こちら側に戻ってこれるように。

「海賊たちは既に排除しています。貴女たちは、家に帰ることが出来るんです。」

私が言うが、中々信じてもらえないようだ。

何人かは顔を見合わせて小声で話しているが、さて、どうにかして彼女たちに信用してもらわないことには話にもならない。

どう説得したものか、と思索していると、一人の少女が私の方へ歩いてきた。

綺麗な顔立ちの、多分私と同年代の娘だが、さっきまで泣いていたのか顔がひどいことになっている。

「どうしました？」

「・・・・・・えは？」

「はい？」

「貴方の、名前は？」

問われた内容を理解するのに数秒を要したが、それでも名前を知らない相手を信用するのも、変な話かもしれないな、と判断して答えることにする。ついでに握手をするために手を差し出した。

「スクイージ・ギアといいます。美しいお嬢さん。」

「そう、ありがとう。あたしはカミラ。ただのカミラ。よろしく。」

彼女は無表情のままクスリともせず、それでも強く私の手を握り返し、そう言った。

第五話 嵐の出会い s i d e B (後書き)

ようやく主人公の名前が判明しました。

第六話 知るべきこと

信じていたものが裏切られた場合、人がとりえる選択肢はそう多くない。

その理由を知ろうとするか、あるいはただその事実だけを受け止め、他のことに耳を塞ぐか。

どちらが良いということはないと思う。結局、どちらの選択肢を選ぶとしても後悔が残る場合はあるのだから。

私は過去にそれがあつたときただ目を背けていただけだった。

事実を事実として受け入れる。

言葉としてはそれらしく聞こえるが、結局のところ、それは見たくないものを見ないようにしただけだ。

なら、今の私がすべきことはなんなのだろうか？

求めるべき真実とはなんなのだろうか？

「え」と、首切りのジレルドは……あ、これこれ。80万ベリーですね。それじゃ、判を押してつと……。これを経理課まで持って行ってください。すぐに懸賞金を手配してくれますから。」

帽子を目深に被った受付が、私に書類を渡してくる。

私は会釈をしてそれを受け取ると、指示された通りに踵を返した。書類にはあの人相の悪い顔の写真と、彼の簡単な罪状と懸賞金額があり、そして既に拘束されていることを示す判子が押されていた。人間一人のことがこんな書類一枚で片付けられてしまうことに一抹の不条理を感じなくも無いが、それだけのことをしてきたのだろう、と思うことにする。

ここは海軍東海支所である。

海賊船を襲撃して数日、浚われていた少女たちを彼女たちの街に送

り届けてから、次にここに来ることになった。いつまでも面倒ごとの種を持っているのもよろしくないので数日前に拘束した”首切りのジレルド”一味を海軍に引渡すことにしたのだ。

とはいえ、あの程度の相手に800万ベリーとは……。

片田舎で漁師をしていた私の経済観念ではありえない金額である。

書類を見ると、海賊としてはありがちな一般人の殺害や略奪以外に人身売買にも手をつけていたようなので、実力に不相应に賞金額が高かったのだろうか？

とはいえ、めでたく社会のゴミが1つ掃除されて、私は大金をいた
犯罪者だけののだから文句のつけようもない。正等な報酬であるため、誰に文句を言われることもないし。

これで暫らくは美味しいご飯が食べれそうだ。ちゃんとした料理屋が作った、海水から作った塩をつけて焼いただけの肉や皮を剥いだだけの果物とは違うご飯が。

意気揚々と経理課まで歩いていくと、途中、反対方向から一人の男が来るのに気づく。

私と同年代くらいの青年でかなり眼光が鋭く、明らかに只者ではないことが判る。短く刈った緑の髪と、耳にしたピアスが特徴的だった。

海兵ではないのは、肌着に腹巻という独特というよりはおっさん臭い服装から予想できたが、服装に関しては無人島生活でボロボロになった服をまだ着ている私が言うことでもないか。

こんなところにいるからには賞金稼ぎをしている剣士なのだろうが、何故か腰に三本も刀を佩いている。折れたときの予備かなにか？不思議に思っ
て青年を見てみると、相手も私に気付いたようだった。その手には、私のものと同じような書類がある。

「よう。悪いが、経理課つてのは何処にあるか知らねえか？」

青年は書類をピラピラと見せながら、私に尋ねた。やはり、賞金稼ぎだったのか。

「知っていますが……、私もそちらに用があるから、なんなら一

緒に行きますか？」

「ああ、そうしてくれるんならありがてえ。」

「それなら、行きましよう。ああ、私はスクイージ・ギアといいます。」

「ロノア・ゾロだ。」

歩きながら、少し会話をしておくことにした。身のこなしからして、私が捕らえた海賊などとは比べ物にならない腕前を持っていることが判る。

よく見ると、刀もそれぞれの柄は使い込まれており、少なくとも見せかけだけではないことが伺えた。

もしかしたら、なにか有益な情報を持っているかもしれない。

「ロノアは、賞金稼ぎを始めて長いんですか？」

「別段それほど長いわけじゃねえよ。精々3、4年ってとこか。」

「そうですか。私は先日住んでいたところから出てきたんですが、その日のうちにいきなり海賊と戦うことになって少しばかり驚きましたよ。やはり東海というのは、海賊が多いんでしょうか？」

「いや。別段そんな話は聞かねえな。むしろ、『最弱の海』とか言われることもあるらしいから、そう多いわけじゃないんじゃないか？」

「……そうですか……。」

「………ところで、お前の後ろについてきてる奴は、誰だ？」
「にやー。あたしはカミラ。ギアの仲間だよ。」

私が思案していると、そんな聞き捨てならない科白が聞こえた。ロノアが言った通り、何故か私の後ろから。

振り向くと、そこにいたのは可愛らしい顔立ちの、しかし無表情な少女だった。

「………なんでここにいますか、カミラ？」

「妻ですがなにか？って言えばよかった？」

「（こめかみが痛いので頭を抑える）いえ、私と貴女は3日前に会ったばかりですし、そもそも私は婚姻した覚えがありませんが。と

「うか、話をそらさないでください。」

「だってー、船に一人でいるのって退屈だし。」

カミラは可愛らしく頬を膨らますと、そう言った。仕草は可愛いのだが、顔が全くの無表情のままなので少し不気味だ。というか私と同年代の女性がそれをするのもどうなんだろう？

見ていると頭痛がしてきたような気がするが、多分気のせいだと思う。

彼女はジレルド一味に浚われていた少女達の一人だったのだが、解放された後も船から降りようとせず、故郷の街にも戻らなかったのだ。

当初は嫌がっていても船から降りてもらうつもりだったが、彼女が帰る場所がない、と言ったことで多少追求が甘くなったのは私自身の過去とダブらせてしまったせいなのかもしれない。

私はこれから命の危険があるような航海を続けるつもりなので、そのあたりも伝えたのだが、それでも彼女はうんと言わなかったのだ、私としてはお手上げだ。

一応、私が新たな誘拐犯として扱われないように彼女の親代わりの人物に会って話しを通してはいるが、そのときに相手から全く反対意見が出なかったのも気になる。正直、その人物から説得してもらえるように期待していたので命の危険も示唆したのだがトントン拍子にカミラが船に乗り込むことが決まっただけだった。帰り道は彼女の荷物を一切合財持たされるし。

それが何故なのか、相手は語らなかったしカミラも話したくなさそうだから今のところ、そのことは聞いていない。

会ったばかりだから話しかねているのだろうけど、それなら何故船に乗ることは抵抗が無いんだろうか？

言うてはなんだが、賞金稼ぎというのは海賊を倒すことを生業にしている以上、海賊同様に荒くれ者が多い。私はそういう輩とは違うつもりだが、それでも赤の他人を信用するには少し難しい職業だと思うのだが。

「今回は構いませんが、できれば次回からはお留守番をしてください。お土産を買っていきますから。」

「おっけー。得したね。」

私はため息をつく、そう提案した。物で釣るのも多分にさもしい気がするが、何かあったことを考えると、そうしたほうがいいだろう。

守りという面から考えると、あの船はそのものを強奪でもされない限り、最適といえるだろうから。船室の壁とドアをそれぞれ分けて時間固定してあるから施錠さえすれば簡易的な要塞と化す。

とはいえ私もこれからしばらくは賞金稼ぎとして活動していくつもりなので、どこまで彼女を連れて行くことができるのだろうか。私自身、明日死んでしまいかもしれない生活が続けていくというのに取り返しがつかなくなってから後悔をしても、遅いことは、判っているのに。

私が死ぬのは悪魔の実を食べたことが判った後、既に納得したことが、それが原因でカミラまで辛い目に合うのは違うだろう。とはいえ、私は自分の目的から逃げられない。

今出来るのは、何かしらの身の振りようが見つかるまで彼女を守っていることくらいだろうか。

折を見て、私のほうから切り出しておこう。いずれ私は偉大なる航路^{グランドラ}に入るつもりなのだから。

「ああ、ここだね。」

考え込んだまま歩いているとすぐにそこにたどり着いた。カミラの声に視線をあげると、窓口の横には『経理課』という文字が書かれている。

私とロロノアはその受付に書類を渡すと、懸賞金をもらい、すぐに別れた。ロロノアはこの街の宿に、私は資料室に用があるからだ。私はまだ何日かこの町にいる予定だから、運が良ければまた会うこともあるだろう。

極秘の資料なんかもあるだろうからさすがに中までは入らせてもら

えなかったが一般的な資料の閲覧を申し込むと、すんなりと貸してもらえた。

待合室に入り、その本を開く。

『悪魔の実図鑑』

その名前の通り、悪魔の実の図鑑である。

今のところ、自分の食べた実の名前すら知らないし、もう1つ知りたいこともあったからだ。

ページを捲っていくと、様々な実の能力がその弱点も含め、書かれている。とはいえこの図鑑に書かれているもの以外にも存在するのだから、全体でいくつあるんだか。

「あー、ギアの食べた実ってこれじゃない？」

数十ページを捲ったところ、私の隣で同じく図鑑を覗き込んでいたカミラがそういった。それはいいんだが、妙に密着しているせいでその、なんというか身体の一部が接触しているのだが。

「・・・超人系ピタピタの実ですか。能力は接触したものと近くにあるものを停止させる・・・、間違い無さそうですね。」

「これを読むかぎりじゃギアの食べた実って随分便利そうだねー。」

『ものを停止させる』って色々使い道がありそうだし。」

「とはいえ能力というものは使うもの次第ですよ。世代の違う同じ実を食べたもの同士を比較しても違いは出てくるそうですから。」

単純に戦闘能力の面で考えた場合、悪魔の実の中で最強は自然系^{ロギア}。格闘能力という観点なら、動物系^{ソオン}。私のピタピタの実が属する超人系はピンキリというところだろうか。

とりあえずキリよりはピンであってほしいものだ、と思いながらさらにページを進める。

「あれー、そのページってギアには関係なくない？だってそのへんは自然^{ロギア}・・・。」

カミラが何かを言っているような気がしたが、私はそれに返答している余裕がない。

二つ目の目的のページを見つけたからだ。

捜していたものはずなのに何故か鼓動が速くなる。

自分が何に動揺しているのか判らないまま、ページの上に視線を這わせた。

そのページには他のものと同じく簡潔に実の名前と能力が書かれている。
いる。

『ロギア自然系 ツチツチの実』と。

第六話 知るべきこと（後書き）

半端に原作キャラが出ましたが一応、ゾロはまだ出ます。

第七話 休息と憤怒

私たちは他人が理解出来ない。
他人の心が理解出来ない。

自分自身すら理解できないのだから。

望むものすら見えないのだから。

出来るとすれば精々が理解した気になることくらいだろうか。

だが、理解できないからといって、それが消えてなくなるわけではない。

むしろ、その認識の相違はより深刻なズレとなって私たち自身を切り刻むだろう。

いずれ、他者と唯一意志を伝えあえる手段である言葉が何の役にも立たないように、致命的な傷を伴って。

side カミラ

少し、ギアの様子がおかしい。

正確にはおかしかった。

あたしを船に残して、海軍支所に行ったところまでは普通だった。

というか、あたしと会ってから故郷の街にたどり着くまでと同じテンションだった。

あたしが降りるのを嫌がったら少し困ったような顔はしていたけどそれでもまだ余裕があったと思う。

けど、海軍支所に入って暫らくすると段々落ち着きがなくなってきたみたいだった。

どうしてだろう？

ギアは賞金稼ぎなのに。

普通、海軍の近くにいてそんな反応をするのは海賊くらいだね？
途中で会った目つきの怖い人とは普通にお話してたけど、それでも

普段に比べると顔色が少し悪かったような気がする。

気になってじつと見てると、怖い目の人に気づかれて出て行かなくちゃならなくなったし。本当だったら知らないうちに船に戻っておくつもりだったんだけどなー。

スーキング
隠密任務失敗。

けどその後一緒に行くことになって良かったと思うことがあった。

ギアが明らかにおかしくなったのは『悪魔の実図鑑』を見てる最中だった。

たしか、自然系ツチツチの実のページを見た瞬間、無表情になって何か考え事を始めたんだったと思う。あたしが話しかけても聞こえてないみたいだったし。

割と深刻そうな顔もしてた。

これってギアがその実か、実の能力者と何か因縁があるってことだろうか。

支所に行ってから不自然だったのは図鑑を見せてもらうつもりだったからだろうか。

そうかもしれないし、もしかしたら違う理由があったのかもしれない。

興味はあるし、知りたいと思うけどギア自身が言わない限り、あたしからは聞くことは出来ない。

言わないってことは言いたくないってことだろうし、『冗談ですんならともかく、それをしちゃいけない部分があることくらいはあたしでも判る。』

もう捨てられないように気をつけなくちゃ。

見つかったのも本当はマイナス評価だし。

とはいえお土産を買ってもらえるのは嬉しいから結果オーライってとこかな。

ギアのほうは何か考えがあつてのことかもしれないけど、あたしは単純にギアがあたしに何か買ってくれるのが嬉しい。

うん、こんなにしてもらってるのにあたしもいつまでもお荷物にな

つてるわけにはいかないよね。

守られてばかりじゃ駄目。邪魔になるのも駄目。

重荷になってたら、また何時捨てられるか判らないもの。

そうなたらあたしは生きていけない。町長さんがいるから故郷には帰れないし、あたしみたいな小娘に出来るお金を稼ぐ方法なんか限られてくる。

ギアに必要とされなきゃ。

うーん、でもそれにはなにをすればいいんだろう？

料理は出来ないわけじゃないけどそんなに上手なわけじゃないんだよね。でも、これからは死ぬ気で覚えよう。ギアってご飯が好きみたいだし。

賞金稼ぎとしての戦闘を助けるのは難しいけど、何かサポートできることがないか考えてみよう。銃を撃つことくらいなら、あたしでも出来るもん。練習すれば、ギアの手助けも出来るかも。そしたら、あたしのこと見直すよね。

情報収集も大事だよね。高額賞金首や、海賊が根城にしている場所を知ればギアも助かるはずだし。

この3日、他の子たちは悪魔の実の能力者だからって怖がって近付かないからあたしだけがギアとお話してたけど、不自然にならないように聞き出せたのはギアは元は漁師で何年か漂流した無人島で生活してたってこと。あと、その島で偶然悪魔の実を食べて能力者になったことくらいかな。

それが本当（ギアがあたしに嘘をつくはずないけど）なら、ギアはこんなキャラベル船、操舵したことはないはず。なら、両親があたしに残した航海術も活かせる。正直、普通に生きてたら何の意味も無い知識だし、覚えるだけ無駄だと思ってたんだけど、ありがとう天国のお父さん、お母さん。

もとは船乗りだったお父さんと一緒に旅をしたお母さんが授けてくれたものは立派に活用します。

それに、これって運命かも。

駆け出しの賞金稼ぎのギアと、海賊に浚われてたあたしが出会って、しかも必要とする知識を持ってるなんて。

あのとき、あたしが助けてって思ったらギアが助けにきてくれた。あのまま浚われたままだったら、多分あたしは一日中好きでもない男に買われて抱かれる、最低の生き方をする事になっていただろう。

ギアはそんな地獄からあたしを助けてくれた。

だから、あたしはギアを裏切らない。

絶対に。

絶対に。

side ギア

「それじゃ、買い物はこんなところですかね。後は船の改良くらいでしょうか。もう遅いですから、そのあたりは明日以降ですね。」

「でもー、あんなに生ものを買ってよかったの？どんなペースで食べても絶対腐るよ、あれ。」

海軍支所で懸賞金を貰った後、私たちは近くの町まで来ていた。本格的な航海をするための準備のためだ。

とりあえず半日ほどかけ、食材と水を満載したリアカーを数回船まで運び、その後久々に酒場までくり出すことになった。

私はそれなりに好きだし、カミラもいける口だそうなので、丁度良い。ついでに料理も出せるところなんかがいいな。

なにせ、島では酒なんて作っている余裕も道具も無かったから、本当に久しぶりだ。

「大丈夫ですよ。船室に仕舞った後、『停止』させておきましたから。私がいる限り、保存期間なんてあつてないようなものです。」

「おー、便利！」

「これで航海中の食材に関しては問題なくなりましたが……カミラ、つかぬことを伺いますが、貴女は料理が出来ますか？」

「うん。出来ないこともないけど、今は勉強中だね。遠くないうちにギアに愛妻料理を食べさせてあげるから、期待してて。」

「（スルー）そうですか。私も出来ないわけじゃありませんが、知っての通り胸を張って他人に食べさせることが出来るほど上手なわけではないですからね。交代制にしていきましょう。あ、あそこなんか良いかもしれませんね。」

軽く言い、何か不満そうなカミラを伴い前方にあった居酒屋を指差す。それなりに大きな店構えで、繁盛しているようだ。中に入ると久々の喧騒が私たちを出迎えた。

酔って赤い顔のままテーブルの上で寝息をたてている者、暴れて私たちと入れ替わりに出て行く者、会話もせず静かに一人で呑む者とそれぞれの方法で酒を楽しんでいる。

2人ともカウンターに座ると、酒と料理を頼んだ。居酒屋にしては色々頼めるようだったが、取り合えずは奇をてらったものよりは普通の料理が食べたい。私は清酒と、肉と魚の揚げ物。カミラは果実酒と、魚介と野菜のサラダを頼んだ。

料理が来る前に程よく冷やされた酒が並べられたので、それを呷る。程よい苦味が口腔に広がり、微かな酩酊感を生んだ。

「・・・呑んだのは久しぶりですが、やはり美味しいものですね。」
「そう？てか、ギアって今までどんな食生活してたの？」

店員から料理を受け取りながらカミラが興味深そうに尋ねた。フォークで魚の切り身を口に運びながら。

「・・・基本的には焼いただけの肉や堅い皮を剥いだ果物ですかね。海水から塩も作っていたんですが、やはり味付けがワンパターンになりますから。偶に魚を捕ったりしたこともありましたが、波をかぶらないようにかなり高い岩の上から鰯を取り付けた銚子を投擲していましたから釣果が良いはずもなく・・・、年に数回くらいですね。」

「なんかヘビーだねえ。」

カミラの感想を聞きつつ、私もトリの唐揚げを食べる。肉汁と共に

豊かな鶏の味わいが広がり、実に幸せな感覚を噛み締める。

「文明から長期間離ればそんなものですよ。私自身、生きていることが奇跡みたいなものですし。」

なにしろ、理由があつたとはいえ漂流して4日で自殺しようとしていたのだから。

とはいえ、今私はこうして生きていて、酒を呑み料理を食べて女の子と話をしている。

2つの場面だけを切り取れば、同じ人物の経験とは思えない落差があるのも事実だ。

幸運と不運は表裏。

いつか、私にそう言っていた誰かを思い出しそうになるが、直前に思考を乖離させた。誰だつて不愉快なことは思い出したくない。

特に、美味しいお酒を呑んでいるときは。

だから、その時は油断していたのだろう。カミラとの会話と、久しぶりの酒による酩酊感で周囲に気を配っていなかった。カミラのほうもなんだかんだで数日間気をはっていたせいか、それに気づいていないようだった。

唐突に私の背中に衝撃がはしり、前につんのめる。海軍のお膝元で馬鹿をやらかす奴もいないだろうと安心していたのが拙かったか。

一瞬でそう考え、能力を起動してカミラを庇うが、次に私に襲い掛かったのは酒だった。

勿論、私に触れた瞬間に酒は黒い固体になり、バラバラと床に落ちて音をたてる。いくつかは大きな塊でかけられたせい、何かにぶつかってガチャン、と陶器が割れるような音を発していた。

そこでようやく後ろを振り向くが、そこには私の背にぶつかったと思われる酔っ払いが蹲っている。

半ばくらいで割れた酒瓶を持っているから、頭からかかったのはこの中身だな、と確信した。

「なに？」

「さて。酔っ払い同士の喧嘩にしては、少々派手過ぎますね。」

店内は静まり返っており、既に大方の客の酔いも醒めてしまっているようだが、表からは物騒な金属音が響いてくる。

あれは、剣と剣が打ち合う音だろうか。

「ま、ここは海軍支所も近いですからすぐに騒ぎも収まるでしょう。私達は気にせず呑んでいればいい。」

「いいの？」

「いいんですよ。自分に被害があるわけでもありませんし、特別恨みのある相手というわけでもないですから。そもそも誰が騒いでいるかもしりませんし。」

そう言つてカミラを落ち着かせ、自分の席に戻つて呑み直そうとしたが、そこで私を待っていたのは黒い塊に潰されてグチャグチャになった自分の料理と、お酒だった。

器は完全に粉碎され、中身も潰れたり床に飛び散ったりしている。

まだ中身はたくさんあったから、飛び散り具合も相応に広範囲になっていた。

それを見ると、私のなかでふつつつと沸き立つものがある。

まだ一口しか食べてなかったのに。

まだ一口しか呑んでなかったのに。

せつかく久しぶりのお酒と料理だったのに。

沸き立ったものは明確な出口から噴出すと、その姿を怒りに変えた。額に青筋が浮かび、掴んでいるカウンターの板がギシギシと軋む音をあげる。

とりあえず次にすることは決まったみたいだ。

「そう、恨みはありますし、実害もありますから可及的速やかに大人しくなってもらいましょう。エエ、ホントウニハヤク。」

食べ物を粗末にする罰当たりには鉄槌を。

不思議なことに、席から立った私を止めるものはいなかった。

第七話 休息と憤怒（後書き）

二話以降本文の最初にある文は特別意味はありません。

そのとき主人公が思っていたこと、とかアバウトな感じで書いてますので伏線というわけじゃないんです。
すいません。

第八話 交錯するもの side A

『運命』とはなんなのだろうか。

私の読んだ物語において、それらの言葉はただ、漠然とした物事の流れとして描かれていた。

死。出会い。対決。慕情。様々な言葉の中でそれは語られている。

そして、その認識は誤りではないのだろうか。

人と人を、あるいは人と別の何かを出会わせるために『運命』は存在する。

時には奇跡的に。

時には感動的に。

時には皮肉を伴って。

全てはめぐり合わせ。

人知の及ばぬものの示すように。

しかしだとすれば、それはどれほど救いの無い話なのだろうか。

私が何をしようと、あるいは何をされようと、それは運命という台帳に書かれた事実の羅列でしかない。

冷徹に、正確に、確実に世界という舞台を回していく巨大な装置。

そこには誰の意思も介在しない。ただ、昨日から明日までを繋げるだけの現在でしかない。

だから私は『運命』を嫌悪する。

私を規定する物語を嫌悪する。

それを、後悔しているが故に。

だが、私のその感情さえも『運命』の一欠けらにすぎないのだろうか。誰もそれから逃れようとして、必ず失敗するのだから。

「ぶっ殺してやらあああつ！」

「死ね！死んじまえ！！」

口汚い罵声と大勢の人間の争う気配。

吹っ飛ばされた酔っ払いが壊した戸をくぐり、外に出ると、そこでは既に喧嘩というレベルを超えた殺し合いが繰り広げられていた。暴れているのは十数人の身なりのよくない男たちだ。持っているものや雰囲気からして、海賊だろうか？

だが、何故こんなところに？

こんな場所で暴れていたら海軍にすぐに見つかるだろうに、そんなことも理解できないほどの馬鹿の集まりなのか？

内心で疑問が湧き上がりかけるが、そんな場合ではないか。

視線を移すと、その先で海賊たちに抵抗しているのは2人の男だった。

その後ろには気絶しているのか、暴れている者とは違う格好をした4〜5人の人達が倒れていた。

戦っている2人はどちらも剣で武装しており、それらが打ち鳴らされる音が響く。

これはどういう状況なのだろう？

怒りが消えるわけではないが、少々不可解な状況に疑問が浮かんでくる。

と、首をひねったまま見ていると、2人の方が劣勢になってきたようだ。個人としての実力では勝っているようだが、あくまでそれは”どちらかといえば”というレベルの話らしい。それで押し切るうにも人数差が大きすぎるようだ。

2人共、連続で切りかかられるのを防ぐので精一杯になっている。

特別関係は無いが、見捨てるのも寝覚めが悪いから助けに入ろうかと思っていると、海賊の一人が私に気づき、指を差した。

「いたぞ！あいつだ！」

……あれ？

念のために後ろを見るが、そこには壊れた居酒屋のドアがあるだけだ。

海賊たちはその言葉に一斉に振り返ると、次の瞬間、今度は私に襲

いかかって来た。

なんで？

意味が判らないまま、ドアから離れる。

この場で暴れれば、居酒屋にも迷惑がかかる。

突然の事態の展開に混乱したままだったが、そう冷静に囁く自分の声に素直に従うことにする。

一跳びで数十メートルほど移動し、それでもまだ追ってこようとする海賊たちを見て、ため息をついた。

理由は判らないが、彼らは私を追っているらしい。

それも、見た感じ殺すことも含めているようだ。

人違いだとは思うがもし私を捜していたのなら、何故そうしていたのか聞き出さなければいけないか。

「死イイイネエ！！」

走ってきた海賊が片刃剣を振りかぶり、私に叩きつける。

ゆっくりな太刀筋。力が無駄に入りすぎているせいで、斬るというよりは殴るような使い方だ。

だが、その剣は何の音もたてず、かといって振り下ろすこともできずに私の頭に密着した状態で停止した。

バリックスベース
不通の空間は私に触れたものを強制的に停止させる。私の最も基本的な能力にして万端で自動の鎧、と言いたいところだが実際はそう便利なのではない。

この能力は外部からの物体の接近を遮断出来る代わりに、私から停止した物体にぶつかることは防げない。要するに、全方向からの攻撃を受けると逃げ場が無くなるわけだ。

だから、今のように私自身が大きく動いていないときしか使うことが出来ない。まあ、攻撃のための能力を使用しない状況自体が稀有だし、動いているときはまた別の方法があるので問題は無いのだが、私を斬り殺そうとした男は困惑しているようだ、それはどちらかというと私が浮かべるべき表情のような気がするんだが、状況的に。

そういえばさつき、海賊たちは私を見て「あいつだ」と言った。

ということは勘違いでない限り最初から私の目星をつけてここに着たということになる。

それも、殺すことを目的として。私に恨みを持つものがその原因になっっていることが予想されるが、賞金稼ぎとしては駆け出しの私では、買っている恨みなどたかが知れている。ふむ。ということは先日捕まえたジレルドの一味だろうか？・・・っと。

そろそろ全員が10メートル以内に入ったか。

思考を切り上げ、戦闘を始めることにする。おそらく、その後で疑問を解消できるだろうから。

まず、今も自分の剣を引き剥がそうとしている海賊を殴り飛ばした。手加減はしたので死ぬことはないだろうが、悲鳴をあげて吹っ飛んでいく。

後で尋問をするためにも今回は攻撃用の能力を使用しないで立ち回ってみよう。

そう考え、海賊の集団に走り寄る。

先頭にいた男は私を見て驚いたような顔をしていたが、気にせずながら空きになっている腹に一撃を叩き込む。彼は悶絶し、その場に崩れ落ちた。

全員を伸しておけば、後で聞き出すことも容易だろう。

能力を使うと、効果が切れるまで待たないといけないし。

もし海軍がその間に來て問答無用で連行されても嫌だしなあ。

そう考えつつ、次の目標に向かう。この時点で海賊たちはほとんどが私に向かってきている。逃げようと思っているものはいないようだ。

私が無手であることもそれを手伝っているのかもしれない。

そもそも得物が必要ないほどに彼我の実力差があるとは思わないところが彼らの最大の失敗だろう。

いや、それは海賊になったことか。どちらにせよ、どうでもいいが、次の海賊を襟首を掴んで捕獲。空いている左手で海賊の剣を叩き落

すと、次は顎を弾いて意識を刈り取る。

同じ手順で、少し逃げ腰になってきた海賊たちを次々と無力化していく。当然抵抗をされるが、最近まで猛獣と渡り合っていた私の動体視力には相手にならない。

これなら武器を出すまでもないだろう。

あれ？　そういえば、私は無手の方が強いんだろうか？

今まで考えたことが無かったので判らないが、とりあえず威力の高い武器を持ったとしても、ちゃんとした使い方を知らないから無用の長物になるかもしれない。

ということは、私は無手の方が強いのか？

よく判らない。実感が無いせいもあるのだろう。そういえば船の改修をしてもらう予定だったから、それが終了するまで剣術道場に通ってみるのもいいかもしれないな。

技術を習得することでまた違ったことが判るかもしれないし。

そこまで考えると、最後に残った海賊が逃げられないように絞め落とした。

ふむ。十人以上の人間が武器を持って暴れていたのを殺しめせずに無力化したのだから、そう弱いわけではないのかもしれないな。自画自賛かもしれないけど。

「やあ、大丈夫ですか？」

全員分の手錠と足枷を取り付けてから、海賊達と戦っていた2人組みのところまで移動する。

前もって見ていたときに大した傷は受けていないことはわかったが、2人共疲労で地面の上に五体を投げ出していた。

その後ろで気絶している人達の方も傷らしい傷は無いようだ。

「なんとか、な。」

「お、おう。紙一重、だ。」

2人共、私と同じか少し年上くらいの青年である。

見たところ一般人とは思いにくい、しかし海軍や海賊とも違うようだ。だとすると、この2人も賞金稼ぎか。

本人たちが言っているように彼らの実力が海賊たちと紙一重だったのかは判らないが、彼らが他人のために戦うだけの勇気を持った人物であることは確かだ。

そこに、敬意を示したい。

「いるんでしょう、カミラ。出てきてください。」

「・・・・・・あれ？ 気付いてたの？」

完全に当てずっぽうで言った私の言葉には、返答が返ってきた。昼間のこともあるからもしかして、と思つて鎌をかけたのだが、見事に当たっていたようだ。

「2人の手当てを頼みます。私は尋問を行いますので。」

「いえっさー。きゃぷてん。」

本来なら説教くらいはするのだが、今はやめておくことにする。

決して彼女が無表情なまま両手に持つている用途不明の包丁が怖いわけではない・・・・・・はずだ。

恐らく居酒屋の厨房にあったものだろうが何のためにそれを持ってきたのかは聞けないまま、カミラが2人の傷の処置をするのを見てから、海賊たちに向き直る。

けつして下手に藪をつついたら大蛇が出てきそうな雰囲気だからだというわけではない。

・・・・・・多分。

そうして、海賊のうちの一人、最初に殴りとばした男を見つけると、往復ビンタで目を覚まさせた。

私の顔を見た瞬間、罵声を口にしようとするが、手枷足枷をつけたまま胸倉を掴んで吊り上げると、どうにか状況認知が出来たらしい。それでも、恐怖よりは怒りを浮かべているのはさすがだが。

普通の神経をしていたらこの状況でそこまでふてぶてしく出来ないだろうし。

「・・・・これから、私は貴方に質問をします。答えたくなければ答える必要はありませんが、その場合は私が殺されそうになった相手が非協力的でも笑って済ませることが出来る度量の持ち主であるこ

とを期待した方がいいでしょう。参考までに、私は海賊が反吐が出るくらい嫌いです。」
につこりと笑顔を浮かべながら言うと、海賊は怒りに紅潮させていた顔を青ざめさせた。

第九話 交錯するもの side B

一般的に「知らない事」というものは害悪にはなっても有益になることはほとんど無い。

知らなければ何も判らないし、極端な話、そもそも「判らない」ということすら判らない。

意味と理解の欠如において、どこまでも等分に無価値な世界に線引きなどというものは存在しないのだ。
しかし。

本当に「知らない」ということは害悪なのだろうか。

知ったが故に苦しむこと。

知ったが故に誰かの怒りを買うこと。

そんなものは何処にでもあるだろう。

誰しも形而上の存在に咎を認めるほど愚かでは無いために、それを知る者に代替させるといふ愚挙を演じている。

「知らない」ということを「知っている」ために。

「知っている」ということを「知らない」ために。

???

電灯もランプも無く暗闇になった高台から、あつという間に終わった殺し合いを見下ろしている二つの視線があつた。

興味本位でそれをしているわけではないのは、2人共が示し合わせたように望遠鏡を覗き込んでいることから間違い無いだろう。

「ありや、残念。簡単にやられちゃったよ。やっぱ800万程度の雑魚の部下だから、しょうがないか。」

「・・・・・・だから言っただろう。あの程度の相手ではまず役に立たぬと。実際、奴は口々に能力を使わないままではないか。」

軽く言っただけの額をぺちりと叩く一方に、もう一方が諫めるよう

に言う。その視線の先では、ボロボロの服を着た青年が、同じく身
なりの良くない男を腕一本で吊り上げている。

「ま、いんじゃない？どせ俺たちのことなんか判らないんだし。
これからもボチボチ襲撃していけば。」

「却下だ。私の能力で隠蔽しているといつても、何処に手掛かりが
あるかも判らん。」

「も、心配性だねえ。今は俺たち海軍だよ？疑う余地なんか無い
ジャン。むしろしょびく側だし。なんなら、本当のことを言っ
て共同戦線を張ってもいいんだし。」

そう言った影は、確かに『MARINE』と書かれた帽子を被って
いた。着ているものも、形からしてどうやら海軍の軍服らしい。

「それこそまさか、だな。アレがどれだけのものを受け継いでいる
かは知らんが、奴の息子であることは確かなのだ。何処から嗅ぎつ
けるとも限らん。……共同戦線については私に対する嫌味
だと考えてもいいのか？」

「万全をきしたほうがいい訳ね。判らなくもないけど。さ、スマ
イルスマイル。あれくらいの冗句は流せるようにならないと。」

「（無視）しかし、他からも連絡が来ることになっていたとはいえ
運良く我々のいた支所まで来るとは、何かのめぐり合わせを感じな
くもない。本人ではなくとも血縁者を発見できたのだからな。」

「顔がそっくりだしね。名前も確認したからまず間違いないだろ
うし。それにここで何が起こったかを知っていれば、あのボーヤが
次にしようとするかどうかは判るし。」

「ああ。アレはいずれ、奴のいる偉大なる航路を目指す。その本懐
を遂げようとするなら、確実に。我らはそれを追っていればい
い……。」

「あいつに、確実に死んでもらうためにね。」

side ギア

尋問は比較的簡単に終了した。

とはいえ、聞き出せたのは海賊たちが仮面を被った女に私が彼らのキャプテン、”首切りのジレルド”を捕縛したことを教えられ、しかも私を殺すか捕まえるかすればジレルドが脱獄する手引きをする、と言われたことくらいだった。

嘘をつくにしては突拍子も無い内容なので、逆にそれが本当のことだということがわかる。

しかし、何故私が狙われるんだろう？

心当たりが無いわけではないが、動機としては弱そうだ。

ある程度素直になつてもらえるように肉体言語に訴えたが、それ以上は知らないようなのでその場に放置。海軍の到着まで放っておくことにした。

怪我をしていた2人も、カミラが手当てをしたお陰で大事はなさそうだ。

しかし、その2人から妙な視線を感じる。カミラからも視線は感じるが、熱っぽそうな眼差しは今に限ったことではないので、そう気にする必要もないだろう。

「カミラ、ありがとうございます。傷の具合はどうですか？」

「傷自体は小さいから、縫う必要は無いねー。薬を塗って包帯も巻いたから問題無し。」

「ああ、大した傷も無えし、大丈夫だ。」

「それはそうと随分と容赦が無いんだな、あんた。」

2人は自分の怪我よりも私が気になるようだ。あれくらいは普通だと思ふんだが。彼らのような犯罪者はそうされるだけのことをしているのだから。

「私は基本的に犯罪者が嫌いですが、中でも特に海賊が嫌いなんです。取り扱いも相応になりますね。」

「へえ〜。」

判ったのか判つてないのか、2人はそう言った。

「ああ、申し遅れました。私はスクイージ・ギアと言います。そち

らの少女はカミラ。私の船のクルーです。」

「妻のカミラです。特技は尾行。目下花嫁修業中デスー」

私の後に続いて何故か堂々と嘘を口にするカミラを見る。

彼女は不思議そうにこちらを見返していた。まるで、”いずれそうなるんだから、別に大した違いは無いでしょ？”と言わんばかりに当然そうな顔で。

それを見ていた私を頭痛が襲うが、なんとかそれに耐える。ここ数日、彼女との生活で一番必要とされるものが忍耐であることをよく理解させられているのだから。

「俺はジョニー。こつちが相棒のヨサクだ。」

「よろしくたのむ。」

「お二人共賞金稼ぎなんですか？」

「ああ。この町にも換金のために来てたんだが、たまたま海賊が街中で人を襲ってるのを見つけてな。兄貴がいればここまで苦戦することもなかったんだが……」

「兄貴？貴方がた以外にも誰かいたんですか？」

「あんたも聞いたことくらいあるだろう？『海賊狩りのゾロ』。俺たちの兄貴分の凄え賞金稼ぎさ。」

「……すみませんが、その人の名字は『ロロノア』じゃありませんか？」

「あ、やっぱり知ってたか。東海じゃ兄貴は有名だからな。」

「いえ、昼間、海軍支所で会いました。」

人の縁とは知らないうちに繋がっているものらしい。確かに彼ならこの程度の海賊はものともしないかもしれない。

「今、ロロノアは何処に？」

「いや、それが一旦宿に戻った後、散歩に出かけてから三時間は経つのに戻らないから探してたんだが、その途中でこの海賊が暴れるのに出くわしてよ。」

「この街の人間が襲われてたし、助けようとしたところにあんたが出てきたんだよ。」

「………そうですか。だとしたら、ロロノアにも何かあったのかもしれませんが。」

具体的には、このことと同じような襲撃に出くわしたことが考えられる上には上がいる、という言葉もあるように彼が強いのは間違い無いだろうが、けっして無敵というわけではないだろう。不意打ちされた可能性もある。

「いや、それは無えだろ。」

「ですが、ロロノアだって人間です。別に彼を馬鹿にするわけじゃありませんが油断することだってあるかもしれません。あるいは、この海賊の仲間には捕まっている可能性も……。」

「あー、いや、違うんだ。ゾロの兄貴はアレなんだよ。その、方向音痴なんだ。」

「………はい？方向音痴？」

「ああ。故郷に帰ることが出来なくなるくらいだな。」

最初は冗談かと思ったが、しかし彼らがそんな嘘をつく理由は無い。顔つきも至って真剣だ。

そういえば海軍支所でも、そう複雑でもない構造の建物の中で迷っていたっけ。

故郷云々は単に地名が判っていれば着くことは出来そうな気がするが、そうでもないのだろうか？

会ったときの印象では少なくとも、道理がわからないほど頭が悪いようには見えなかったが。

「おう、大丈夫か？お前ら。」

人間、外見からは判らないような欠点がある物だなあ、と妙に感心していると、背後から声が聞こえた。

聞き覚えのある声だったので特別警戒もせずに振り向く。

「ゾロの兄貴！」

「幸い、2人とも大した怪我はありませんよ。ロロノア。」
昼間会ったままの姿でロロノアがそこに居た。

噂をすれば影、というか。確かに方向音痴でも戦闘をしている音を聞けば向かう方向は間違えようがないか。

私の声に、最初は胡乱な表情を浮かべていたロロノアは、すぐに理解の色を示した。

「あ？……お前は、昼間の……？たしか、スクイージ・ギアとかいったか。」

「ええ。半日ぶりですね。」

「で、この状況はなんなんだ？」

「それが、私にも。とりあえず彼らの親玉を捕らえた私に対する報復、でしょうかね。いくつか不明な部分がありますが。」

海賊達を唆した仮面の女とやらが何者かは知らないが、少なくとも私個人のつながりではないだろう。とはいえ、それ以上は判らないのが現状だが。

「まあ、それはともかく食事にしませんか？これも何かの縁でしょうから、奢りますよ。」

あまり食べていなかったことに加え、運動をしたせいで空腹感が強くなってきた。

三人は私の申し出に素直に首を縦に振っている。

第九話 交錯するもの side B（後書き）

数年前に漫喫で読んだ記憶を元に書いてますので原作キャラの口調とかが変だったらすいません。

一番最初の文を書いていたら自分でも意味が判らなくなってきました。やっぱり頭の悪い人間が妙な理屈を捏ねようとすると混乱してきますね。

第十話 酒宴は過ぎて

何かを望んだとしても、実際に私達がそれを手に入れられることはほとんど無い。

何故なら、私たちは自分の欲しいものですら、それが何なのか理解していないのだから。

形に出来ないものは明確な姿を現さず、それを求めるものを翻弄する。

私達に出来るのは失った後にそれを後悔し、どうにかして取り戻そうとしてさらに失敗することだけだ。

その結果、より多くのものを失ってさらに自分の欲しかったものを知る。

繰り返すことで対価に見合わない品物だけが増え、次第にそれに溺れていく。

人生には、そんな皮肉の集積所としての意味もあるのだろう。

「……駄目だな。これは、『刀』じゃねえ。これじゃ『肉斬り包丁』だ。」

「そうですか。やはり、上手くいきませんね。」

両手で持っている物をじつと見た後、ロロノアはそう言った。気をつかってくれたのかもしれないが、対して私の反応が淡泊だったためか、不思議そうな顔をしている。

「あっさりしてるな。」

「いや、多少は予想していたものですから。私の能力は応用でこんな物を作ることは出来ますが、それはあくまで、そういう形をした、別物にすぎません。それに剣士でもない私が刀を作ろうとしても似たような別物になるのはある種当然の帰結ですよ。重量なんかは錘を入れることで調節出来ますから、それっぽくはなるんですが。」

「なら、術理・・・、剣術なんかを覚えればまた違うのか？」

「・・・・・・いえ、見た目をより本物に近付けることは出来るかもしれませんが、それでも私自身の感じ方フイリングという点に変化は無いでしょうから使い勝手以外ではあまり意味は無いかもしれませんね。」

ロノアが返した抜き身の刀身を見ながら言う。一般的なそれと同じくらいの大きさでありながら、重量が無いと表現してもいいほど感じられない刀もどき。刀身の向こう側を不鮮明に映すそれは、ロノアが言うようにただ”斬る”という行為しか出来ない欠陥品だ。『そうか。まあ、これはこれで使い道もあるんじゃないかねえか？』

言われて私は自分の手に視線を落とす。

視界の中央では丁度設定した時間がきたため、音をたてて崩れていく刀もどきがあった。

今いる場所は襲撃される前にいた居酒屋である。

荒事に参加していた人間が入ってきたせいで最初は店員も嫌そうな顔をしていたが、私たちを見た他の客が続々と帰ってしまってから、何かを諦めたように接客してくれている。

カミラに包丁を返却させ、再度全員分の料理と酒を注文。

ロノアも他の2人もあまり遠慮はしない性質たちのようで、見ているほうが気持ちの良い呑みっぷりを披露している。

静かになった店内で全員揃って食事をした後、今度は刀の目利きが出来るというロノアに私の能力を見てもらったのだが、結果は大方の予想通りだった。

因みに私がロノアと話しをしている間、カミラはヨサクとジョニーの話し相手になっているが、そうしてもらうように言った後、「判った。ギアはあたしの愛を試したいんだね。うん、あたしは耐える妻だから。いつまでも待つてるから。ギアのこと、待つてるから。」などと言っていたが、怖いのでその意味はあまり考えたくない。冗談にしてはかなり迫力があつたし。

閑話休題。

私は能力で器物を作ることが出来るが、それにはいくつかの制限が

あり、似せられるのが外見だけ、というのもその内のひとつだ。

強度なんかでは確実に本物を超えるが、それが本来持つ機能や他者に与える感覚といった物は持ち合わせない。弾性や柔軟性といった性質は不可能だし複雑な機構もバラバラの状態から組み立てるか、それぞれの部位に”組みあがっている”状態で作っていくしかない。とはいえロロノアが言うようにこんなものでも使い道はあるだろう。武器としては勿論、他にも商品として等。

実際、島で使っていたような用途なら、いくらでも出来るし。包丁みたいな調理器具や細々としたものならそれほど苦労をしなくても数十年くらい形を保っていられるだろうし、刃物なら切れ味はよく油脂はほとんど着かず刃こぼれは一切無いものが出来上がる。

改めて考えてみると割と商品としては使い勝手が良いかもしれない。お金がなくなったら試してみよう。

しなりが必要なもの以外なら問題無いだろうし。それに、既存の物を強化や保存する用途でもいいかもしれない。保存することで利益を出すことができるのも、また事実だ。

密かに胸算用をしていると、それが判ったのか、ロロノアは少し呆れたように程々にしておけよ、と言った。

確かに悪魔の実の能力者であることが知られば、場所によっては商売どころではないだろうから気をつけておいたほうがいいだろう。

「ああ、そういうはこの街に剣術道場があるか知りませんか？」

「いや、無かったと思うが、なんでだ？」

「そうですね・・・。私は戦闘の訓練などは受けたことが無いので、船が使用出来ない間にでも何か学べないかと思っていたんですが・・・。」

悪魔の実の能力というアドバンテージがあったところで、それに頼るだけで技術を研かなければ、すぐに頭打ちになる。この世界には、頂点など見えないほどの上の実力者がいるのだから。

「道場で教わることが出来るのは、あくまで想定出来る範囲の状況に応じた型や戦術だし、それにしただって長い時間を掛けての話だ。

即戦力が欲しいなら実戦で研いていくのが一番手っ取り早いぞ。」

「・・・やっぱり、そうなるんですかねえ？」

一応、自分でもその可能性は考えていたが、あまりそうはしなかったのだから考えないようにしていたんだが。希望としてはリスクは低くリターンを高くしたいものだが、現実はその逆でハイリスクローリターンしかないらしい。

どうしたものか。と思っていると私たちの話を聞いていたのか、カミラがポケットから何かの紙を出しながら口を開いた。

「それなら、この街から山を三つ越えた所に山賊が出るらしいから、行ってみたら？」

「山賊ですか？」

「うん。これ。」

渡された紙を見ると、それは手配書だった。生死 ” D E A D O R A

問わず

” L I V E ” の文字の書かれた紙面には髭面の男の写真と、その下には1000万ベリーの賞金額が載っている。

おおぐま

” 大熊のゴウテツ ” か。

海賊にしる山賊にしるこれほどの額の懸賞金をかけられるまでにどれだけの悪事に手を染めていたんだか。手配書の写真もいかにも悪そうな面構えだ。

私が捕まえた一人目の賞金首が800万ベリーだったことを考えると次に狙う賞金額としては手頃だろう。というか、カミラはいつこの手配書をもたらってきたんだろう？今日はほとんど一緒に買い物をしていたはずなんだが。

ま、それはともかく問題はこのゴウテツの実力がどれほどあるのか、だが・・・。

防御力に関しては問題無いだろうし、まずはロロノアが言ったように経験を積むところからだろうか。

「ふむ。悪くはないかもしれないね。明日にでも行ってみましようか。山三つなら半日もあれば往復出来るでしょう。」

空中を歩けば足場の悪さも関係無いから、地上から行くのよりも大

幅に時間の短縮が出来るだろうし。私の言葉を聞いてロロノアが不思議そうに言う。

「半日？1日の間違いじゃねえのか？……、ああ、そういう能力なのか。」

「ええ。私には悪路はあまり関係ありませんから。カミラは船の改装の依頼をお願いします。外観は指示した通りに。内装については貴女に一任します。」

「おっけー。大きなハート型ベッドは必須だけど、他には何がいい？」

「……一応、何の用途で購入するのは聞いておきましょうか。」

「あら、いやだ。ギアったら言葉責めが好きなの？意外とまにあっくだねー。そこまで言うならあたしが一肌脱いで……。」

言いながら本当にその場で服をずらすとするカミラの手を押さえる。他の人間もいるというのに、何を考えているんだか。

いや、仮に他の人間がいなかったとしても、私に見せられても困るんだが。

もしかして、酔っているんだろうか？

無表情のまま顔色も変化していないので判らないが。

「脱がないで下さい。あと、ベッドは別々に購入するように。私の方は頑丈さを優先させたもので構いませんから。」

「えー、子供を作る作業の部屋はあったほうがいいと思うんだけどなー。」

……本当に危なかったのかもしれない。主に私の貞操的な意味で額の汗を拭いながらぬるくなってきた清酒を口にやると、視線を感じた。顔をそちらに向けると、ロロノアがなんとも言えない表情でこちらを見ている。

「ま、なんだ。苦勞するな。」

ロロノアが私にかけた労いの言葉が、何故か目に染みた。

第十一話 正偽の怒り

1 + 1 = 2

誰が考えたとしても、形而下の物を除いてこれ以外の答えはありえない。

だが、算数のように単一の答えしかない問題は思考遊びとしてしか存在しない。

現実には間違ふことしか出来ない問いやそもそも正解の無い問題が存在する。

どんな物事にも側面があるように現実とは必ずしも一樣なものではない。

むしろ、ある要素とある要素が組み合わせることで確実に練成される『答え』などという単純なものなど無いのだろう。

私達はどう回答するべきなのか。

私達はどう間違ふべきなのか。

その答えは誰も知らない。

走る、奔る、疾る。

足のはるか下を景色が後方に流れていく。今私がいるのは数百メートル級の山々の間、その上空だ。

少し雨が降っていたが、今は止んでいる。お陰で私も足場から滑り落ちるようなことはない。

障害物が無いので足取りは軽やかだ。普通に山道を通っていたらここまで速く移動することは出来ないだろう。

多分、地上から数百メートルくらいは離れているだろう。雄大な山々に囲まれた景色はそれなりに見ごたえがあるのだが、今自分が賞金首を捕らえに来ていることを考えると、それどころではない。

大熊のゴウテツ。

この一帯を縄張りに行っている山賊で、1000万ベリーの賞金首だ。カミラが収集してきた情報では、罪状は殺人、放火、強姦、強盗その他もろもろ。道徳や倫理といった概念には縁の無さそうな経歴である。

性格は単純で凶悪。狡猾さや謀略といった単語の似合わない文字通りお山の大将だが、それを自分の腕力1つで保っているそうなのでそれなりに腕は立つのだろう。

現在は縄張りの中にある村から定期的に食料や金銭、人間（主に女）の略奪を働いたり、運悪く近くを通りがかった旅人を死ぬまで弄（なぐ）って遊んでいるそうだ。

聞いているだけで胸糞の悪くなる話だ。

だが、現実こんな人間が存在し、それによる犠牲者が出ていることもまた事実だ。

そして、それを私のような賞金稼ぎが捕らえるのも。

「・・・あそこか。」

眼下の大きな山小屋を見て目的地の近くまで来たこと確認し、一度深呼吸する。

直後、勢いをつけて足場から空中に躍り出た。

勿論、能力を使用しないままなので私の身体は重力に引かれていく。つまり地上を目掛けて加速していく。

近付いていく地面。大きくなる景色。

人間がこの高度から落ちれば数秒後には潰れたトマトのようになるが、精神的にはともかく私は普通ではない。

地上まで百メートルをきったあたりで能力で全身を包む。本来表面だけに留めるところを体内までを全て。

多分、こんなことをしなくても実の特性上、大丈夫なのだろうけど、命をかけてまでそれを証明したくはない。

そう考えていると、意識が遠くなってくる。体内まで停止したことによる思考の遮断か。

そして気がつくと私は地面に半分埋まっていた。自分を中心にした

クレーターから出ると、目の前には山小屋がある。狙い通りニアピ
ンだ。

今日買ったばかりのスーツを掃い、土を落とすと、スーツと揃えた
色の帽子のつばを上げる。

丁度視線の先にある山小屋の扉が開いたところだった。

「なんだあ、手前は？」

さすがに私の落下音には気がついたのか、山小屋から出てきた汚ら
しい男たちが問う。それぞれが示しあわせたように、手には剣や槍
を持っている。中には銃を持った者までいた。

「通りすがりの賞金稼ぎです。特別覚える必要はありません。すぐ
に忘れたい記憶になりますから。」

奇妙なものを見るような表情だった山賊たちの顔が『賞金稼ぎ』と
いう単語を聞いた瞬間、引き締まる。

「貴方がたには選択肢があります。」

言いながら、私は手袋を嵌めた右手の人差し指を突き出す。

「1つ、今すぐ武装解除して海軍支所まで自首する。私の手間が省
けますし、貴方がたの罪を償う意味でもこれはお勧めです。」

中指をそれに加える。

「2つ、強制的に武装解除されて、海軍支所に連れて行かれる。こ
れは怪我をするからあまりお勧めできませんね。勿論貴方がたが、
ですけど。」

私が言った後、全員が怒り出すかと思っていたが彼らは互いに顔を
見合わせると、次の瞬間大声で笑い始めた。

「ぎやははははは！馬っ鹿じゃねえの！」

「言ってやるなよ！あはははっはは！！」

「ハッ！この人数相手にどうやって捕まえる気でちゅか？脳がわ
いてんのか、手前は？」

最後の一人の科白で笑い声がまた大きくなる。それを聞いた私はと
いうと、涼しい顔のままだ。

阿呆の戯言に付き合えない、という部分だけは同意しておこう。

「どうしますか？私としては簡単なほうがドン！！」

銃声と共に私の頭が後ろに仰け反る。

「なんだ、この馬鹿は？最近の賞金稼ぎはこんな酔っ払いでも務まるのかよ！」

大きなだみ声と、その後に続く不快な笑い声。品性の欠片も無い。というか、ムチ打ちにならなくて良かった。

勿論、こんなことを考えている私は生きている。

細かい話になるが、私の能力、ピタピタの実の力は触れている物に最優先で効力がある。つまり、今の私の場合、撃たれた箇所が顔ならそこに当たった弾丸が停止するのだが、上手い具合に帽子の中央を狙われたため、停止している帽子ごしに衝撃が私にぶつかったわけだ。

その衝撃も止めることは出来るのだが、注意を怠ったためか、今回は対応できなかった。少々舐めすぎたか。それが、連中の科白に怒りを覚えていたのか。

どうでもいいか。

「3番、手前をぶっ殺して支所には行かねえつてのも加えな。ま、もう聞こえてねえだろうがな。」

「いえいえ。聞こえていますよ。ですが、却下します。」

首を元の方向に戻しながらそう言うと、さすがに笑い声が収まる。

「・・・・・・今、当たったよな？なんで死んでねえんだ？」

困惑したような声は正面の巨漢、銃を構えた大熊のゴウテツが呟いたものだった。手配書通りの、見るからに悪人面だ。

肥満体の巨体からは俊敏性は感じられないが、その分銃の取り扱いが上手いかもしれないな。

どうでもいいことだが。

見ただけでは特に武器を隠し持っているようではなさそうだったが、その手に持ったものを見た瞬間、私の顔から笑みが消える。

右手持った銃は今私の頭を弾いたものだろう。

そして、問題は左手に持った鎖だ。

鈍い鉄色をしたそれは、ゴウテツの斜め後ろにいるものまで繋がっている。

見るからに疲れきった、裸の女性につけられた首輪に。

「・・・貴方がたの選ぶことが出来る未来は二つだけ。怪我をせずに拘束されるか、怪我をして拘束されるか。後者が好みのようなのでそうさせてもらいましょう。」

彼らが近隣の村から誘拐や略奪をしていることは知っていた。

だが、知識として知ってはいても、現実になんかそれを目の当たりにすると、また話は違ってくる。

事実、今私の中から『容赦』や『躊躇』といった単語が消滅した。

「どんな手品かは知らねえが、この人数相手にどうするってんだ！
！？」

「・・・こうするんですよ。」 キーファウト 「禁止領域」。

言うのと同時に私の足元から黒いなにかが広がっていく。それは地面の上を走り、泥を固め、停止させていく。勿論、それがたつぷりとついた彼らの靴まで。

とはいえその場にいる全員が私の仕草、もっと詳しく言えば、言葉に集中しているためか、気づいていない。子供だましのトリックだが、彼らにはお似合いだろう。

「で？それがどうしたってんだ？」

「既に終わっていますよ。何もかもね。」

そう言っただけは両脇から剣を構えていた二人の頭を持つと、抵抗しようとして足が動かないことに気づき、困惑している隙に楽器を鳴らす要領で打ち付けた。

ごっん、という鈍い音と共に彼らの意識を刈り取ると、次に前方にいる山賊たちに襲い掛かる。

こめかみ、鼻、喉、水月、金的。

それぞれの場所を正確に打ち抜かれた男たちが崩れ落ちていく。

これで飛び道具を持った者は一人だけか。

「手前！？何をしやがった！！」

ゴウテツが喚いて持っていた銃の引金を引くが、私の代わりに隣の山賊に当たっただけで終わる。

それなりに腕はいいようだが、手下をやられた怒りと足が動かせない恐怖で手元が定まらないようだ。

「今まで好き勝手に生きてきたのでしょうか？だから、今度は貴方達が好き勝手にされる番ですよ？」

因果応報という言葉を出すまでもなく、彼らがしてきたことはこんなものじゃない。

まだ足りない。

まだまだ足りない。

につこりと嗤^{わら}うと、一瞬で距離を詰める。他の山賊たちよりも力を割り増した正拳を正中線上に連続で叩き込む。

肉の感触が拳に触れる度死ぬかもしれないな、とは思ったがそれと同時にまあいいか、という思考も存在した。

情をかける相手は選ぶべきだし、今は躊躇すべきときでは無い。

「……手加減している上、急所以外とはいえもう20発くらいは殴っているんですが。まだ死なないとは想像以上に丈夫ですね。」

私がラッシュを止めると、ゴウテツは崩れ落ちた。

肉付きのせいかな、幸いまだ生きています。

とはいえ瀕死の重傷ではあったが。

既に腰を地面に落として朦朧とする意識でまだこちらを睨んでいる。鼻っ柱だけは高いことだ。

いっそのこと殺してしまえば、という思考が再び私を支配する。相手はそうされるだけのことをしている。

見てみる、鎖で捉えられた女性はあんなにも怯えているじゃないか。思考に抗うこともしないまま、腰が砕けている。ゴウテツを首を持ち上げ、無理やり立たせる。血泡が口元から出て雑音なのか潰れた声なのかわからない音が一緒に出てくるが、無視。

見せ付けるように掲げた左手の人差し指だけを伸ばした状態で固定。それを額の中央に矢の様に突き立てて

「ひっ！」

悲鳴が聞こえた瞬間、我に返った。

声の主は鎖に繋がれたままの女性だ。

彼女は私を見て悲鳴をあげた後、地面に倒れ伏した。どうやら気絶したようだ。

長期間暴力や虐待にさらされていたであろう彼女は、しかし私を見て怯えていた。

その事実気付いた瞬間、炎のように燃えさかっていた何かが、急速に冷却されて消失する。

残ったのは酷い後悔だ。

無言で右手に短剣を生み出すと、ゴウテツと女性の間の鎖に投げつける。

『斬る』という行為しか出来ない欠陥品はそれでも自身の機能を十全に発揮し、苦も無く鉄を断ち切った。

後は恐慌を起こした山賊たちを相手にした焼き直しを繰り返す。何度も、何度も。

その場に立っている者が私以外にいなくなるまで。

第十二話 後悔と決意

剣を向けられた者がその恐怖から、他の誰かに己の剣を向けるのはよく聞く話である。

自らを相手よりも優位に置きたいと思うのはさらに珍しいことでは無い。

その美醜はともかくとして。

しかし、誰かに向けた慣れない剣が上手く操れることはほとんど無い。

大抵は当たり前に、もしくは予期せぬ形で相手を傷つけることになる。

あるいは、自分自身をも。

そして傷つけられた者はその痛みと恐怖から同じく剣を向ける者になる。

恐怖と不理解の無限螺旋。

私達が『人間』である限り、それを止める術は存在しないのだろう。

不思議なことに思考が纏まらない。

微かに存在する『昨日のように襲撃されたら致命的だな』という思考を振り払い酒盃をあおる。中に入っていたアルコールが口腔に流し込まれる。

喉の奥が焼けるように熱くなり、それと同時に意識が一層胡乱になった。

もうどれくらい呑んだだろうか。

既に時間の感覚が無くなって久しい。楽しんで呑むという考えは思考の彼方に置き去りになっていた。

「ねー、もう止めといたら？」

隣から静止を求める声が聞こえるが、そちらを向くのも億劫である。

自分を心配してくれていることが判るということが、それに応えることが出来ない自分を知ることがここまで惨めな思いをすることになるというのは実に新鮮な感覚だ。

決して知りたかった類のことではないが。

目の前に置かれた徳利の山に向き合ったまま、口を開く。

「……今は、呑みたい気分なんです。放っておいて下さい。」

自分ではそう言っただつもりだったが、酔いのせいでちゃんと発音できていたのかも怪しい。

それでも、私の言いたいことが判ったのか、カミラの気配は少し私から離れた。

今、彼女がどんな表情をしているのか、情けなくて見ることもできない。

現実から目をそらすために手酌で何杯目になるのかも判らない清酒をある。

意識がさらに遠くなってきた。

最初は仏頂面で黙々と酒を呑む私を面白がっていたギャラリーもいつしか居なくなっている。

カミラが追い払ったのか。それとも、私が呑む姿は誰かの興味を引くような面白いものでもなかったのか。

益体も無い思考のまま再び徳利を傾けるが、今度は雫しか出てこない。

また無くなったか。なんだか無くなるのが段々早くなっているような気がするな。多分、気のせいだろうけど。

再び注文しようと顔をあげるが、居酒屋の主人は私を見ると渋面で首を横に振った。

肯定的なジェスチャーには見えないから呑み過ぎだとも言いたくないだろう。

実際、お酒を用意してくれないし。

お金はちゃんと払うのになあ。

ともかく、この店ではもう酒は出してもらえないようだ。
お客様第一の客商売の精神は何処に行ったのだろう？

・・・ああ、あるからこそ止められているわけか。
そこまで考えると、ふと自分の現状が嫌でも視界に入った。
なんなんだろう、今の私の状態は？

自分が保護する対象である少女に心配されながら一人酒をかつくら
つて。

昨日襲われた場所で襲ってくださいと言わんばかりに酔っ払って。
まさに”負け犬”とでも形容するに相応しい醜態を晒している。

今日私に起こった事実だけを見れば昼間、1000万ベリーの賞金
首を捕まえただけなのになあ。

冷静に自己を見つめなおすと、やたらと嫌なことばかりが目に入っ
てくる。

だから、それから目を逸らそうとして酒の力に頼っていたわけだが、
しかしこの状況はいただけじゃない気がする。

とはいえ解決方法など浮かばない。

だから酒の力に逃げる悪循環が続く。

「・・・・・・・・だ、こりゃ？・・・・。」

「・・・・・・・・けど・・・・・・・・なの。悪い・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・ねえが、お前・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・ってるから・・・・・・・・。」

自己嫌悪に陥った私の背後からカミラと誰かの話し声が聞こえるが、
振り向く気力が無い。

心配をかけてあわせる顔も無い。

意識が朦朧として今も見聞きしているはずの現実が遠い。

原因は判っているても、私の中にそれを打破出来る解が無いのだ。

「よう、今日はヤケに呑んでるな？」

隣の席に誰かが座った気配。

視線だけをそちらに向けると、緑色の短髪が目に入った。

カミラと話していたのは彼だったのか。

「……口ロノアですか。放っておいてください。」

心がさくれ立っているせいか、私を気にしてくれている口ロノアに対しても声に棘が混じる。言った後で申し訳なさを感じる辺り、私も相当まいっているようだ。

尤も、言われた当人はまるで気にせずに酒を注文しているが。

「なら、もう少し心配されねえような呑み方をしとけ。」

酒を頼みながら言う口ロノアはごく自然にそう言っているように見え、それが判るとなおさら自分の情けなさが見えてくる。

「もう船に帰らせたがあの嬢ちゃんも気にしてる。船長ならクルーを心配させるなよ。」

「……私だつて悩むことくらいはありますよ。」

「なら、それを見せない努力をすることだな。」

言われていることはどれも自分で判っていることだけに胸に痛い。私はどうしてこうも弱いのだろうか。

「……口ロノア。少し、独り言を言っても構いませんか？」

「ああ。俺はお前の奢り^{おこ}で呑んでるだけだからな。偶^{たま}に何か言っても、それも独り言だ。明日には忘れてるだろ。」

正面から投げかけることも出来ない、臆病な問い。

それでも彼は私の意思を汲^くみ取ってくれたのか、なんでも無いことのようにそう言つて、グラスを握った。

「……私は、海賊が嫌いです。山賊も嫌いだし、犯罪者全般を嫌っていると言つてもいいでしょう。それは私の出自に関わる部分が大きいのですが……、主な理由としては、彼らが振るう暴力にあります。」

「暴力？」

「……強者が弱者に対して一方的に振るう力。私はそれを嫌悪しています。ですが……。」

「そういえばお前は今日、山賊狩りに行ってたか。……そこで明らかに格下の相手に暴力を使つたつてどこか？」

「……私だつてそれが必要になることくらいは判りますし、納得

もしています。ですが、それだけじゃないんです。・・・私は相手がしたことに託^{かこう}けてそれを振るうことを楽しんでさえいました。私がそれに気付いたのは被害者の女性が私を見て悲鳴をあげた時です。・・・」

鏡が無くてもあの時の自分がどんな顔つきをしていたのかくらいは判る。

おそらくは、今の私が始まった時に見た顔のような表情だったのだろう。

そして、あの女性の、私を見る恐怖の視線。

あれは、忘れられないし、忘れてはいけないものだ。

かつて私もそれを投げかけた側にいたのだから。

「成程。しかし繊細なこったな。何時^{いつ}も実力が拮抗した相手がいるわけじゃない以上別に珍しいことでもないだろうに。」

ロロノアはそう言つと、グラスをあおった。

私だつてそんな理屈は判っている。

感情で納得出来ないだけなのだ。そして、それが致命的なだけだ。

苛立った私はロロノアに言葉を投げかける。私が正答することが出来なかった問いを。

「だったら、ロロノアはどうなんですか？血を楽しむことはないんですか？そして、そんな自分を嫌悪することは？」

「無えな。」

それはあつさりと言うにはあまりにも確信に満ちた断定だった。

「俺は、餓鬼^{ガキ}の頃”世界一の剣豪”になると誓った。だから、他のことに余所見してる暇は無え。」

子供の夢のような内容なのに、聞いた者にそうなるという強い意思を感じさせる言葉。

彼なら確かにその高みに上がることが出来ると予感させる声だった。

「・・・強いんですね。」

「どうだかな。余裕^{あゆ}が無いだけかもしれんぞ。」

感嘆して言つ私に、ロロノアは自嘲するでもなくそう言った。彼は、

とても強い人なのだろう。多分、私が思っていたよりもずっと話している内にいつしか、私の酔いは醒めていた。

悩んでいたことが完全に解決したわけではない。

それでも、彼のような決意を持つ人の前で下を向いたままにいることが恥ずかしくなってきたのだ。

だからこそ、私も同じ部分を晒すべきだろう。

傷を舐めあうのではなく、あくまで彼とは対等に話をしたいから。

「じゃあ、ロロノアの夢を聞かせてもらったお礼です。私の夢、というか航海の目的を話しましょう。」

「いいのか？」

「構いませんよ。別に隠しているわけでもありませんからね。それに、私だけが聞いているのはフェアじゃないでしょう。」

「・・・そうか。」

どうにかいつもの調子が戻ってきたのか、私は笑顔を浮かべるとそれを口にする。

「私の目的は、

身のけじめをつけることです。」

家族の仇を、私自

第十二話 後悔と決意（後書き）

書いててゾロの言動に若干の違和感が。気のせいであって欲しいですが・・・。

第十三話 剣戟の向こうに

戻りたいのか、と問われれば肯定する。

取り戻したいのか、と問われても首肯する。

だが、どちらなのか判らないのか、と問われても頷くだろう。
失ったものと植え付けられたもの。

奪われたものと持つことすらできなかったもの。

論理矛盾と二律背反。

自分の傷を切開出来ない以上、私にはその答えは判らない。

それを知るときが来ないことを、他でもない私自身が祈っているのだから。

黄金の輝きを持つそれは、くると回転しながら日光を反射し、
自身の存在を見せ付ける。

ベリー金貨。

それなりの価値のある貨幣で、割と一般的に使用されるものだ。
とはいえ、この使用方法是若干趣が違うが。

充分に滞空した後は、当然のように地面に落ちていく。

回転を弱めながら、しかしそれでも周囲の空間に自身を埋没させないままに。

かさり、と音をたてて背の低い草の中に隠れると、場面が変わる。

舞台が始まる合図だったのだ。

私はロケットのように正面に向かって走り出すと、上着の袖を捲り上げる。

「ラップタイム 装甲時間”！”

声と同時に私の両腕の表面が黒く黒く塗りつぶされていく。出来上がるのは腕の形をした凶器だ。

「三刀流鬼、斬り！」

それを迎え撃つのは、三振りの刀。

ガン、と音を発てて刀と私の両手がぶつかり合う。

どちらも進退せず、その場でお互いの得物で押し合ったまま。

激突の衝撃波か、体中がびりびりと痺れている。が、ここで押し負けたら痺れどころではないだろう。

他に理由があるのならともかく、能力があるとはいえ、一步間違えれば真つ二つになるかもしれないような防御はそうそう使いたくはない。

特に彼のようかなり強い人を相手にしている時は。

一応予想は出来ていたから、腕自体にかかる衝撃を考えて武器化する場所を選んだのだが、あまり意味は無かったか。

全力ではないにしても今の一撃には正直かなりの力を込めていたのだが、相手は全く押し負けないどころか、気を抜くと負けそうだ。

余程の名刀なのか、それとも扱いが熟練者のそれだからなのか。私の腕と競り合いながらも、三振りの刀はその切れ味を落としているようには見えない。

それに臂力はある島の大型猛獣並み、どこかそれ以上だ。

正直、相手が本当に人間なのか疑問になってくる。

いや、それは能力者故の傲慢か。

この事実は素直に驚愕と感動の中で感じるべきなのだ。

つまるところ「素晴らしい！」と。

人間は、ただ『鍛える』という行為だけでここまで強くなれるのだ。そして、これが上限というわけではないのだろう。

とはいえ私もただ負けるつもりは無い。

右手一本に力を集中し、空いた左手で突き・・・、口元の刀で弾かれる。しかも、右手にかかる圧力が倍以上になったので、慌てて両手でそれを支える。

両手を巧みに動かし、刃の間を突破しようとする・・・、が三本の刀はそれを許さない。私が狙おうと思った軌跡は行動に移す寸前には刀に妨害されていた。

簡単に通してくれはしないだろうとは思っていたが、ここまでとは。実に感嘆に値する。

そして、今の挙動からして反射速度は私の方が僅かに下か。おそらく力自体はそう変わらないだろうが、他の部分は0.5〜1割程度は私の方が劣っているかもしれない。

それに加えて私自身の挙動に無駄が多いのも原因のひとつだろう。反射神経の良い相手だと、何を仕掛けようとするのかまるわかりだ。それだけなら割と致命的だが、しかし絶対のものではあるまい。相手に技術や経験があるなら、私には能力がある。

というか、それでも思わないと負ける要素ばかりが目についてくるのだ。

相手の顔を見ると、黒い手ぬぐいの下から鋭い、しかしどこか愉快そうな眼差しがこちらを見返していた。

私も似たような表情を返すと、両手に尚も力を込め、反動で数メートル下がる。

音を発てて消滅していく両手の表面の黒い靄。

けっして彼のことを舐めていたわけではないのだが、それでも私とここまで渡り合える人がこんな身近にいたとは。

案外、世界というものは広いのかもしれない。私が思っていたのよりもずっと。

「どうした？もう終わりか？」

「まさか、ですね。まだまだこれからですよ……。ロロノア！」
刀を銜えた口から挑発の言葉が飛び出すが、それを聞いた私はもう一度両腕に装甲時間をかけ直す。

今度は手首から指先までの周囲と合わせた五指の先から数十センチ以上の黒い刃状の靄が伸びる。

手と剣が一体になったよりリーチが長く、より殺傷力の高い形に。そしてそのまま前に倒れるように体を極端に前傾させたまま顔を前に、両の手剣を地面に擦らせながら走り出す。

「ハアアアッ！！！」

「オオオオツ！！！」

私自身のスピードに遠心力を上乗せした手剣と、ロロノアの三刀流が再び激突した。

事の始まりは半日前にさかのぼる。

居酒屋でロロノアと話をしたことで私はようやくいつもの調子を取り戻したわけだが、今度は妙な気恥ずかしさが残ったものだ。

それは改めて自分の弱さを他人に見せてしまったことであつたり、そんな自分を制御出来ていなかったことに対する羞恥であつたのだらう。

ともかくその後も私は水を、ロロノアは酒を呑んでいたわけだが、話題が昨日見せた私の”肉斬り包丁”にまで至ると、少し風向きが変わってきた。

ロロノアが『稽古』をつけてくれるそうなのだ。

おそらく、昨日私が剣術道場を探していたことを思い出してくれたのだろう。

本人は「酒の礼だ」と言っていたが、嬉しく思った私がその申し出を断るはずもなく、一も二も無く快諾した。

ただ、彼がその見た目通り、細かい技術よりは実践から入るタイプだったため、そうとは知らないまま翌日、呼び出された町外れの森で決闘まがいの戦いを演じることになったのは若干予想外だったが、とはいえこれはこれで実践的な技術や知識が手に入ると考えれば悪くはないかもしれない。

前向きにそう考えつつ、再び両手の刃に全力を込め、今度はロロノアの刀を無理やり二本弾く。

かなり強引にしたため、剣の勢いを殺せないまま私もロロノアも体勢を崩していく。

私に至っては時間がきたせいで手剣まで消えていくので、完全な無防備だ。

決闘をしている状況でこの姿勢は致命的だろう。

姿勢を崩された状態で刃筋を通すなど、至難の業なのだから。

しかし私は正しく剣士ではない。

少しずつ、理解出来てきた。

ほんのさわり程度なのだろうが、今はそれで充分だ。

剣士ではない私に出来るのは、所詮その真似事だ。

だから、そんな私が扱うのも当然の帰結として『剣術』ではないし、使うのも『刀』ではない。

あくまでその『紛い物』なのだ。

本物では無い技術に本物ではない器物。

何処にも『真』であると誇ることが出来る物は無い。
だから。

極端な話、剣術という視野に捕らわれることも無いのだ。

体勢を崩し、横に倒れながら振り上げる脚。

そのの全体が黒い靄に包まれたままロロノアの顔に当たったのも、
本来の剣術としては有り得ないものなのだろう。

ガッン。

固いものが打ちつけられる音が響く。

おお、という声がどこからか聴こえた。

多分、見に来ていたヨサクかジョニーのどちらかだろう。

私はかなりの覚悟をした上で、この捨て身の奇策を使用した。

そして、それは実際命中した。

だが、ロロノアは倒れない。

それどころか、傾いでいた体勢が元に戻っている。

それは何故か。

彼が咄嗟に口にくわえた刀の鏑で防御したからだ。

反射速度の差から、防御されることは予測出来ていた。

だからこそ、咄嗟に対応出来ないようにした状態で追い討ちをかけたのだが、上手いかなかったか。

それにしても普通なら歯が折れるくらいのダメージはあると思うの

だが、どうやら彼にとっても「普通」という概念はあまり意味をなさないらしい。

尻餅をついた状態の私は、そう諦念と共に受け止めると、口を開く。
「禁止領域」^{キープアウト}」

言うのと同時に左足の先から地面を広がる黒い靄。

それが何かは判っていない様子だったが、戦士としての勘からか、ロロノアは瞬時に後退し私から距離をとった。

不意打ちのつもりだったが、これも通じないとは。

動揺しながらもいくつかの追撃が思い浮かぶが、軒並み却下。

これ以上続けても泥沼だし、正直他の手も通じるとは思えない。

私は両手を上げると、降参の意を示した。

「……私の負けのようですね。」

「ま、いいセンだったと思うぞ。あと必要なのは経験だな。」

ロロノアの言葉に苦笑を返すと、地面に手について立ち上がる。

彼と私の経歴の差を考えればこの結果は妥当なところだろう。

無論、私とて最初から負けれると思っていたわけではないのだが。

とはいえ、今私の中にあるのは負けた悔しさよりも、不思議な爽快

感の方が強い。

「いずれ勝たせてもらいますよ。負けっぱなしはあまり好きではありませんから。」

刀をそれぞれの鞘さやに納めたロロノアに向き合っていると、そう言って拳を突き出す。

「俺も負ける気は無えがな。」

ロロノアはそう言って、静かに自分の拳を私のそれに突き合わせた。

第十三話 剣戟の向こうに（後書き）

今回ギアの使用した手剣は『ダイの大冒険』のミストバーンを思い出していたければ判り易いかと思います。

当直明けで睡眠不足のせいか、書いていてゾロの「酒の礼だ」という科白が何故か「お、お酒のお礼なんだから！他の意味は無いんだから！」という判り易い属性的なものに脳内再生されましたが、そろそろ病院に行ったほうがいいですね。

第十四話 別離と旅立ち

善良であると自己を規定する場合、その人間は概ね自分が偽善であることに気づいた上でそう思っている。

悪党であると自己を規定する場合、その人間は概ね自分が救いを求めていることには気づいてはいない。

規定することと希求するものは悲しいほど背中合わせで、お互いの存在を知るか、知らないかの差はあってもそれを正確に捉えることは誰にも出来ない。

ただ、善悪を^{わら}嗤うものにはどこまでも救いが無いことだけがどんな世界でも共通する事項だろう。

sideカミラ

長いと言えば長いし、そうでもないと言えば否定はしないんだけど、この街に来て数日が経った。

明日には出航する予定なので、もう長居することは出来ないけどそれは仕方無い。

初日にあつた襲撃もあれ以降無いし、落ち着いて生活できていると思う。

元々あんまり長居する予定じゃなかったみたいだから案外時間が掛かったような気もするけど、あたしもギアも船の工期なんか判らないからこんなものなのかな？というくらいしか感想が無い。

とはいえ今日の午後には船が完成するそうなので、漸く出航出来る。勿論ここ数日何もしてなかったわけじゃない。

ギアは毎日あちこちを文字通り飛び回って賞金首を捕まえてきてるし、あたしはあたしで賞金首の情報収集やお料理の練習、ギアを助けることが出来るようになるための鍛錬と中々忙しい毎日を送っていたりする。駆け出しだから仕方無いんだろうけど。

因みにギアは料理と鍛錬には気付いてない。必死に隠してるから、しばらくはバレないと思う。

今はひたすら腕を磨いていつかあたしの内助の功が日の目を浴びる時を待とう。

でも役立たずだとは思われないように情報収集にも気を使わなきゃ。話は変わるけど、実は毎日のようにギアが手に入れた懸賞金が増えていくせいで今貯まってるお金だけでも一等地に庭付きの屋敷を買えるくらいのお金はあったりする。

ギアはあまりそのあたりは頓着してないみたいだけど、それが興味が無いからなのか、自分以外の為に使うためなのかは判らない。

女にいれこもうと商売に手を出そうと、彼が何の為にお金を使ってもそれは自由だし、よっぽどのもので無い限り反対はしないけど、あたしが危惧してる使い方だけは阻止しなくちゃ。

そういえば二日目の夜、ギアが落ち込んだとき、ロロノアさんに話をしてもらえるようお願いしたんだけど、実はあたしもその話を聞いてたりしたのだ。

前もってあたしは船に戻ってることにしてもらったからギアにはバテないとは思う。かなりベロベロに酔って呂律もあんまり回ってなかったし。

話の途中で『仇討ち』って言ってたけど、あれはどういうことなんだろう？

あの言葉を口にした瞬間、何故かギアの背中が凄く悲しそうに見えた。

ただ仇を憎んでるだけなら、もっと違う風に見えると思うんだけどなー。

気になるけど、我慢しよう。

今は判らないけど、とりあえず彼が言ってくれるのを待とうと思う。迂闊に”聞いても構わないけど聞いて欲しくない事”を聞いて、図々しい奴だと思われるハイサヨナラは嫌だし。

実際、あのときギアが口を割ったのも、お酒のせいで普段はあまり

表に出さない頑固さが原因だろうし。

酔ってるときに喋ったことを一々本気に出来るはずも無いし、それで不愉快な思いをしないわけではないのだから。

とはいえ、この街にいたお陰で歓迎できる変化もあった。

最近では毎晩あの三人組と一緒に飲み歩くのが日課になっているから、ギアも明るくなってきた気がする。物腰は柔らかいんだけど普段からニコニコしてるタイプじゃないから、本人のことを考えると良い変化なんだと思う。

もしかしたら今まで男友達がいなかったのかな？

ゾロさんも他の二人も、見た目は威圧感があるけど話してみたら結構いい人だし。ゾロさんはギアとは別のベクトルで堅物って感じだけど。

ただ、そうになると、ギアが船出を寂しがるかもしれないな！。

街の人からも近辺の山賊や海賊を根こそぎ捕まえちゃったから感謝されてるみたいだけど実は、この街からギアが1日で往復出来る範囲を縄張りにしてる賞金首はもういないから、そういう意味では船の完成は丁度良かったんだけど。

グランドライン

ギアに聞いた話だと徐々に偉大なる航路の入り口を目指して進んで行くつもりらしいけど、三人は違いたいだから、ここでお別れになる。

次はいつ会えるのか判らないんだから、後悔はしないように出来るといいんだけど。

side ギア

「色々とお世話になりましたね。」

「そうか？こっちはその分奢ってもらってたからよく判らんな。」

私がかけた声に、ロロノアは真面目くさってそう返した。

表情はむっつりとしたままだが、彼なりに「気にするな」と言ってくれているのだろう。

今私達がいるのは船着場の一角、改修を依頼した船の傍である。

改修が終わり、私達は町から出航することになった。

既に付近にいる海賊も粗方捕縛されているので、ロロノア達も数日以内には出発するらしい。

行き先が同じなら乗せていくこともできるが、彼等の目的地はまた別のようだから、仕方無い。

「この稼業をしていくのなら、いずれまた会うこともあるでしょう。そのときは、私が勝たせてもらいますよ?」

にやりと笑うと、数日前のように拳を前に突き出す。

「何度も言うが、負ける気はねえ。」

ロロノアも口元を歪めると、それに自分の拳を付き合わせた。

そして、そのまま船に乗り込む。

あっさりとした別れだが、そんなものだろう。

彼の方も、町の方に向かって歩きながら背後からそれを見ている私に、振り返らないまま一度だけ手を振っていた。

少し寂しいが、広い海とはいえ運が良ければまた会うことも出来るだろう。

さて。

私は今からしなくてはならないことがあるのだ。

「カミラ。少し、話がありますが構いませんか?」

「ん? 出航はもう少しかかるから、別にいいけど、何?」

黙々と準備をしてきているカミラを呼ぶと、甲板の上で向かい合う。

しかし、なんだか話辛いな。必要なことだというのは理解しているのだが、どうにも口に出しにくい。

「……その、貴女のこれからことなんですが、少し話しておこうかと思ひまして。」

「何?」

「……以前にも言った通り、私はこれから偉大なる航路を目指します。当然、既知未知併せて様々な危険があるでしょう。」

「ま、そうだねー。他の海の常識は通じないらしいしー。」

「私はあまり多芸な人間ではありませんから生計は賞金稼ぎで立ていくしかないんですが、そうすると海賊達から恨みを買ったことにもなります。」

「大丈夫！一族郎党全部捕まえちゃえば問題ナシ！」

「いえ、言うほど現実的ではありませんよ。それは。一人目ですら後から襲撃されたんですから。」

「じゃ、どうするの？」

「・・・私が海に出ているのは自業自得なものです、貴女はそうではないでしょう。」

「で？」

「今なら私は一人が生活していくには充分なお金があります。」

この街は周囲の海に海賊はほとんどいませんし、海軍支所も近場にありますから、治安もかなり良いと言えるでしょう。だから・・・

「降りないよ？」・・・駄目ですか？」

「うん。絶対ヤダ。」

笑顔で言うカミラは、有無を言わさぬ迫力を持っている。だが、ここで引き下がると彼女を大いに危険にさらすことになる。それには強い拒否感があった。

「私は、自分のことで精一杯です。貴女の命に責任を持ってません。」
覚悟を決めて、遠まわしとはいえ彼女に「お荷物だ」と伝える。それを聞いたカミラは笑顔のまま口を開いた。

「ギア？」

「・・・なんですか？」

「歯、食いしばって？」

カミラが言ったのと同じ時。右の頬に凄まじい衝撃が奔り、私は強制的に左斜め後ろを向かされた。

体勢が崩れそうになるが、なんとか持ちこたえる。

いつだったか頭部に食らった銃弾の衝撃よりも強い。全く反応できなかった。

「というか、何？何故？」

「カ、ミラ？」

「あ、痛。久しぶりに本気で殴っちゃった。ギアが悪いんだよ？」

「あー、その、すみません。しかし、何故？」

じんじんと痛む右の頬を押さえたまま、釈然としない気持ちでカミラを見る。

彼女は左手を痛そうに抑えたまま、恨めしげにこちらを見返していた。

「だってー、ギアってば馬鹿なことばっか言ってるんだもん。」

「な！」

色々と考えた結果、出した結論だというのに、馬鹿はないんじゃないだろうか。

「だいたい、ギアってこんな大きな船動かせないでしょ？能力で海の上を移動できるって言うてたけど、偉大なる航路までそれができるなら、最初からそうしてるよね？だとしたら、船が必要になるのに、それが動かせないって凄く無駄だよ？それに、情報収集もあたしにまかせつきりだったのに、どうやって自分でやるの？話で聞いた範囲じゃ、ギアってそんなことしたこと無いよね？ま、自分で覚えることもできるけど、一から覚えるのって時間がかかるよ？やつぱりそれも無駄だよ？ギアが何をしたいって偉大なる航路まで航海するつもりかは知らないけど、それって無駄なことをしてるほど余裕のあることなの？・・・それに、あたしのことを心配してくれてるんだろうけど、あたしはそんな危険^{リスク}、承知の上でこの船に乗ることを決めてるの。馬鹿にしないで。」

カミラはそう言うとう肩をいからせて船室に入ってしまった。

私は何処までも現実的な彼女の言葉に、「そうですか。すみません」と言っただけで呆然としながらその後ろ姿を見送るだけだった。

第十五話 狂宴の幕は上がり

普遍的に存在するものとは何か、と問われたとき、思い浮かべられるものは、『人間』が存在することが前提になっているものが一定の割合で含まれているという。

しかし面白いことに、それらの人々は人間が何時までも存在していることを盲信しているわけではないらしい。

需要の無いものは、やがて朽ちて消える。それがどんなに崇高で、得難いものであっても。

人間ですら、例外なく。

後に残るのは平凡な欲望の残滓と、終わってしまった物語だけ。

船がゆつくりと海を進んでいく。

周囲には小規模な島がいくつも並び、入り組んだ地形になっている。既に目的の島も割りと近くまで来ているので、カミラに声をかけてから、帆を畳むことにした。

ここなら他の船から簡単に乗り移られるほど陸に近くはないし、そのうち船の進みも遅くなるだろう。

一人で帆を巻き上げるのは中々難しかったが、それ以外の部分でかなり助けてもらっているのだからせめて私に出来ることはしなければ。

一つ仕事が終われば、次はまた別の仕事だ。カミラに「それじゃ、行ってきます。」と言って甲板から飛び降りる。

「無理はしないよーにねー。」

カミラの声を聞きながら、海の上に着地すると、島に向かって走り始めた。

出航した日は口もきいてもらえなかったが、彼女は切り替えが早いのか、それとも女性とはそういう風なものなのか、翌日からは普通

に接している。そのため、船内の空気も悪くないので正直ありがたい。

さて。

出航してから、数日が経った。

私たちの船は徐々に偉大なる航路の入り口に向けて航路をとりつつ、途中で襲ってきたり、通る海の途中に縄張りを持っている海賊を捕らえたりしていた。

因みに今回私が向かっているのは後者である。

標的は『爪牙のヴェロニア』という1200万ベリーの女海賊だが、罪状については不明な点が多い。お決まりの略奪や殺人の他に大量の人間を誘拐したことがあるそうだが、その人々をどうしたのが全く情報が無かったのだ。

いつぞやの『首斬り』のように人身売買が目的なら、もう少し情報があるはずなんだが。

もしかしたら自分の手下として使っているかもしれないが、命が惜しいからといって皆が皆従うだろうか？

ともかく海賊が慈善事業をするために違法行為をはたらくとは思えないから、ロクな理由ではないのは間違いないのだろうけど。

お金にはあまり興味は無いが、賞金をかけられる程度には悪党なのだから、見逃すという選択肢は無い。

そういえば用途が無いため今のところあまり使わないせいでお金がどんどん溜まっているが、いつ何処で必要になるか判らないのだから、まあ気にする必要はないだろう。船の改修もけっこうお金がかかったし。

それに、不愉快になるような行為をしている相手を野放しにしているほど私も博愛主義者ではない。それが、誰かに悲しみや苦しみを与えているのなら、尚のことだ。

私自身、正義や義侠といった言葉とはあまり折り合いが良くないのだが、それでも人として越えたくない一線はあるのだから。さて。

考えている内に、海の上から地面に降り立つ。

三日月状になった島は全体に密林が覆っており、上空から見ても視界が限りなくゼロに近そうだったので、最初からその先端の一方に素直に上陸しておく。

すぐさま索敵に入ろうか、と考えていると突如として轟音が響いた。

「・・・なんでしょうか？」

誰にともしも無く問いかけるが、当然それに応えてくれる人間はいない。そうしている間にも、音は数秒おきに起こっていく。途中、何度か銃声も聞こえ、爆発のような音が５回目を数えたあたりでよく判らないながらも、とりあえず行つて見ることに決め、木を避けながら森の中に向かつて走り始めた。

さつきから続いている音は何なのだろう？

大砲や爆弾とは考え辛い。上陸するとき、島の周囲の海に船影は見えなかったし、そもそも音が火薬による爆発音とは違うような気がする。

確証がないままだが、それでも進んでいくと次の瞬間、惨状が視界に飛び込んできた。

その場から見える限り、数十本の大木が幹の途中から折られ、地面にはクレーターのような外縁部が少し盛り上がった浅い穴が開いている。そして、その周囲には泥や血で汚れた数人の男達が転がり、呻いていた。

奇跡的に全員が生きているようだが、全て深手を負っている。

木や地面のことを合わせて見ると、明らかに人間業ではない。だが、数十秒前に作られたであろうこの破壊跡には、火薬の臭いや爆発物の痕跡がない。つまり、爆弾や大砲でこの状況を作ったわけではなさそうだ。

ひとまずまだ意識のある者に手を貸して起こす。

海賊は反吐が出るくらい嫌いだが、今は情報が欲しいので頓着はしていない。

「・・・私の声が聞こえますか？・・・何があつたんですか？」

その男は20代半ばくらいの髭面の男だったが、腕の肉が半分くらい挟られているせいで大量に出血し、顔面は蒼白になっていた。

「う………、化、物が……。見境なく、襲ってきやがった……。」

「化物？」

「剣も、銃も、効かねえ……。くそつ、ありや、何なんだ……。……。」

そう言うと、男は気絶した。逃げることは出来ないだろうから放っておくと恐らく死ぬだろうし、一応その場にいる全員を停止させておく。傷付けたのが他人だとしても、彼らが生きるか死ぬかを選び、それを見捨てるのは私だ。

海賊である彼らのしていたことを想像すると惨めな死は当然の因果だとは思うが、さすがに寝覚めが悪い。後で回収して海軍に放り込めば、あつちで治療してくれるだろう。

それに、死んだら償いも出来ないのだし。

今のところ判ったことは1つ。現在、ヴェロロニア海賊団は私以外の何者かに襲撃を受けており、その相手は人知を超えた力の持ち主である、ということ。能力者か、単純な腕力かは知らないが、この惨状を見るかぎり、私でも直撃すると少し辛そうだ。

一瞬、船に戻るかそのまま進むかを考えたが、すぐに後者を選び、歩き始める。

ここまで来て手ぶらで帰るのも情報収集をしてくれたカミラに申し訳が無いし、既に頭が倒されていたとしても、その顛末くらいは知っておいたほうがいいだろう。

それに、正直あの破壊をなせる『化物』にも興味がある。

動物であれば獲物を倒すのにあそこまで無用な破壊は行わないだろうから、もしかすると人間なのかもしれないな。

さっきの海賊の言った通りに銃も剣も効かないのだとしたら、能力者である可能性が高い。とりあえず破壊の跡をつけて行くことにしよう。

しいて予測出来る事があるとすれば大型の船が無かったことから敵対している海賊や人海戦術を好む海軍とは考えづらいから、恐らくは賞金稼ぎだろうと思う。

海賊に限らず実力の突出した者がいない戦闘者の集団というのは基本的に攻めるのは得意だが守るのは不得手であることが多い。前者が武器さえ持てば馬鹿でも出来るのに対し、後者は司令塔と手足となるものが役割に忠実でなければ成り立たないのだから、その難易度の差は歴然だろう。

今回のこれも、襲撃している者が実力者であると同時に、海賊たちの足並みが揃っていないことが原因なのだろう。

だからこそ賞金稼ぎが単独を好む傾向が出てくる、という事実にもつながってくるのだが。

既に破壊の跡の無くなつた森をそんなことを考えながら走っていると、微かな声が耳に届いた。

海賊だろうか？

見付かるとよろしくないかもしれないので、階段のように空中を駆け上がると、木の間を縫うように移動していく。

百メートルほど走ると、誰かがいたので木の影からそれを伺うことにした。

「どうなつてんだい！いつまたあの化物が来るかもしれないのに、なんでこんなところに隠れてなきゃならないんだい！」

「お、落ち着いてください。キャプテン。船はまだドックにありますから、逃げることは出来ます。でも、野郎は足が速えですから、見つかつたら島から出る前に追いつかれちまいますよ。」

抑えた声で話していたのは、目から下を布で隠し、体つきが異様なほど丸々とした女と、眼鏡をかけた針金のように痩せた男だった。それぞれ、薄汚れていながらも割と上等な服を着ている。

手配書の情報によれば、女が『爪牙のヴェロニア』、男がその副官の『ゴトー』だったか。

二人共１０００万ベリー前後の賞金首だが、彼らも逃げていたのか。

化物と呼ばれる人物のことが益々気になってきた。

「はん、だったらいつまで隠れてりゃいいってのさ？だいたいあの化物を連れてきたのは、あんただろう、ゴトー？」

「そ、そりゃあそうですね、いたぶってたのはキャプテンじゃねえですか。」

「なんだい？あたしが悪いってのかい？」

二人が言い争ってくれているお陰でだいたいの事のあらましは理解出来た。捕虜か、単に嗜虐心を満足させるためかは判らないが、彼らによって連れて来られた人物が何故か豹変して今度は海賊たちを追いついて始めたわけか。

完全に自業自得だが、だとしたら、化物と呼ばれている人物が賞金稼ぎかどうかは判らなくなってきたな。

とはいえ。

獲物がウロウロしているのに、捕らないのももったいないか。私みたいに結果よりも過程を重視している賞金稼ぎは少数派だろうし、海軍なら問題ないし、手柄を取りたい者でも、名乗り出ないことを約束すれば賞金首を誰が倒したかは頓着しないだろう。海賊ならついでに倒してしまえばいい。

そう結論すると、音も無く2人の真上まで移動し、次に足場が消滅するのを待つ。

「！」

いつぺんに2人を攻撃すると、ゴトーはまともに頭頂部に拳を食らい昏倒したが、ヴェロロニアは見た目に反して一瞬速く後ろに下がって避ける。

ふむ。この程度は当たらないか。

「・・・なんだい、手前は？」

「1200万ベリーの賞金首、『爪牙のヴェロロニア』に間違いはありませんね。」

極めて感情を込めないように、帽子の鍰を持ち上げながら、そう確認する。

が、彼女は思った以上に短気だったようだ。

「あたしは、誰だって聞いてるんだよ！答えな！」

「・・・これは失礼。私はしがない賞金稼ぎですよ。本日は貴女の首を戴きにきたところです。」

名乗る必要は無いし、名乗る気も無い。私と彼女の関係は、それだけで決定するのだから。

「・・・そうかい。・・・あんたはあの化物の仲間の馬糞野郎かい・・・。」

酷い言われようだな、と思いながらも口は開かない。なんだか勘違いをされているようだが、あえてそれを訂正するのは止めておいた。面倒くさいし、それで実力以上の力を出せるなら、好都合だ。

「どいつもこいつもあたしの邪魔をしゃがってツツ!!」

ジャキン、と音をたててヴェロロニアの両袖から短い手甲、のような鉤爪のような何かが出てきた。

彼女が腕を振るうと、それが釣竿のように伸び、1メートルほどの長さになる。

銀色のそれは、先端がかなり尖っており、割と殺傷力が高そうだ。異名の由来になっている武器か。

私はというと、両手にそれぞれ刀もどきを作り出し、相対する。

「「シャアアアツツ!!」」

仕掛けたのは同時だった。

上下から挟み込むように斬りかかる私に対し、相手はそれぞれを爪でからめとるように軌道に割り込んできた。

そして、それはたしかに爪の間にはさみ込まれ、わずかに引きつけながら、すくい上げようとする。にやりと彼女の目元が歪む・・・
・・・が、吹っ飛ばされた。

あれ？

ヴェロロニアは背後にあった木のところまで飛んでいくと、それに頭からぶつかり、ずるずると崩れ落ちる。

困惑の次は理解が私を満たすが、それはどうにも面白くない答えだ。

音をたてて転がるヴェロロニアを見ながら、私は手応えの無さに少し失望していた。

『敵の武器を奪ってから倒す』というのは技術的には真つ当だが、能力でそれを作っている私にとってはあまり意味が無いしそれを為すには彼女は非力に過ぎる。

見た目は力強そうだが、それでも膂力ではロロノアや私のクラスは望むべくもないか。

反射神経、力、敏捷性。今見たのが実力の全てなら、ありとあらゆる要素で私以下だ。

勿論強さを構成するものはそれだけが全てだというわけではないが、いくらなんでもここまで差があるとお話にもならない。

実力が上の相手なら闘う意義は大きいが、これでは消化試合にしかならないだろう。

「これでは戦つても意味が無い。そうは思いませんか？」

気絶したヴェロロニアの代わりに、後ろに問いかけると、微細な空気の乱れが感じられた。困惑しているのかもしれない。

振り向くと、そこには予想通りさつき昏倒したはずのゴトーが立っている。

頭を抑えているから、全く効いていないわけではないのだろうが、案外タフだったようだ。

「いつ、気がついた？」

「ヴェロロニアの眼球に反射して見えていました。まあ、それに気付いたのは彼女の表情が変化したせいですが。」

「手前もたいがい化物だな……、にしても使えねえ豚だ。」

吐き捨てるように言うと、ゴトーは腰に差していた銃を取り出した。「彼女の實力からして、挟み撃ちが常套手段だったんでしょが、だとしたらもう少し連携の不自然さを失くすべきでしたね。……

あと何をする気かは知りませんが、私には効きませんよ？」

そうかよ、とは言ったが私の忠告には応じず、ゴトーは銃を構えた。だが、その銃口は私に向けられていない。

「……だが、やっとこれで終わるか。」

向けられているのは倒れたヴェロロニアだ。

引金に指をかけた瞬間。

私は右手の刀もどきを捨てると、手を振り下ろしながら長さ数メートルの長刀を生み出した。

刃筋を通された欠陥品はゴトーの手にした銃を正面から切り裂き、銃身とグリップを分割する。

「何のつもりだ？」

「それはこっちが聞きたいですね。」

結果的に、とはいえ海賊を守るような動作を取ってしまったことに激しい不快感を感じながら睨み返す。

あと数十センチも刀身が長ければ、袈裟懸けに切られていたことには気づかなかったのか、ゴトーは音をたてて転がった銃を見て問いかけた。

「役に立たなくなったゴミはちゃんと処分するべきだろう？」

「だとすれば、今のこれはゴミがゴミを減らそうとする自浄作用ですか？環境に優しいことですね。お礼に監獄生活をプレゼントしてあげましょう。」

軽口で返すと、ゴトーは舌打ちをして初めて私の方を向いた。

澀んだ目。殺意に歪んだ唇。一目で真つ当な類の人間ではないと判る凶相だ。

彼が何を考え、何がしくて自分の仲間を殺そうとしたかは、特に私が気にすることでもないし、興味も無い。

上役ですら消化試合にしかならなかったのだから、それよりも手応えは無さそうだな、と思いながらも刀もどきを構える。ゴトーの方もとりあえず当面の敵として私のことを認めたようだ。

だから、というわけではないだろうが、私は気付いていなかった。

「ぎゃは。」

ねっとりとこちらを品定めしているような、粘着質な視線に。

「ぎゃはは。」

声がしたことであろうそちらの方を見上げると、少し離れた木の枝に、誰かが乗っかっていた。

その口が開き、嬉しそうに、愉快そうに、弧を描く。

「見イ~~~~つけたアア。」

第十五話 狂宴の幕は上がり（後書き）

やっぱり最初の文の意味がよく判らない。

書いている人間がよく判らないってどうなんでしょうか。

知ったかぶりのアホの戯言くらいの扱いでお願いします！。

第十六話 狂戦士

『死こそが絶対の解放である』、とかいう妄言が載っていた宗教書を数ページ読んで焼いた私が言うことではないが。

死とはただの終わりだ。

それまで存在していた自己が完全に失われ、それを観測する自己も存在しない。

者が物になり、そしてそれ以外に変換される。

内側から見ても外側から見てもそれ以外の何物でもない。

大して価値のない、世界中で毎日起こっている自然現象。

大仰な雰囲気や妄想を剥ぎ取れば、それはただそれだけのことだ。

いずれ、私に訪れる死も。

[illegible]

死と破壊に侵食された島に、似合いの嘲笑い声が響く。

勿論、こんなシチュエーションもありえることは考えていた。だが、それにしたって私の理解の範疇を超えている。

私とゴトーの前、数十メートルにある木の枝の上で爆笑しているのは、所々破れているが、上品な青い色の着流しを身につけた青年だった。

いや、着流ししか身につけていない、と表現するべきか。

海賊の支配する島に居ながら武器は手にしておらず、また服の中に隠しているようにも見えない。靴すら履いていないのだから。

その代わり、とでも言うのだろうか。全身の筋肉は私から見てもほれぼれとするほど発達していた。

ゆったりとした服の上からでも判るほど四肢の筋肉は盛り上がり、しかし筋肉ダルマ、という言葉で揶揄されるような鈍重さは感じさ

一切の無駄が無くある種の造形美すら感じさせる、例えるなら一振りの刀のような”目的のある均整”とても表現すべき風格があつた。だが、顔つきは明らかにまともではない。

体つきが素晴らしいだけに、それが際立った異常としてその男を印象付けていた。

[illegible]

嗤うことをやめると、男は膝を縮め、次の瞬間跳び上がった。助走も無く数メートルほど跳ぶような動作だったが、男は一瞬の後、私の目の前に降り立つ。

明らかに海賊とは毛色が違うようだが、それが海賊たちのほうがまだマシだからなのかは判らない。

嬉しくないことに、それは直ぐに証明されることになった。

「なんだ、手前は？」

ビシッと、何故か海軍式の敬礼をしたその男、バイスは締まりの無い口を歪め、こちらを見ている。

117

てやがったか。」

「そう！Yes！That's right！つか。ははっ。」

ゴトーの言葉にバイスは我が意を得たりと言わんばかりに指を弾く。
「俺の記憶とは多少違うが……、豚が拷問したはずだがな。中々どうして丈夫みたいじゃねえか。それとも、そのウザッてえ笑い声はイカレた証拠か？」

「イカレた？ぎやはッ。イイね。最ッツツ高のほめ言葉だ！初対面でこんなに誉められたのって初めてだよ！」

鬱陶しげなゴトーに対し、バイスは満面の笑みを浮かべている。ただ、物理的な圧力すら加わりそんな殺気をばら撒きながら。

「ま、そりゃあどうでもいいか。問題は、手前がなんでこの海賊団を潰したかって話だ。」

ゴトーの雰囲気が一変するが、バイスはそれに気付いた様子も無く弄る^{なぐ}ように、にやにやと彼を見ている。

「なんで？なんで？なああんでえ？知らね。勝手にブン殴ってくんのがウザかったんじゃねえの？」

「……だったらもつと早くこうしてたはずだろうが。テキトウなことばかり言ってんじゃねえ。」

「ン〜？ンン〜？あ、そうだ！思い出した！おれと一緒に捕まっていた奴らが皆殺しにされたからだ！」

数秒間悩んだ後、なんでも無いことのようにそう口に出すバイス。あつさりと言った割りに、その内容は実に痛ましいものだ。視線を移すと、ゴトーも何故か顔を顰めていた。

「……復讐か？」

「ぎやはッ！馬ッ鹿みてえッ！ぎやははははッッッ！……嗤^{わら}える！」

言葉と共に瞬間的に増幅されるバイスの圧力。身長が倍にもなったかのような心理的圧迫に、ゴトーは後退しながらももう一丁の銃を取り出すが、しかしバイスの射程距離からは脱出できない。バイスの瞬発力は異常だ。

さつき全体が見渡せるほどの距離にいらながらも、近くまで接近するまで気付けなかった。

勿論、そんな相手には銃も間に合わない。

だから。

「^{ダイクスペース}黒い空間」！」

咄嗟に伸ばした手から靄が伸び、ゴトーの全身を覆った。

覆われたゴトー本人も予想外だったようで、抵抗しようとするが、周囲の空間と一緒に停止させるとすぐに大人しくなった。止まっているのだから当たり前だが。

とはいえ、唐突すぎたせいで設定なんてロクに出来なかった。守るような形になったのも罪を償わせる前に死なせるわけにはいけないと思ったからだが、このままだと数分もすれば停止が解けて足手まといが出てくることになる。

どうしたものか、と考えた直後、衝撃波を伴った拳戟がそれに加えられる！

話の途中だったにも関わらず、突然の凶行。

理屈も動機も無い力。正に暴力だ。

「面白れえええッ！ここまで壊れねえのは初めてだア！」

衝撃音が連続して起こり、徐々にその感覚が短くなっていく。既に聞いている分には繋がっているようにすら聞こえる。

『空間停止』だから盾ごと吹っ飛ばされる心配は無いがどれだけの威力と瞬発力のある拳をしているんだか。

「はしゃぎ過ぎですよ・・・。」

握った右手から上下に靄が伸び、刀もどきを形作る。

両手を残像すら作りながらラッシュを続けていたバイスに躍りかかった。

彼は危険だ。

見た目がどうか言葉遣いがどうか言う以前に、その在り方が。血に飢えた獣、という表現があるが、彼は血ではなく『破壊』に飢えているようにしか見えない。

特別モラルなんて言葉が好きなのではないが、これでは海賊と変わらない。

それに、彼のさっきの言葉からして、私も彼のターゲットなのだろう。話を通じればいいが、その前にいつ拳が飛んでくるか判らない状態は勘弁願いたい。

とりあえず、気絶してもらおう。そう思って刀を振りかぶる。瞬間、世界が闇に包まれた。

あれ？

気がついたとき、視界にあるのは青い空だった。

その縁取りをするように逆さまの木々が目の前を上から下に凄い速度で流れていく。

記憶がおかしい。

私は何故こんな場所にいるんだ？

いや、そもそもこれはどういう状況だ？

私はバイスに斬りかかったはずだが・・・。

阿呆のように空転する思考と、異常なことしか判らない状況。

断絶した記憶に疑問を覚え、思考がようやくかみ合うと、自分が凄まじい勢いで森の中を頭からカツ飛んでいることに気付いた。

慌てて自分の下の空間に足場を作ると、それを強く蹴り、慣性を操りながらどうにかうつ伏せに反対側を向く。それでも殺しきれなかった勢いは、無理やり”止めて”、ようやくその場に降り立った。

自分が吹っ飛ばされた方向を見ると、数百メートルは離れたことが判る。

視線の先にはこちらに手を振っているバイスがいた。

自分が殴った相手に嗤いながら手を触れる思考構造が理解出来ない。木に覆われた島にそれだけの直線になった道があるはずもなく、途

中であつた木は私に触れたものは軒並み折れていた。

身体に痛みは無い。

多分、殴るか蹴るかされた瞬間に能力でガードしたのだろう。自分のしたことなのに他人事のような表現なのは、単純にその記憶が無いからだ。

自分へのダメージこそ止めたが、相手の攻撃までは止め切れず、自然とその超スピードで吹っ飛ばされることでブラックアウトの症状が起こった、というところか。

簡単に自分に起きたことを分析すると、その結果が意味するものは実に受け止めがたい形になる。

現在割りと冷静さを保てているのも、驚きが一周して逆にパニックにならなかつただけだが……。

途中何本もぶつかった木がブレーキになっていなければ死んでいたかもしれない。

いや、それ以前に無意識に自分にかかる衝撃を止めていなければ赤い染みになっていただろう。

今も私がこうして生きているのは度重なる偶然の産物でしかないのだ。

私の進む道がどういうものであるか、理解をしていたはずなのに、それでも今、『死』を身近に感じている。

それは、いつか感じたものよりも実に生々しく、そして目前までせまっていた。

「スツゲ。あれで傷1つ無えつてすつげ！ぎやはは！遊んでくれよ！色男！」

またも一瞬で眼前まで迫るバイス。

ここまで原理が理解不能だと笑えてくる。

内心の動揺を押さえつけ、視線の先にいるバイスを睨みつける。

「いいでしょう。私は海賊ではありませんが

、少し、私の能力の実験台になつてもらふことにしましょう。

」

さて。

今の交戦とも言えない一合で1つ判明した事実がある。

反射神経、腕力、敏捷性、攻撃能力の全てにおいて私はバイスに劣っている。

このままでは、私は絶対に勝てない。

第十七話 狂気と影の舞踏

仮に。

仮に、結果的に救われることがあったとしても。

罪人とは、それを見て『自分も救われたい』などと思ってはならないのだ。

何故なら、彼等は罪を犯した瞬間に、そう思うだけの権利すら自ら失ったのだから。

誰かの幸福を奪っておいて、自分だけが救われたいなどと。

そんな、都合のいい奇蹟など存在しない。

罪は消えない。

どれだけの罰を受けたとしても。

償ったと勘違いできるのは、元より犯した罪業に頓着しない、人になしただけだ。

私の罪も消えず、私という個人が存在する限り、いつまでも付きまとう。

どれだけ嘆いても、過去には戻れないのだから。

side カミラ

何かの音が聞こえたような気がして、あたしは顔を上げた。

周囲を見回すけど、誰もいない。

気のせいかな。

今は厨房にいるから甲板に誰かいても判らないけど、その可能性は低いと思う。

なにせ、今彼らは襲撃を受けているんだから。

ギアが襲撃をかけている海賊は、規模と比較して、不自然なくらいに懸賞金額が低い。珍しい女海賊だということもあるかもしれないけど、実際は大した悪事を行っていない、という部分が大きいらし

い。

といつても、それは公式に確定しているものに限った情報だから、裏付けの出来ていない罪状はかなりあるんだろうけど。

言ってしまうえば、ヴェロロニア海賊団は、自分たちの悪事を隠蔽するのがかなり上手なようなのだ。

基本的に自分たちのしたことを吹聴するのが好きな海賊という種類の人間からすると、それは実に不自然だ。

人里から離れた島に拠点を構えているとはいえ秘密というのはどんなに隠してもどこかから漏れるものなのに。

それに、『爪牙のヴェロロニア』の主な罪状は略奪と誘拐。

物が人を盗むことだけで、殺人はほとんど無いらしい。

それが単に殺していないだけなのか、それとも知られないようにやっているのかは判らないけど、まあどうでもいいか。

殺された人のために悼むという行為は実際は自分の心を慰める代償行為でしかない。

見ず知らずの人をダシにするのもどうかと思うし。

報復をしたところで失われたものが戻るわけでもない。

能力も義理も無い。

そんな理屈も他人事だから考え付くことができるのだろうけど。ともかく。

ギアが相手にする以上は彼らの自由もあと僅かだろう。

何か、予想外の事態でも起こらない限り、彼の能力は非常に便利だし、防御力は悪魔の実の能力でも、自然系を除けばかなり高い部類に入るだろうから。

さて、そろそろ煮物が出来る頃だ。

帰ってきたら舌をうならせる料理を振る舞ってあげなくちゃ。

sideギア

意味があるのかは判らないが、防御の体制を整えると、私は口を開

いた。

「^{バートタイム}時間拘束」。」

言葉と同時に生み出されたのは、手裏剣だ。両手の指の間に四枚ずつ。

それぞれの指に挟まれたそれは、極端に薄く、はつきりと言えば紙よりも厚みが無い。

物に何かを刺したり、何かで斬ったりする場合、それが接触する面積が少ないほど容易であることは言うまでもない。

つまりこれは、普通のものよりも威力を高めているわけだ。

そこまで考えると、上下からスナップを利かせて計8枚の手裏剣を投げつける。

無人島にいたころ、食物連鎖のトップに立ったせいで獲物が獲れなくなったとき、必死に訓練したのだ。

その頃はまだ、自分の足で動物に追いつくことはできなかったから腕前はそれなりにある。

しかもこの刃は、肉や毛皮なんかを簡単に切り落とすほどに鋭い。

「シッ！シシッッ！！」

勿論、当たらなければ何の意味も無いわけだが。

バイスが気合と共に拳を振るう。

距離があるため、私には当たらないが、彼の眼前まで迫った8枚の凶器をことごとく叩き落した。

・・・薄さのせいでこんな薄暗い場所ではほとんど見えないし空気抵抗は皆無、かすっただけでも簡単に傷つけることができるはずなんだが。

そもそも身体には当たっていないはずなのに叩き落すとはどういう手品だ？

そこまで考え、自分がこれまでに見たことのある事象を思い出して比較してみると、それは案外に最近あったことだった。

「剣圧・・・、いや、この場合は拳圧と表現するべきですかね。」

ロロノアと試合ったときに彼が使っていた剣技。それに付随していたモノに、近い印象がある。

もつとも、ロロノアのそれよりはまとまりが無いイメージだが。

「Hey! 面白くねえぞ! もつとテンション上げるよオオ〜! ぎやはは!」

面白くないと言いながらも、嗤うのは何故なのだろうか。

内心で嘆息しつつ、刀もどきを作り、斬りかかる。

ともかく、今は彼を無力化する必要がある。

「ぎゃは!」

一度目は見ることの出来なかった拳は、来ることを予想していれば、そう怖いものではない。たとえそれが、下げていた腕を持ち上げてパンチを繰り出すという動作を、1/100秒以下の超高速で行っているとしても。

そしてそれが避ける余地が無く完全にヒットしたとしても。

それが方向性と質量を持った攻撃である以上

私には、効かないのだから。

放たれた拳は私の頬に突き刺さっているかに見えるが、実際は表面で止まっている。

まずは攻撃に対する停止。

問答無用でその勢いを停止させ、私に対する物理的な干渉を断絶する。

あれだけ勢いが急に殺されたのだ。それに対する腕の負荷はそれなりのものだと思うのだが、そう上手くはいかないか。

見える限りで腕には何の変化も見えない。

だが、攻撃は確実に防いだ。

さらに。

その手の皮膚は肌色から黒に変わりつつあった。

私の能力である『触れたモノを停止させる』こと。

それは勿論、こうして能力で停止させている相手の体にも当てはまるのだ。

音をたてながら慌てて引き戻される手に置き土産をしてからバイスを見ると、意外にも彼は変わらず愉快そうな顔をしていた。

「すげえ！ぎゃは！そう、それだよ！そうこなくっちゃ！！」

そう言いながら、バイスは手を見ている。血のしたたり落ちる、自分の手を。

私の能力はその場に固定するのか、場所を移動出来るように停止させるのかを選択出来る。

時間停止は私の体に触れていなければ、能力を受けることも無いが、空間固定は文字通りその場から動くことが出来ない。

それに逆らおうとするなら、私自身も正体が判っていない靄を壊すか、彼のように固定された部分を諦めるしかない。

骨が見えるほどに皮膚と肉が千切られた右手は、多少はダメージになっっているかもしれないが、あくまで受身な行為によるものだ。

すぐにそれも看破されるだろう。少しでも時間を稼がなくては。

「何故私を襲っているのか、とか。聞いたら答えてくれますか？」
海賊を襲ったことについては愚問だろう。それが賞金稼ぎの仕事なのだから。

意味は無いと思いながらも油断無く刀もどきを構える。

バイスは白けたように私を見ていた。

「理由？原因？ぎゃはッ！そんなモン何の意味があんだよ？下らねえ！下らねえ！殺したいときに殺して壊したいときに壊せなきゃ、何のための人生か判らねえ！」

大口を開けて理解も共感も出来ないことを言う彼を見て、自分の思考回路との違いを痛感する。

度を越した刹那主義・・・いや、破滅主義だ。

よくそんな考えでこれまで賞金稼ぎなどやってこれたものだ。

自分が賞金をかけられてもおかしくないだろうに。

嘆息しながらも、多少は諦めがついた。

彼とは刃を交わらせなければ、話することすら出来ないというところが。

「面白えから壊す！気に入らねえから殺す！嬉しいから砕く！悲しいから引き裂く！ぎゃは！楽しく逝いこうぜ、兄弟！」

そう言うと、バイスは拳を振りかぶった。

動作自体は全く洗練されていない、街の喧嘩師のそれと大差ない動き。

だが、それも通常の数倍以上のスピードであれば、れっきとした必殺の技になる。

自分に再び向かってくる血まみれの拳を見ながら、回避行動をとると、不意に疑問が頭をもたげた。

何かがおかしい。

間に合わない回避。

傷ついた方の手をあえて使用するバイス。

それは大した問題ではない。ある程度は予想できていたものだ。

だとすれば、何がおかしい？

何が不自然なんだ？

そう考えていると、拳がどんどんと視界を埋め尽くすように近づいてくる。

だが、それでも疑問はなくなるらない。

何だ？

ぬるりとした感触と共に、バイスの拳が振りぬかれた瞬間、私は違和感の正体によく気がついた。

衝撃は無いが、表面が血にまみれていたせいか、停止が間に合わない。着いていた血だけが私の頬の前の空間に固定されている。

振りぬかれた拳は、綺麗な、傷ひとつ無い状態だ。

「・・・なるほど。普通の人間ではないとは思っていましたが、その回復力・・・、悪魔の実の能力者でしたか。多少、納得しました。」

私の言葉に、自分の拳を不思議そうに眺めていたバイスが笑みを浮かべる。

拙い。

あの様子では私の能力の特性がバレ始めたか。

これは、急がないと本当にマズいかもしれない。

「そ〜おだよお〜。動物系^{ソオン}ヒトヒトの実モ^{バーサーカー}デル狂戦士。よろし

くしてくれや!ぎやは!」

第十八話 閉幕は喜悲劇と共に（前書き）

なんだか若干長くなりました。

第十八話 閉幕は喜悲劇と共に

何故？と理由を考えても意味は無い。

どうして？と答えを希求しても、既に起こった過去は変わらない。

因果は廻り、事象は帰結される。

何事も起こるべくして起こるのだから。

自分の人生という時間だけしか観客席にすることが出来ない私たちには、それがとても奇妙で脈絡の無い喜劇のように映るだけ。

ソオン
動物系。

悪魔の実の中でも特に動物や獣人に変身する能力を有す系統で、単純に格闘能力や迫撃力を高めたいなら一番手っ取り早い。

なにせ、変身すれば元々本人が持っていた身体能力＋実の能力で得た力となるわけだから、相性によつては無敵ながら単純に戦闘に向いているとは言いがたい自然系や能力や強さがピンキリの超人系と比較すると、個体差はあれどコンスタントに欲しい能力が手に入るわけだから、その点で言えば優秀だろう。

それが、私がああ図鑑を読んで得た感想だ。

だが・・・。

「ヒトヒトの実モデル狂戦士・・・ですか？悪いですが聞いたことがありませんね。」

『悪魔の実図鑑』に悪魔の実の全てが発見されているわけでもなければ、その実態が解明されているわけでもないのだから、これは当たり前ではあるが。

「普通ウウーの動物系と同じさア。ま、能力を使えば冴えないボクちゃんもあつと言う間に！殺したり壊したりがDie好きな素敵なオレに大変身ってわけさア。」

そう言つて笑うバイスは、空を見ながら両手を広げ、その場でくる

くると回っている。

まるで舞台の上でスポットライトを浴びている俳優のような動作だが、あいにくとこの場に拍手を送る観客はいない。

相変わらず隙だらけだが、どの瞬間に攻撃が来るのか読めない以上、開き直るしかない。

仮にどのタイミングで来るのか判っても直前から攻撃を避けるのは至難の業なのだから。

完全に予想外の攻撃を仕掛けられない限り、倒すどころか、傷つけることも難しいだろう。

出来もしない可能性を探るよりは、現状を打破するために考えるべきだ。

さっきから言っている情報を纏めると、今のバイスの異常な言動や能力は、悪魔の実の能力だということになる。

そんな例を知らないし、確証も無いので何とも言えないが、もし本当だとしたら多少は頷ける部分もなくも無い。

さっきのゴトーの言葉が正確なら、彼は同じ船に乗っていた人々と一緒に海賊たちに拉致されてこの島に来たはずだ。その場合、捕まった時点で今の頭のおかしい状態だと、齟齬が出てくる。彼の實力なら、同行者の被害を考えなければ、少なくとも海賊達を全滅させるのは容易いだろうから。

その点、悪魔の実によってそうなっているのなら、なんらかの理由（生命の危機というのが一番納得のし易いものであるが。）で能力を使用した、と考えられるだろう。

「ぎやはは！そんなに見つめねえでくれよ！照れちまう！」

「……」 キーファウト 禁止領域”。」

言いながら手で目の周りを押さえ、空を仰いだ瞬間、能力を発動する。ここまで隙だらけならあるいは、と思ったが、しかし地を這う靄もやが足元に到着する頃には、バイスははるか後方に立っていた。

恐らく、孤を描かず、持ち前の筋力を使って低い軌道で一直線に跳とんでいるのだろうが、始点と終点以外はほとんど見えないのがその

異常さを物語っている。

まだ能力は解除せず、バイスのところまで届くように発動を継続する。今の私なら、この島程度の面積全体を覆うのはそう難しいことではない。

私が胸算用をしている一方、バイスは何をするのかと思っていると、地面から何かを拾い上げる動作をした。

なにかが落ちていたのだろうか？という平和な思考はさすがに出来ない。

なにかするつもりか、と警戒した瞬間、私の目の前に石と呼ぶには少々大きな岩石が停止していた。

岩石は連続で投擲され、次々と私の体の表面で停止する。

そして、その後、自分の重量を思い出したかのように下に向かって落ち、真つ黒な地面と接触して乾いた音を立てて転がった。

「！」

それを見た瞬間、相手の意図に気付き本能的な感覚だけで跳び上がる。

能力で作った足場に乗り、さらに跳躍して高い場所へ。繰り返して上空まで。

バイスは今の石で私の能力の性質を確かめていたのだろう。

私の能力は発動してしまうと、完成する前に解除してしまわない限り、設定した時間がくるまではそれを停止させ続ける。

そしてそれは、最初から停止させる部分を設定しておかなくてはならない、という欠点があるのだ。

さっき私は、島の地面全体を覆うように能力を使用した。つまりそれは、一旦停止させた部分の地面の上に足を置いても何の問題もない、ということでもある。

バイスは石の投擲でそれをあっさりと看破してしまっていた。

無論、それだけで破られるほど私の能力は簡単なものではないが、この分だと防御していても遠からず他の弱点を突かれるだけだ。

島の上空百メートルあたりまで来ると、緊張で早鐘を打つ心臓を押

さえ、下を覗き込む。

予想通り、眼下には、さっきまで私がいた場所からバイスがこちらを見上げていた。

その表情がにやりと笑ったのが見えた瞬間。

それが爆発的にこちらに向かつてくる！

「ぎやはッ！追オッ！いつウいたアッ」

百メートル以上を丁度私の眼前まで跳躍する、という二重の意味での神業を見せたバイスは、そう言った。

次の瞬間、光のように私に向かって放たれる拳と脚のラッシュ。驚くことにバイスは私の能力に拘束されない速度で連続攻撃を繰り返しながらも、その反動で足場の無い空中で自分の身体を浮かせている。拳と脚には拘束されないための対策なのか、土が塗られていたが、そんなことで私の能力をどうこう出来るのは彼くらいだと思いたい。

というか、本当に人間なんだろうか。

人間っぽい他の何かだと言われたら信じてしまいそうだ。

そんなことを考えながら、防御しつつ露^{もや}で作ったナイフで攻撃するが、相変わらず当たらない。多分、当たりさえすれば傷つけることもできるんだろうが、動きが速すぎてどれだけ振っても当たらない。判ってはいたが、どれだけ人間離れた反射神経と攻撃速度なんだ。舌打ちしたいのを堪え、一気に数メートル後方に下がると、バイスは一瞬私の方に手を出すか迷った後、大人しくそのまま墜ちていった。

徐々に小さくなっていきながらも顔は笑っているから、恐らく墜落によるダメージは皆無か、あってもすぐに回復できる程度だろう。落下するまでに4〜5秒。それから体勢を立て直し準備して再び跳び上がるまでに多分3秒前後。7秒以内に打開策を見つけないければならない。

いつまでも攻撃が効かないことに気付けば、飽きてくるかもしれない。

他の獲物を求めて島の周囲まで目を向ければ、もしかしたら船を発見されるかもしれない。

そうなったらカミラが危険だ。

考える、考える。

攻撃の癖は？

私の何処を狙ってきた？

再生速度が異常に高いが、あれも能力なのか？

しかし、動物系にそんな力があるのか？

いや、思索は脇に置き。

まずは即戦力になる情報が必要だ。

そもそもヤツの弱点は何だ？

そこまで考え、はたと思い出す。

ああ、私は何故こんなことで悩んでいたんだろう？

答えは本当に簡単なことなのに。

自分の考えに内心失笑しながら、空中に足場を作って走る。地上にいるバイスは私が走り始めたことで、反動を得て浮くことができないので、地上からそれを追う。
追ってくるという。

既に、狩る者と狩られる者は逆転しているのだから。

side???

気がつくと、全てが終わっていやがった。

いや、そう表現したくなるような有様になってただけか。

あの瞬間、俺は死を覚悟した。元より自分のしたかったことはほとんど何処の誰とも知らねえ賞金稼ぎ共に獲られちゃった。

もうしたいことも、目的も無え、自分から見ても大して価値の無い命だ。

今更誰かにくれてやることに抵抗があるはずも無い。

だけど、あの瞬間、目の前に迫る拳を見て思っちゃった。

こんなモンか？

こんなモンが、俺が泥を自分から被ってまでしたかったことの末路なのか？

そう短い思考が俺の頭を満たすと、間に合わないことは判ってても自然と腰の銃を向けようとした。

そして何か、よく判らないモノに捕まり気がつけば俺を殺そうとした化物も、賞金稼ぎもいなくなってやる。

少し離れた場所からでかい音が聞こえるから、まだ闘^やってやるんだろう。どいつもこいつも死んじまえてんだ。

銃はまだあるが、音がすればあの化物が寄ってくるだろう。それに、賞金稼ぎも。

腹が立つが俺の銃の腕前だけじゃ、あいつらには逆立ちしたって勝てやしねえ。

だが、丁度いいことにここにはあのスリした賞金稼ぎが捨てていった刀がある。

見た目に比べ、異常に軽いそれに眉をひそめながら持ち上げる。

ひゅん、と振っただけで軌道上にあった細い木の枝が切り落とされた。

全く抵抗が無い。

素人が使ってるのにここまで斬れるとは、凄え業物だ。

さぞかし斬れ味はいいことだろう。

肉なんか簡単に斬れるに違いない。

我知らず、口元が歪み、くくく、と笑い声が漏れる。

ああ、まだあった。

まだ俺がしたいことがあったよ。

散々回り道をしてたけど、結局これがしたかったんだよ。

そう笑顔で振り向くと、そこには記憶通り豚がいた。

まだ気絶してやる。

ああ、そうだ。

そうなんだよ。

なるべく永く、なるべく深く、なるべく大きな後悔をさせてやりてえと思つてたんだよ。

そう考えて、一步を踏み出す。

「百中のゴトー」。ヴェロロニア海賊団所属、副団長。懸賞金額900万ベリ。主な罪状は略奪と誘拐、殺人。なお、同海賊団が行つたと確定している殺人のほとんどに直接、あるいは間接的に関与したことが確認されている……。」

背後から聞こえた声に、俺は刀を捨てると、腰から抜いた銃を向ける。

そこには一人、男がぽつんと立っていた。

木の枝が陰になって思つたよりも近くにいるのに顔はよく見えない。見えないが、上下共にかつちりとした白の制服を着ているから海軍の下っ端だということがすぐに判る。

「戦闘方法は主に裏方。異名通り百発百中の銃の腕前を持つが船長であるヴェロロニアが前方から仕掛けた相手に、後ろから狙い打つ卑怯この上無い戦法を好んで使う。ま、さっきは簡単に破られたようだが。」

「何だ、手前は？何で海軍の軍人がこんなところに一人でいやがる？」

「……だが、興味深い事実もある。ゴトーが入団する前のヴェロロニア海賊団は東海でも下の下。海賊を名乗っていても賞金をかけられるほどの力も無かつたということだ。」

男は俺の科白を無視して喋り続ける。

俺の、罪の歴史を。

「さらに興味深いことに、ゴトーが入団するのと前後して団員の減少に伴い、ヴェロロニア海賊団は組織の拡張を始めている……部下の進言なんかもあつたようだが、そう都合良く団員が減るもんかねえ？」

「……。」

「まあいい。何処かの誰かが頭の弱い船長を唆したんだろう。丁度、

古株の団員がいなくなったから、もつと上を目指そうとか海賊連中が好きな夢物語を言いながら。・・・そうして海賊団が肥大するに従い、組織を纏める手腕を発揮。幹部に取り立てられた。だがかなり無茶なことまでやったみたいだな。浚^{さら}ってきた奴に知り合いを殺させて無理やり海賊に仕立てるなんて、正気ならやらんと思うがね。定期的に見せしめ^{みせしめ}をして恐怖で辛^{から}うじて海賊団の体裁^{ていさい}だけは整えていたようだが。」

ああ、なんだコイツ。

なんでそこまで知ってやがる？

誰も知らないはずなのに。逃げようとしたやつは例外なく墓の下に入ってもらったはずなんだがな。

「とはいえ東海でも有数の組織力を手に入れた後もヴェロロニア海賊団はたかが1200万ベリーの賞金首に留まり続けた。あのドン・クリークに次ぐ規模でありながら、他の海賊達よりも明らかに低い額から、賞金稼ぎからもリスクだけが大きいと思われて敬遠される。しかし潜在的に危険であったとしても、罪状が大したことがない以上は賞金額を上げる理由も無い。・・・何故かな？」

始めて男が問いかけの言葉に、答える気になった。ここまで俺のことを知っている以上、隠しても意味は無えんだろ。

「・・・元々何も持っていない奴に、喪失感とか苦痛を味合わせるには、どうすればいいと思う？」

「何？」

「命でも、身体でもいい。何も持っていないところから更に奪うか？・・・」 答えはNOだ。多少は苦しむかもしれないが、それは実にちつばけなモンで、あまりにも意味が無い。」

「・・・興味深い話だ。それで？」

「なら、与えてやりやあい。分不相応な地位を、中身の伴わない力を。一度味わっちまえば、その感覚が忘れられなくなる。今度はそれを失いたくないと考えるようになる。・・・笑えるぜ。元は小さな村を襲^襲つくらいしか能が無い海賊だったくせによ。」

「成程。成程。実に面白い話だ。それが、君の理由か。」
既にまともな軍人だとは思っちゃいねえが、しかし目的が皆目判らねえ。

もう少しで捕まえられるだけの相手に、何をするつもりだ？

そう考える俺を知ってか知らずか男はおざなりな拍手をすると、しかし、と口を開く。

「それでは、君がアレの目の前で幕引きをするはずだった海賊団は横から潰され、後は賞金稼ぎたちが戻ってくるまでに唯一残った奪えるものを奪うだけだが・・・。」

「それがどうしたよ？刃物は素人だが、情報を引き出す必要のない拷問をするのは、それなりに玄人なつもりだぜ？」

「だが、楽しい時間は出来るだけ長く、深く、大きく感じるべきだとは思わないかね？」

全くもってその通りだと思うが、意味を理解できない。

「何が言いたい？」

「端的に言えば、その腕前を買いたい。”百中”の力を檻の中やこんな場所で腐らせるのも惜しいと思うのでね。」

「こんな場末の海賊にそんなスカウトをするなんて、よっぽど人材不足らしいな。それで？俺の見返りは？」

「『快適で安全な邪魔者のいない防音設備の行き届いた部屋』と『理解あるすぐに死なないように医師によるバックアップおよび後始末』なん

かでどうだい？ああ、オプションで『各種の楽しい拷問具オモチャ』も用意するが？勿論、首輪は付けさせてもらうがね。」

男はおどけたような口調で無感動に言った。

こいつが何者かはまだ判らないが、こんな条件を出せてここまで喋った以上、断れば確実に殺されるんだろう。元からここで死ぬつもりだったが、その前に果たすべき事を邪魔されるわけにはいかねえ。「大盤振る舞いだな。ついでに俺の賞金首の取り下げも加えてくれるなら、即決だ。」

「OK。契約成立だ。それではようこそ、歴史の裏側へ。」

そう言っであっさりと差し出された手を、俺は無言で握り返した。

sideギア

1キロ程は走っただろうか？

湾状になった島の港の上まで来ると、地上を見下ろし、ベストな位置まで来たことを確信して足を止める。

眼下には青い色が広がり、景色は素晴らしい。湾内にあるためか、波もほとんど無い。

こんな時でなければお酒なんか呑みつつ風景を楽しむのだが、そうもいかない。

既に私の目の前に迫っている気配がそうはさせてくれないだろう。問題はここまで見え見えの罠にバイスが乗ってくるかどうかだったが・・・無事クリア出来たようだ。

真下が海でも、私を足場にすれば島の上まで戻ることが出来ると思っ
ているに違いない。

バイスが目の前に現れるのと同時に猛烈な勢いと共に突き出される拳をどうにかかわし、前に出る。

これまで防戦一方だった私が攻勢に出ると思っていなかったのだろう。虚をつかれた顔で、それでも拳を当ててくるが、精々が10発中2〜3くらいしか当たらない。

その一発一発が必殺の技だが、残念なことに私にはあまり意味が無い。

彼は、私を追い立てようとして、選択を決定的に誤ったのだ。

考えながら、彼の懐に入ると、背中まで手を回し、能力を発動する。バイスの食べた悪魔の実は動物系。

そして動物系はその身体能力こそが特筆すべき部分なのだ。

実際、バイスの身体能力は異常だ。私が捉えきれないほどのスピードと瞬発力。殴ったものを数百メートル以上ふっ飛ばすパンチ力と、それに近いか、より高い威力をほこるキック力。垂直高跳び百メー

トル以上。挟れた肉と皮膚が数秒程度で元通りになる回復力。まさに怪物とでも呼ぶべき力だ。だが。

足場の無い空の上では、私を殴った反動が無ければ浮いていることは出来ないし、その反動を得ている私自身が地面に落下し始めれば、後は言わずもがなだ。

「ぎやはっ！熱烈な歓迎だが、そっちのケは無いんでな！愛とか恋とか寒気をする語らいは他の誰かとやってくれや！」

「男相手なんて、こっちこそ御免です。そういえば、私の能力を紹介していなかったと思ひましてね。」

「は、そりゃゴターネーにどうも！」

「超人系ピタピタの実の停止人間。それが、私です。能力は『自分が触れている物や近くにある物を止める』こと。」

墜ちていく。

墜ちていく。

私とバイスは密着した格好のまま、水面に一直線に向かって落ちていく。

流石に私の意図に気付いたのか、バイスが腕を外そうとするが、無駄だ。

そうされないために能力を使用しているのだから。

そして、彼が無駄な努力をしている内に、上側をとる。

「海だぞ！判つてんのか！？手前も死ぬぞ？」

初めて見るバイスの慌てた顔に苦笑する。さすがにおかしくなっている、悪魔の実の能力者の弱点は覚えていたか。

こちらを見上げる顔を見ながら、私は種明かしのために口を開いた。「『止めること』と言いましたが。それは、勿論最も近い位置にある私自身も含まれるんですよ。」

水面に叩きつけられる寸前、私はそう言ったが、彼に聴こえたかどうか。

知りもしらないが、能力で全身を時間停止させ、同時に水面の数セ

ンチ上で空間固定したことで腕に捕まえた相手と停止して感覚の無い腕だけを海の中に漬ける格好になった私には、あまり関係の無いことだ。

とりあえず、3分ほど固定を設定したので、気がつく頃にはバイスは気絶しているだろう。

悪魔の実の能力者共通の弱点。
海に散々浸かったお陰で。

第十八話 閉幕は喜悲劇と共に（後書き）

なんだかなー。

もう少し戦闘の締め方をちゃんとしたかったんですが、これがいっぱいいっぱいでした。

第十九話 閑話

過去は美しい。

各々の脳裏や記録としてしか存在できないために、本来のそれとはかけ離れた装飾ができるからだ。

そう酷いものでもない限りいくらでも現実から乖離した、良きものへと変貌させられる。

どうしてそうなるのか、たとえば、極端な話、そんな風に思い出される過去が、多くの場合逃避として存在するからだ。

誰だって辛い場所から逃げようとして、より酷い地獄には迷いこみたくは無い。

だが、大抵逃げるものには安楽な場所など無い。

だから、捻じ曲げ、粉々にして、自己満足させる餌として都合の良い妄想を造り上げる。

ただ、今を安楽に過ごすために。

だが、一度壊れてしまった過去は、二度と戻らない。

それは、既に過ぎ去ったものとしてしか、存在出来ないのだから。

「YES！ナイスバスト！」

「うわぁ、変態さんだー。（失笑）」

殺し合いがどうにか決着し、諸々の用事を済ませて船に戻ってきて早々だが。

カミラのこちらを見る目が痛いです。

こちらを見る視線だけでなんでこんなの拾って来たの？と詰問されている気分になってきた。

顔は無表情のままなのだが、多少の付き合いがあるためか私には、あの船出の日に見た顔に似ているように見える。なんと言うか、凄みがあるとても表現したくなるような。

原因は主に私の横でカミラの身体の一部を凝視している男にあるだろう。所々ほつれてはいるが、上質な蒼い着流しは、ゆったりとしていながら、その下にある筋肉を主張し、その上には端正な顔が続く。

尤も、今はだらしなく口と目を開けていたが。

少しは遠慮というものを意識できないのだろうか、この男は。

それに言っているのは私じゃないのに、何故責めるような視線に晒されているんだろうか。

「本当に判んないのー？」

思っていることが表情にでていたようだ。私は無言で首を振った。

・・・いや、判っているんだけど、そう考えたくなっただけです。

肘で突いた後、視線で挨拶するように促すと、彼は小さく頷いた後、口を開く。

「大きいですね！お胸バスト様のサイズはいくつですか！？」

声が聞こえた後、私は反射的に彼の後頭部を殴った。

それは全く正しい行動だったので、私に躊躇は無い。

実際、彼は結構拙ますそうな音を発てて甲板上に倒れるが、すぐにバネ仕掛けの玩具のように立ち上がった。虚ろな表情で「99・・・いや、100はあると見た・・・。」とか言っているので一瞬手遅れになったかと思っただ、行動は相変わらずだ。

「バイス、貴方がどんな筆舌にしがたい趣味嗜好を持っていたても他人に迷惑をかけない限り特別何かを言うつもりはありませんが、初対面の相手には自己紹介くらいしてください。」

「OK！相棒！俺ツチはバイス！ケチな賞金稼ぎさ！知り合って早々相棒には迷惑をかけちゃったから、これからこの船と一緒に旅をして借りを返すって寸法さ！！」

「・・・バイス、いきなりキャラをつくらないで下さい。暑苦しい上にウザいですから。」

「相棒のツツコミと視線が痛えよ！」

狂化していた時とは別種の鬱陶しさに私が氷点下の視線を向けると、
バイスは大げさによるめいた。

それを見たカミラは最初の気の毒な人を見る目から虫を見るような
目つきになっている。

自業自得とはいえ、とりあえず、この船におけるヒエラルキーは決
定してしまったようだ。

「申し訳ありませんが気分が悪いのなら、次の街で捨てますから、
それまでは勘弁してやってもらえないでしょうか？このテンション
がウザいなら、海水をかければ多少は大人しくなりますし、いつそ
捨てるまで『停止』させてもかまいませんよ。」

「・・・相棒、なんかキツいね・・・？」

「半時間前まで殺し合いをしていた相手に好感を持つのは中々難し
いことだとは思いませんか？」

「・・・ごもつともで。」

言った後で不用意な発言だったか、と思ったが、案の定、カミラは
私の言ったことに反応した。

「殺し合い？どういうこと？」

「ああ、それはですね・・・。」

カミラの質問に苦笑で返すと、私はため息まじりに説明を始めたの
だった。

「・・・じゃあ、そちらさんが正気に戻った後、海賊を回収してき
たの？」

事の顛末を話すと、カミラはすぐに疑問を口にした。

因みにバイスを見る目は生ゴミを見るようなそれにランクアップし
ている。

どういう意味でかはあまり気にしたくない。

やっぱりバイスの扱いは悪いが、既に本人も悟りをひらいたような
顔になっているから問題ないだろう。

「ええ。ですが、頭目のヴェロロニアと、副官のゴトーは行方不明のままです。」

「え？でも、今の話じゃ副官さんにはギアの能力を使ってたんでしょ？」

「咄嗟のことでしたから・・・おそらく、私が彼とやりやっている間に制限時間がきて逃げ出したと思うのですが・・・。」

「が？」

「姿が、何処にも見当たらなかったんだよ。」

「バイスが私の言葉を継ぎ、説明を始める。」

「俺の嗅覚で調べてみたが・・・、連中は他の誰かと一緒に脱出したようだった。少なくとも、海岸線までゴトーとヴェロロニア、それと、もう一人の体臭が残されていたからな。」

意外と真面目な顔と声色でバイスが説明するが、視線はやはりカミラの胸元に釘付けされている。

この一貫した行動は趣味なのだろうか、それともキャラ作りか？どちらにしても失礼極まりないが。

「もしかして、隠れてた海賊と一緒に脱出したとか？」

「そう思っ^て上空から確認してみましたが・・・海はおるか、近くの島にも姿はありませんでした。勿論、船も。まるで、そこから姿が消えてしまったみたい。」

「ミステリーだねー。別に茶化すわけじゃないけどさ。・・・あれ？ってことは今回は只働^タきってこと？」

「まあ、そうなりますかねえ。」

実際は全くの只、というわけではないのだろう。やはり頭目と副官に逃げられた以上、賞金額は支払われないだろうし、仮に停止してある海賊たちの分をもらえたとしても、雀の涙程度になるだろう。むしろ引き取ってもらうのに治療費を請求されるかもしれないから、下手すればマイナス働き、というところか。

とはいえ、放置すればほぼ確実に手遅れになって死ぬので、捨てていくわけにもいかないのが悩ましいところだが。

そして、その元凶は全く話を聞いていなかったか、聞いていて無視しているのか、満面の笑みを浮かべ、口を開く。

「ところでカミラちゃんはKISSから始まつたりするミステリーって信じる方？」

「言ってる意味が判らないし判りたくないけど、バイスさんが寒い人だつてことは理解できたよー。」

「あれ？なんだか俺に優しくない空気？もしかして始まるのは恋のhistoryの方が良かった？」

「今の発言に対して優しい反応を返せるのは老人介護の専門家くらいですよ。」

「酷えよ、相棒！？」

そう反応するバイスの言葉に、カミラは引つ掛かるものがあつたのか、私の問いを投げた。

「つていうかさー、さつきからスルーしてたんだけど、何で相棒なのさ？」

「さあ？本人が勝手に言い出したので、私にはさっぱりです。」

「聞かないギアもたいがいだと思うけどね・・・。」

「ここだけの話、彼は重篤な痴呆症を患っている可能性がありますので、あまり刺激しないほうが宜しいかと思ひまして。」

「嘘だと言つてよ！バーニイ！？」

「・・・誰ですか？それ。」

当然、私の名前ではない。私の方を見て言つてはいるが。

「さー？なんとなく思いついたので言つてみました！」

「・・・という風に、彼は脳を通さずに言葉を喋っているの
で、論理的な会話は不可能だと判断した次第です。」

「まー、それは聞いてれば凄く理解できるけど・・・。」

「子供の頃近所のオバチャンに『しっかり者』だと呼ばれた俺を、まさかそう呼ぶ者が現れるとは・・・、貴様、出来るなッ！」

「完全に社交辞令を本気にしてますね。頭が可哀想なことです。」
私の冷淡な言葉に、バイスは三角座りをすると、甲板上に指先で『

の』の字を書き始める。

小声で「大きいことは素晴らしいことなんだ・・・、男は皆、潜在的にマザコンなんだよ・・・。」などと言っているので大したダメージは受けていないようだ。

大人しくなったのは良いのだが、これ見よがしに私たちに見えるところで言うのはかまうてほしいからだろうか？

私もカミラも相手にする気は全く無いので生憎だが。

「まあ、その、犬猫みたいに拾うのもどうかとは思いますが、あの島には個人で使えるような船ありませんでしたし、何より抑える人間がいらないとなにをするか判りませんからね。」

能力を使用する度にあそこまでの破壊を撒き散らしては、早晩賞金首の仲間入りをさせられるだろうし。

会って一日も経たないとはいえ知り合いがそうなるのは辛い。今は冗談を言い合える関係だから、余計に。

そんな私の思考は、誰に投げかけることも無く、頭の片隅に消えていった。

第十九話 閑話（後書き）

滑ってたら見なかったことにしてやって下さい。
ギャグって下手なシリアスより難しいですね！。

第二十話 向かうべき場所へ

絶望しても意味は無い。

失望しても変化は無い。

希望を持っても誰も気付かない。

私達が望みを持つという危うさと、その結末に起こるべき現実に。

望みを持つからこそ衝突が生まれる。

望みを持つからこそすれ違いが生まれる。

望みを持つからこそ痛みが生まれる。

だが、誰もそんなことには気づかない。

素晴らしいものを見ている時に、それを構成する醜悪さや困難に目を向けられる者など居ないのだから。

side バイス

フン FUN - HA。

フン FUN I HA。

フン FUN - HA。

・・・・・・！

自然と荒くなっていた鼻息に気付くと、俺は慌てて右手で鼻を隠した。

興奮のあまり、余計なことをしてしまった。今は、今だけは誰にも見つかるわけには行かないのに。

恐る恐る前と後ろに目を凝らした後、真上も警戒するが、幸い人影は無い。

セエ〜フ。

ため息をつき額に浮かんだ汗を拭いながら、先を見る。

光を放つ目的地まではまだ、半分も進んでいない。

だが、ゴールまではそう遠いわけではない。

オラ、わくわくしてきたぞ！
え？俺が何をしてるかって？

・・・仕方無い。

静聴！！！！

諸君らに今回のミッションを説明しよう！

スタート地点はこの船の船首！

船室の窓から見えなくなっている地点！

ゴールは船の外壁に設けられた窓の1つ！

俺は！エルードとクライミングぶら下がり 人工登攀を利用して、ゴールを目指さなければならぬ！

理由？

そんな些細な事は気にするな！

ただ中を覗かせてもらうだけだ！

大丈夫！犯罪ではないから！

・・・見つからなければ。

うん？

何故『窓の中』を覗くのかだって？

そんなモノ、『窓』があるからに決まっているだろうが！

人は山があるからこそ、そこに昇るという選択肢を選ぶ。

つまり、誰だってそーする、俺だってそーする。

それだけの話だ！

既にそうすると決めた以上！

宇宙の果てとか人類の行き着く先とかみたいに、考えるだけ無駄な

ことなんだ！

そして俺はまた1つ船の外壁の継ぎ目に指を這わせ、僅かな凹凸に
全体重を任せる。

船の各部は相棒の能力で補強されているし、最近改修されたそうだから、簡単に壊れることはないだろうが当然足場なんてものは無い！
つまり、俺の真下には海！

僅かな失敗が即、死に繋がる実にタフなミッションだ！

だが、俺はきつとやり遂げてみせる Z E !

数多の同志たちが俺に託した未来……。そして、俺自身の栄光のロード。それをムザムザとこんなところで潰されはせん！
しかるに！

あの、無表情な顔の下に隠された、素晴らしい可能性！

それだけは見逃すわけには、いかない！

慎重に材木の継ぎ目に手を這わせ、慎重に、慎重に、ゴールに向かっていく。

能力を使用出来ないため、握力と腕力の全てを駆使しても、いつものようには行かない！

こんな時、相棒の力を使えば苦勞をせずに済むものを。

そんな考えが脳裏をよぎるが、しかし、現実是非情。

俺は親切にもこの船に乗り込んだ当日に誘ったが、その直後相棒はガチで殴ってきた！

一分とかからずに沈められた俺は、独自に計画の遂行を胸に誓ったが敵もさるもの。それ以来、彼女の風呂の時間はずっと見張られていた！

だが、料理のために相棒が厨房を離れることが出来ない今こそが好機！

いざ行かん！天国へ！
ヴァルハラ

「……何処に行こうって言うんですか？こんな、良い月夜に。」

決意を胸に、あと数メートルの位置にある窓に近付こうとした瞬間。なんだか聞こえてきた声に対して俺が感じたのは激しい怒りだった。両手両足を使ってギリギリの部分に掴まっているせいでそちらを見る余裕もないまま、返事を返す。

馬鹿野郎！

大きな声を出したら見つかるじゃないか！

俺が！

最近じゃカミラちゃんは屠殺寸前の豚を見る目で見てくるし、相棒のツツコミは命にかかわるレベルになってきてるんだぞ！

俺を二重の意味で殺すつもりか！

言っているのが誰なのか、とかは考えもしない。
多分、内なる自分とかアレ系のソレだろうから、良心ゴーストが俺に囁く幻聴だろう。

「なら、止めれば良いんじゃないですか？」

これだから素人は！

今日と明日が違うように、同一人物のものであっても、時間の経過と共に女体は変化するものなんだ！

特にあのくらいの年頃の女の子は！

微にいり細にいり毎日観察していなければ！素晴らしいボディライオンはすぐに変化してしまうんだぞ！

つまり俺がやっていることは、回り回ってカミラちゃんのためなんだ！

それにこの船には俺以外にそれをこなせる人間はいないんだ！

「・・・何故です？」

相棒は坊やだからさ！

そう！これは決して邪な気持ちよこしまではない！

言ってしまうばこれは俺の情熱パドスであり、責務タスクなんだ！

「・・・何ですか、その異次元の論理展開は？気持ち悪い上に清々しいほどに自己中心的な考えですね・・・。。まあ、いいでしょう。少し、海水浴でもして頭を冷やしてきて下さい。」

え？

ふと自分が誰と話しているのか疑問に思った瞬間、何かが近付いてきた。

じやらり、と音がして、何かが暗闇の中、胴に巻きつくと、締め上げってくる。

何だ、これ？

引っ張っても取れない。当然だ。今は能力を使ってないし。

混乱している内に、外壁を掴んでいた手に衝撃。

あれ？

悪魔の実の力に振り回されないようにかなり力をつけているはずだったが、外壁を掴んでいた手をあっさりと蹴り一発で外され、生命線を物理的な意味で失った俺は、重力に引つ張られて墮ちていく。自然と上を見上げる視線の先には、満月を背景に、相棒が微妙な表情でこちらを覗きこんでも身体が海水におぶぶうぶぶぶぶぶぶぶあばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばあ

sideギア

私が厨房に入った後、不自然なほどタイミング良く私の視界から外れたバイスを追い、不埒な行動をしようとしていたところを、上空から監視し、しかる後^{のち}に海に叩き込んだ後。

静かになつてから、落とす前にくくりつけた鎖を引つ張り、甲板に上げる。死なないとは思うが、それでも自分の行動に責任を持つ意味で、隣で本を開いて読み始めた。

調理は既にほとんど終わっているの、問題無いし。

今日は満月なので、明かりが無くてものなんとかが外で本が読める。尤も、十分な光量とはいえないだろうから、長時間続ければ視力にはそれなりにダメージがあるのだろうけど。

だが、すぐ近くからうめき声が聞こえてくるせいか、思考は紙に書かれた文字列よりは、さっきまでのバイスの行動を反芻している。因みに本人はずぶ濡れで横たわったまま「スネ エク！返事をしろ！スネエエエエク！！」等と言っているが、本当に意識が無いんだろうか？

頬を数回ビンタしてもまだ気がつかないけど。

・・・それはともかく、悪魔の実の能力者は総じて海に弱い。今、痙攣しながら口から海水を吐いているバイスも、その例外ではない。

それを知っていて、船の外壁を這って進むとは、そこまで見たかつ

たんだろうか？

私も男性ではあるため、同年代の異性にそういう感情を抱くのは理解は出来なくもないが、しかし同調は出来ない。・・・そのバイタリティは素直に凄いと思うが。

「あれー、どしたの？」

湯上りの髪をタオルで拭きながら船室から出てきたカミラが問う。

私は苦笑を返すと、本を閉じた。

「いえ、どうもバイスが海水浴がしたいらしいので、協力してあげただけです。」

カミラは無表情のまま首を傾げていたが、私がそれ以上説明せずにいると、「そっかー。」とだけ言ってバイスの前まで歩いてきた。その表情はいつも通りの無表情のはずだが、しかし決定的に何かが違うようにも見える。

もしかして、あれがバイスが言っていた”屠殺寸前の豚を見るような目”なのだろうか。

たしかに、可哀想だけど仕方無い、といった顔つきだ。

だとしてもそれは彼の言動が原因なので、私が口を挟むようなことではないだろうけど。

「さて・・・このまま風に恵まれれば明日には海上レストランに到着するでしょう。」

「うん。楽しみだよねー。美味しいらしいしー。」

私が話しかけると、カミラは振り向いた。

相変わらず無表情だが、声は弾んでいるから楽しみにしてくれているのだろう。

少し、私も嬉しくなってきた。

「ええ。以前から話だけは聞いていましたが、行く機会がありませんでしたからね。寄ってみるのも良いでしょう。」

「そだねー。うーん、近い海域に海賊もいるみたいだけど、かなり寄り道しないと駄目だから、今回は没かな？2000万ベリーはちよっと惜しいけどー。」

正直に言えば、海賊など全て根絶やしにしたいが、それを長々とやっているほど私達・・・いや、私には余裕があるわけではない。

実際、今までも近場以外の海賊は無視していたので、今更ではあるが。

「ええ。海上レストランに寄った後は補給をして・・・、始まりと^ロ終わりの町に向かいましょう。」

そして、その町を越えれば、後は偉大なる航路が待っている。

私の、目的がいる場所が。

そんなことを内心で考えながら、私は笑顔で頷き返した。

第二十話 向かうべき場所へ（後書き）

なんだろう、自分で書いててバイスが果てしなく気持ち悪い。

第二十一話 苦い記憶

悪であれ、という願いなど存在しない。

誰かにとつての正義と愛が、他の誰かにとつての悪と墮落になるだけだ。

相対的な立ち位置が、単純な物事にいくつもの意味を与えることは珍しいことではない。

私と他の誰かが他人でしかないように、私の正義と誰かの正義は相容れない。

だとすれば、両者が相対した時、選ばれる選択肢は1つしかないだろう。

どちらの正義が相手を否定し、どちらの愛が相手を超克するのか。選ばれるべきはどちらなのか。

ただ、そのときだけを私は待っている。

闇。

闇だ。

視界は一部を除いて、先がまるで見えない闇。

それしかない。

見えないものをそれしかない、というのは少し語弊があるかもしれないが、そうとしか表現できない。

何も見えない。自分の姿さえも。

かろうじて感覚だけはあるが、身動きはほとんど出来ないし、目を閉じることもできない。

そんな場所で、「」は一人で立っていた。

「」は悪夢に捕らわれている。

漠然とそう感じたのは、もうずいぶんと前の話だ。今もそのときの状況と寸分と変わらないから、もしかしたら一生このままなのかもし

れない。

それはなんとなく嫌だな、と思うがそのために出来ることもない。
今のところは。

つまるところ、今現在「」はベッドの中で眠っており、その自覚がある。所謂、明晰夢をみているわけだ。

といったも、以前読んだ書物にあつたような夢の中だからこそ出来るような自由なことは一切出来ない。ただ、その自覚があるだけの話だ。

それも、何回も同じ夢を繰り返していくうちに、ようやく身についた程度のものだ。

この夢のルールはいつだって一つ。

それが終わるまで、最初っから最後までただ見ている、それだけだ。視線を唯一見える方向に向けると、既に暗唱できるほど見飽きた劇が繰り広げられていた。

一人の男と、一人の女と、一人の少年のなんでもない日常を綴った劇。

台詞は無い。

音も無く、しかし情感たつぷりに、劇は進んでいく。

悲劇でもなく喜劇でもない、ありふれた幸せと、それを享受する人々たちを取り扱った劇だ。

演劇にあまり詳しくない「」でも、誰かがそれを見るほどの価値があつたとは思えない。

実際、現実的な生活とはそんなものだろう。自己を構成するものがありがたみなど、自分以外には理解出来ないものだ。ときに、自分ですら判らないのだから。

劇は既に終幕に至っていた。

男と女は少しずつ老い、代わりに少年は成長していく。

時の流れの中でそれは実に自然なことで、誰もそれが覆されるとは思っていない。

今日の幸せが、明日も続いていくことを祈る。

いつだって、人間に出来ることはそれだけなのだから。

だから、壇上が血と土に汚れる場面でも、今回こそはもしかしたら、
思っててしまう。

あるいは、悲劇は回避されるのではないのだろうか、と。

だが、間違い無く「」の内面世界であるはずのそれは、毎回「」の
期待を裏切り続ける。

それは、「」が『そんな事は起こらなかった』と知っているからこ
そか。

それとも、救いを渴望していながら、それが存在しないと知ってい
るからか。

唐突に薄汚れた壇上では一人が死に、一人が去り、一人が絶望の声
をあげて泣き叫んでいた。

他には何も無い。

悼む者も、手向ける者も。

胸をうつような物語も、頬を濡らすような別離も。

途中から別の物語の筋書きを差し込まれたような奇妙な感覚が残る
だけ。

だが、それでも出来損ないの悲劇は続人主く。

それが、どれだけ救いが無く無慈悲なものだったとしても、あくま
で確実に、残酷に。

いつの間にか舞台は消え、ただ一人残された人物が、感情の無い顔
をこちらに向けていた。

視線の先には、「」がいるのか、それとも別の誰かに向いているの
か。

その口が機械のように動き、言葉をつむぐ。

誰か、助けて。

この過去を反芻はんすうするだけの悪夢から。

そんな、音を伴わない誰にも届かない言葉は、「」の内面に反響し
て消えていった。

sideカメラ

「いらつしゃいませ、イカ野郎。」

海上レストラン、バラティエ。

生憎風には恵まれなかったけど、あたしたちはここまで来ることができた。

夕べ、なんかギアに制裁された変態さんを新しく用意したタコ部屋に閉じこめて、その部屋で自転車型の人力機関をひたすら漕がせてたのが良かったかも。

本人はあたしの横で普通に歩いてるから、これからも頑張ってもらおう。

内心でそんな皮算用をしていたあたしにかけられたのが、さっきの言葉である。

揉み手をしながら、あたしたちにそう言ったのは、なんだか強面のおじさんだった。

坊主頭に捻り鉢巻。調理服みたいなもの着てるけど、黒服を着たほうが良さそうなくらい筋肉モリモリだし。バイスさんと同じくらい。本人が接客のために浮けべてる笑顔も、生憎だけど本人が思っているような効果は無さそうだ。

というか、昔見た顔面神経痛の患者みたいに見える。

子供が見たら、多分、というか絶対泣き出すような表情だった。

何かおかしくない、これ？なんていうか、全体的に。

店員の見た目〓料理の味ってわけじゃないことくらいは道理として判るけど、どうなんだろう、コレ。

正直あたしは微妙な気分だったけど、ギアの方は特に何も思わなかったのか、席にエスコートされていった。大物だなあ。

それじゃあ、あたしも付いていけないわけにはいけないので、一緒に案内される。

三人掛けのテーブルに着くと、早々にメニューを見て注文。

なんだか鬱陶しいくらいにあたしに話しかけてきた店員もいたけど、

辛辣なことを言ったらショックを受けた顔ですぐに厨房に戻っていた。具体的には、片目を隠した変な前髪とか、渦を巻いた変な眉毛のことを言っただけなんだけど。

フォローをしようかと一瞬考えたけど、やめておく。

なんとなくだけど、あの人にはウチの変態さんと似た臭いを感じたし。

少し甘くしたら、すぐに付け上がるだろう。

最近視線をキツくしたせいかな、今はあたしじゃなく、他の女性客の身体の一部を見て鼻の下を伸ばしてる筋肉男を見て、そう結論した。つていうかどうしてギアみたいに落ち着いていけないんだろう、この人。

首が百八十度回転した上で真後ろを見てるから、相手の女の人も引いてるよ？

つていうか本当に人間なの？

まだツレの男の人にはまだ気づかれてないみたいだけど、喧嘩にならないうちに、踵落としても決めて落ち着かせよう。

そう心に決めた後、あたしはテーブルクロスの下で足を振り上げる。狙いは変態の足の甲。振り上げ、落下する速度を加え、踵がその上に突き刺さるッ！

「いぎやッッ！！؟؟？」

思わず出た悲鳴がレストラン内に響く。

変態さんはあたしの方を睨んでくるけど、あたしは知らんぷり。

「どうしたんですか、バイス。ついに病気が悪化しましたか？」

「相棒、心配してくれてるんだらうけど、色々と酷くねえ・・・？」

涙を浮かべながらギアに抗議する変態さん。

正当な評価だと思うけどなあ。

「でも、これがツンデレってやつなんだろうと思うと、これはこれでアリなのかも・・・。」

「・・・なんですか、それ？」

「説明しよう！ツンデレとは・・・ッ！『ツンツンデレデレ』の略

で、『初め（物語開始段階）はツンツンしている（＝敵対的）が、何かのきっかけでデレデレ状態に変化する（変化の速度は場合による）』、もしくは『好意を持った人物に対し、デレっとした態度を取らないように自らを律し、ツンとした態度で天邪鬼に接する』ような人物、またその性格・様子のことを言うのだああああッッ！

「・・・聞いたことありませんねえ。」

「そりゃそーだ。今考えたし。」

二重の意味でずっこけそうになった。

それと同時に、今まで感じたことの無い感情が変態さんに芽生えたような気がする。

この気持ちに名前をつけるとしたら

殺意かもしれない。

すぐに言い返そうと思ったけど、ふとその姿をシミュレーションしてみると、怒られながらも、どこか嬉しそうな顔の変態さんが思い浮かぶ。

想像しただけで腹が立つてきた。

「そうだねー。バイス^{変態}さんが、今すぐ死んで生まれ変わって虫けらに転生して、あたしがそれを踏み潰すっていう関係なら、今よりは好きになれるかもしれないねー」

「なら、脈はあると見たッ！」

「無いですよ！どこまでポジティブなんですか！？」

「フツ・・・。そこが素人の浅はかさなんだよ、相棒。『好き』の反対って知ってるか？『嫌い』じゃあな・い・ん・だ・ぜ？『無関心』。好きでも嫌いでもないから、どーでもいい。それに比べれば、今の言葉はアウトコースにすら入っちゃいやしねエエ。」

「話し方が心底ウザったいことは置いておくとしても・・・、死ななきゃ駄目な時点で大概アウトだと思っんですが・・・。」

全くもって同意するけど、変態さんは良いことを言ったような顔をしたままギアのツッコミを聞いてなかった。

自己陶醉もここまでくると技能の1つに数えることができるんじゃないだろうか？

「まあ、放っておいてあげようよ、ギア。『夢』を持つのは人間に最低限許された権利だと思うし！。それが全く実現不可能な妄想でも、『夢』は『夢』だし。」

あたしが言つと、少し寂しそうな表情をした後、ギアは何かを振り切るように口を開いた。

「・・・そうですね。ただ、危なくなったら、すぐに教えて下さい。もし実力行使に出ようとするほど阿呆だったら、きつちりとオトシマエをつけさせますから。」

あたしはなんだかやけに真剣な顔をしたギアが可笑しくて、からかってみたくなってきた。

朴念仁なギアがどんな反応をするのか、興味もあるし。

「あは。そうなったら、ギアにも責任とってもらおつかなー。」

「ええ。勿論。クルーの安全を保障するのは船長の務めですから。」
アウチ。

冗談めかして言った科白は見事に完封された。

しかも、明らかに意図して言ったわけじゃない発言に。

今ほど自分の無表情に感謝したことは人生では無いよ。

別に本気だったわけじゃないけど、なんだか、試合に勝って勝負に負けた気分だなー。

第二十二話 旅路は進み、世界は回る

この世界の何処かにありとあらゆる疑問の答えだとか、『真理』なんてものがあるとしたら、それは実に救われない話だろう。

それは、それを得ようと妄想するものよりも、その欠片すら与えられずに苦しむものを顧みることのない、結果だけを求める墮落の言葉だからだ。

何処にも、誰にも本当のことは判らない。

それを決めることが出来るものも居ない。

それでも日は昇るし、私たちは生きていかなければならない。

今の私たちに出来るのはそれだけなのだから。

バラティエの料理は実に素晴らしかった。

前もってレストランのある場所から、海の幸が豊富であることは予想できていたが、それ以外にも、各種の野菜やスパイス等、どの店にも負けない味と拘りが感じられた。

料理の腕は半人前以下の私だが、食べる客としてはその試みは好ましく感じる。

因みに翌日から、本人の希望もあり料理当番はカミラのみになった。現在の彼女の野望はバラティエで食べた料理の再現だそうだ。

今のところ試行錯誤を繰り返しているが、彼女の器用さと直感は常人離れしているから、完成するのもそう遠くない話だと思う。

それに正直、既に腕前に明確な差が出来ているので、私もありがたい。

私で作れるのは相変わらず多少残念な家庭料理だからだ。

おやつ関係なら当分の間負けるつもりは無いが、それも順次レシピを教えているから、時間の問題とも言える。私が知っているのはあくまで家にあつた本やレシピ集を読んだことがあるおかげだし。

バラティエの味が気に入ったのなら、数日間その海域で逗留する案もあったが、これはカミラに反対された。

当初の予定よりペースが落ちてきているから、ということらしいが、これは個人的にもありがたかった。

私達がバラティエを出て一時間ほどした後、海軍の軍艦が一隻そちらの方に向かっていたので、トラブルの元になると思われたからだ。法を遵守する側も法を無視する側も、あまりお近づきになりたい相手ではない。

何の後ろ盾も無いうえ、守らなければならない規律があるのなら、尚更だ。

さて、現在の私が何をしているのかと言うと、特別することも無いので、甲板の上でチェアに座って日向ぼっこをしているわけだが。

「……ハツツ……、夢か……。良かった。本当に良かった……。」

隣のチェアで眠っていたバイスが突然起き上がると、周囲を見回した後、そんなことを言う。

またいつもの奇行かな、と思いながら、読んでいた本にしおりを挟むと、そちらの方を向いた。

「……どうしたんですか？ なんだか息が荒いようですが。」

「あ？……ああ。少し、怖い夢を見てさ……。世界が終わったような衝撃的なヤツだったよ。」

そう言うバイスの顔色は青くなっている。よほどショックな夢を見たようだ。普段と同じ意味不明な話なら無視しようかと思っただ、体調を崩すほど大事なようだしあまり他人事でもないので少し心配になってきたが、すぐにそれを後悔することになった。

「世界中から……、世界中のありとあらゆる起伏が無くなって、後には平原しか残らないっていう夢なんだ。……。思いだすだけで、震えがくる最悪の悪夢だったよ。」

「……？」

バイスは言っている内に夢の内容を思い出したのか、両手で頭を抱

えて顔に汗をにじませているが。

意味が判りません。

夢の内容も、それを恐怖する理由も。

「つまり女の人の身体の起伏もなくなってくるわけだから、世界中がドラム缶体型で満たされるんだ……。」「

「それがどうしたんですか？」

「どうしたかだってえええ！？絶望じゃないッ！そんな世界、あるのは絶望だけじゃない！希望なんて何処にも無いじゃないのよオオ！」

何故いきなりキレるのでしょうか。

しかも微妙にオネエ言葉で。いつもとは方向性が違うけど、鬱陶しいのは変わらないんですねえ。

「平面愛好主義者の相棒には判んないかもしれねえけど、それって世界の終わりなんだよね。」「

何故私が平面愛好主義になるのだろうか？

首を傾げていると、それを見たバイスが口を開いた。

「もしかして、お尻原理主義だった？それともマイノリティなお腹教理主義とか、太もも思想派とか？」

・・・ああ。成程。

そこまで言われれば私でも判る。

というか、こんな日も高いうちから猥談とは、私を何だと思っているのだろうか？

「私は女性の身体の造型を、何処か一部だけで優劣を決める愚を理解しているだけです。」「

「そんなこと言っついて、後から俺たちおっぱい過激派の仲間入りをしたくなくても入れてあげないぞ！」

「結構ですよ。というか、普段からそんなことを言っていると、またカミラに聞かれますよ。」「

彼女は今は船室で海図を見ているはずだが、いつ甲板に出てくるかは判らない。

ただでさえ普段から扱いが悪いのだから、自分からそれを数段下の落とす理由を作ること無いだろう。

バイスも私の忠告に心当たりがあったのか、目を伏せて「最近はい終わったトイレットペーパーの芯を見る目で見られるんだ……」などと言っている。

もはや好きとか嫌いとかの次元ではなく、『ただ捨てに行くのも面倒くさいが、とはいえ放置するわけにもいかない』ということだろう。だとしたら実能的を得ているが。

それから数分は微妙に気まずい雰囲気でしたが、不意に立ち上がったバイスが私に話しかけた。

彼の長所は細かいことを引きずらないことだろう。短所が何かは言うまでもないことだが。

「武器が……欲しいです。」

「はあ。なら、買いに行けば良いんじゃないですか？」

頬を赤く染め、何か言いにくそうにもじもじとバイスは言った。

カミラがそんな仕草をすれば、いくらでも財布の紐を緩くしたくなるのは男として当然の反応だが、筋骨隆々とした男がしても、正直気持ち悪いだけである。

それも、受動ではなく、能動的な不快さというか、見ている者の精神を陵辱してくるような意図すら感じられる。誰か交代してくれないだろうか？

目の毒でしかない物体が視界に入っていると、自然と弱音が出てきそうになった。

私に出来るのは気の抜けた返事をしながら、なるべくバイスの姿を見ないように目の焦点をずらすことくらいだから、無理も無いだろう。

たしか、あと半日ほど進めば小さな町があるはずだ。

途中での賞金首狩りと換金をしながらの旅路であるため、ローグタウンまではまだ数日はかかることだろう。

適度な陽気に潮風が気持ちいい。

誰とは言わないけどこれで話しかけてくる無粋な人がいなければ最高なんだけどなあ。

「いや、出来れば丈夫なやつがいいからさ。俺が使うと、刀とかすぐに壊れるんだよね。だったらいつそ相棒に作ってもらおうかと思っ
て。」

たしかに、彼は筋力が惚れ惚れとするほど発達しているが、それ以外はどうかと言われると、微妙な返答しか出来なくなる。

暇な時間を見つけては何度か模擬戦をしているから、彼の實力は大体把握している。

スピードはある。

パワーもある。

タフネスもある。

しかし、技術が致命的に無いのだ。

具体的に言うと、力任せに剣を振るう雑魚海賊と同レベル。

剣術を使うことが出来ない私の目から見ても素人同然だ。

最初会ったときのように能力を使用すれば技術以外を圧倒的に底上げすることでそれも改善できるのだろうが、今度は敵味方の区別が出来なくなってしまう。

仲間としては使いどころが難しい能力者だ。

適性のあるなしもあるだろうが、武器を使うということはそれだけ敵との間が開いた状態で攻撃が出来るということ。

今みたいに動体視力とスピードに頼った戦闘は、常に相手のリーチ内に飛び込まなければならぬ、という危険が付きまとう。

それに、本人が言うように彼の馬鹿力で振り回したり叩きつけていては、どんな武器でも寿命は長くはないだろう。なにせ、名刀と棍棒の扱いが全く同じなのだから。

「別に構いませんが、錘を入れないと軽すぎてかえって扱いづらいかもしれませんか？あと、形状は刀で構いませんか？」

「うん、あー、いや。錘はいいや。とりあえず作ってもらってから、使い勝手を試してみるから。それと、相棒がつくる武器ってどんな

形でもアリなの？」

「ええ。基本的にはどんな形状でもつくることができます。ただ、全く変形しないので、その意味では普通の武器とはまた勝手が違いますが。」

ひとしきり説明を聞いてから、形状の注文を受けると、私は微妙な表情になった。

そんなものをどうやって使いこなすのか、不思議だったが、とりあえず能力を発動して黒い靄で武器を作り出す。

「おお〜。」

感嘆をもらすバイスの両手ではバットが握られていた。それも、表面には釘が刺さったような形で鋏型の靄が飛び出している。所謂釘バットの形である。

凶悪そうにも見えるが、それを持って海賊と戦いあう画を想像すると、微妙な雰囲気になった。

強くはあると思うが、何故か気に入らないのだ。使うべき場所が著しく違うような気がして。

「一応、注文通りに仕込み杖の機構も取り付けてあります。」

「へえ〜。凄えね、相棒。普通こんなの作ろうとしたら、かなり時間と手間がかかるってのに。10秒もかかってないし。」

バイスは感心したように言うが、実はそれは取り立てて特別なことではない。一秒以下で勝敗が決まる斬った張ったの世界で武器を出すのに何分もかかっていては、それはただの自殺志願者でしかないのだ。バイスに作ったようなギミックを加えないなら、刀数本は一瞬で出来上がる。

「これで明日はホームランや！」

野球するように風を切って素振りをするバイス。剣筋を考えないですむ分、彼には扱いやすいのかもしれない。

剣を相手にした時も、使い方によってはソードブレイカーの真似事が出来るだろう。

そう考えると、意外と使い道もありそうだ。

これから私達が目指す場所では、より大きな力を求められることになる。

恐らくは、世界最強の一角にすら挑み、勝利することができる力が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0951s/>

出会いと別れは嵐の予感

2011年9月21日00時20分発行